View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tsukuba Repository

マックス・ミュラー

人生のタベに

Max Muller: Life and Religion

津城寛文訳

筑波大学附属図書館リポジトリ版　2017

緒言

本書は、夫を称賛する多くの読者の希望に応えて、編まれたものです。それらの方々は、夫のさまざまな著作や、とりわけ強い関心が寄せられた『生涯と書簡』の中の、感動的な文章を集めて、手元に置いておきたいという希望を述べられました。

私はこの機会を得て、夫の多くの私信や、また遺稿からの抜粋も、本書に加えることにしました。とくに後者は、このような得がたい機会がなければ、私たち家族やごく親しい友人たちに知られるだけで、世に忘れ去られてしまったことでしょう。

『生涯と書簡』を読まれた方には明らかなように、マックス・ミュラーはごく若い頃から、この人生は叡知によって秩序づけられているという確信を抱いていました。たとえば「すべては私たちのほんとうの幸福のためにあります。たとえそれがつねに目に見えるわけでもなく、たとえまたわれわれの歩みを導く叡知の深さが計り知れないとしても」というように。それらを読んでおられない方々には、この抜粋に見られる揺るぎない信頼と信仰は、一つの啓示であるかも知れません。というのは、夫がそのような主題について他人に語ることは、稀だったからです。しかしまさにこの信頼と信仰によって、夫は、若き日々の苦しい生活の中にあって、力づけられました。また心底からの願いがとうてい叶えられないかに思われた日々にあっては、諦めるということを教えられました。のちに、愛する人々が自分から奪われていくとき、また自らが長く苦しい病気の床にあるときも、この信頼と信仰が夫を支えたのでした。

夫の内心の声を収めたこの小著が、同じような試練に耐えている人々の助けとなり、慰めとなりますように。また、目の前に延びた人生の道が、今は陽の光に満ちていても、やがて避けようもない悲しみに出会うとき、その人々を励ますものとなりますように。私は、心からそう願っています。

ジョージーナ・マックス・ミュラー

一九〇五年六月一一日

人生の夕べに・目次

緒言　ジョージーナ・マックス・ミュラー

生きる術	奇跡
美	音楽
聖書	自然
子供たち	曖昧さ
ロゴスなるキリスト	老年
死	宗教そのものと諸宗教
神的存在	啓示
神聖なるもの	リグ・ヴェーダ
疑い	科学
宗教の進化	自己
信仰	悲しみと苦しみ
神の父性	魂
未来の生活／生命／人生	神智学
無限なるもの	真理
知識	神の意志
言語	不思議
生活／生命／人生	言葉
愛	仕事
人類	世界
精神あるいは思想	キリスト教

訳者あとがき

書誌データ

筑波大学附属図書館リポジトリ版へのあとがき

生きる術

お互いに理解しあうことを学ぶこと、これは大いなる生きる術(すべ)です。そして「互いに異なっていることを受け入れる」こと、これは宗教の比較研究がもたらす最善の教訓です。

＊

人生が調和に満ちた、美しい、有益なものであるべきだと思うならば、私たちは皆、より高級な音楽を学ぶ必要があります。若さと老いの間には、ある音階があります。それはあるべきものとしてそこに置かれているのであって、それなしには、人生は単調なものになってしまうでしょう。ほんとうの生きる術とは、これらの音階や多様性を用いて、完全なハーモニーを作り上げることができるものです。大きな悲しみすら、私たちの愛着をこの人生から引き離して、よりよい人生へ導いていくという、一つの祝福なのかもしれません。……そうしたことについて、もちろん私たちは何も知りませんが、この人生を支えている叡知と愛とを見れば、そこにあらゆる希望を見いだすことができます。私たちは、希望と信頼をもつよう、定められています。そしてそれはしばしば、見て知るよりも難しいことです。あらゆる技術の中で最大のものは、生きるための技術です。そしてあらゆる音楽の中で最高のものは、霊(スピリット)・精神のハーモニーです。人生にハーモニーとメロディーを与えるためには、学ぶべきたくさんの細かい楽則がありますが、欠かすことのできない通奏低音というべきものがあります。それが愛です。

＊

人々とともに平和に生活するために、何にもまして必要なものがあります。それはラテン語でいうフマニタス、ドイツ語でいうメンシュリッヒカイト、人間性です。これは説明するのが難しいのですが、いわば相手から恩義や感謝を求めることはできるかぎり少なくし、逆に相手が喜ぶことはできるかぎり多くし、しかも相手がそれに気づくことを期待しない、といった接し方のことです。人間は矛盾した存在ですから、私たちが感謝や友情を期待していないとわかれば、相手はそれだけ感謝と友情を感じるものです。最も野卑な人々でも、それぞれの長所をもっています。人々のよからぬ利己的な動機を詮索するよりは、善良な動機を捜し当てるほうが、はるかに面白く有益なことです。……人生は一つの芸術であり、サンスクリットその他を学ぶよりも、ずっと難しいものです。

＊

私たちは、自らを通して自分になるというより、むしろ他の人を通して、自分に成るのです。そして、人生の道を善人のみと一緒に歩み、善人とともに成長できる人は、幸いです。私たちが人を裁くとき、その人たちが育った環境の力を、実にしばしば忘れてしまうのは、驚くべきことです。召使いたちばかりか親たちまでが虚偽をはたらいているのを見ている子供たちに向かって、誰が「正直にしなさい」と言えるでしょうか。実に多くの子供たちが、尊敬する大人たちから、人生とはこういうものだとか、生活にはいろんな原理や規則があるとか聞かされています。こうしたことは、意識的あるいは無意識的に、子供たちの若い人生に影響を与えます。しかも私たちは、そうした相手の身になって判断するということを、ほとんどしないのです。

＊

もし自分自身と平安な関係にありたいならば、世間と戦いになることを気にかけてはなりません。　　（草稿）

美

美は私たちと無関係にあるものでしょうか。それはむしろ、私たちのうちにあるのではないでしょうか。私たちは甘さや苦さを、私たちが感じる甘さであり苦さである、と言いますが、それは私たちがいなければ、甘さも苦さもないからです。美についても、それと同じでしょう。この世界は、高価な鉱石に満ちた鉱脈のようなものです。そして人は鉱石を試金石で調べることで、はじめて黄金とそうでないものを区別することができます。では、美を調べる試金石とは、いったい何でしょうか。私たちは善を見いだすための試金石をもっています。利己的でないものは、何であれ善なのです。そして、何らかの意味で善でなければ、美でありえないのですが、すべての善はかならずしも美ではありえません。ではいったい、善なるものに付加されて、それを美なるものにするのは、いったい何なのでしょうか。それはプラトンにとってそうであったように、私たちにとっても、大いなる謎です。私たちは幼い時の夢の中で――あるいはそれは前世（フォーマー・ライフ）のことだったかもしれませんが――美なるものをじっとみつめたことがあるはずです。しかし私たちはそれを、なかば忘れられた夢の名残りのように、ぼんやりと思い出すことはあっても、けっして明瞭で完全な形で見ることはありません。私たちは、同じように理想的なるものをすべて思い出すことができず、まったく思い出すことのできないかわいそうな人たちもいます。……このように、私たちが知っているのは、美なるものの理想が私たちのうちにある、ということだけであり、それ以外のことは、けっして知ることがないでしょう。それはこの世のものではないのです。だから人間にはそれを定義することができません。しかしそれはこの世を支えています。だから人間はそれを感じることができます。それは時として、自然のほほ笑みとなって、私たちに出会います。また別の時には、神の眼差しとなって、私たちに出会います。大いなる過去、大いなる未来、彼方なるもの、より高い世界、秘められた生命、などなどが存在することを証しするものがあって、それが私たちの美なるものへの信仰となっているのです。

聖書

私たちがもし、古代の預言者の言語を、外面的、物質的な相でのみ理解することに固執するならば、彼らを故意に誤読することになります。その時、間違っているのは彼らではなく、言うまでもなく私たちのほうです。具体的なものと抽象的なものとの区別、純粋で精神的なものとそれに対する粗野で物質的なものとの区別、こうした区別が言語のなかで確定されるより以前には、話し手の意図は、具体的なものと抽象的なもの、物質的なものと精神的なものを、ふたつながら把握していたのです。そうした言語の使い方は、私たちにはまったく奇妙なものになっていますが、すべて本物の詩人の言語の中には、今も生き続けているものです。

＊

あらゆる正典（キャノン）には、新しい宗教の創立者の実際の教えが、反映しています。しかしその映像は、いくつもの時代や人間を通り抜けてくる過程で、かならず濁らされ、歪められています。

＊

旧約聖書は、ほかのどの宗教の聖典よりも、倫理的に高い段階にあります。他と比較することで、その価値が低められることは、けっしてありません。私はいつもそう断言してきたのですが、人々はそれを信じようとしませんでした。旧約聖書のもっている真の歴史的かつ人間的な特質を示すことは、いまだに、あらゆる意味で、きわめて有益です。旧約聖書のもつ高尚な特質は、それによっていささかも害なわれることはありません。

＊

私たちがほかの諸宗教の聖典を解釈するにあたって、慈悲と理性をもってすることを学んだとしましょう。いったんそうなれば、私たち自らの宗教を解釈するにあたって、慈悲と理性をもってすることは、いっそう容易になるでしょう。聖典の言葉に文字通りの意味を押しつけることは、もはやしなくなるでしょう。文字通りに解釈されると、それらのもともとのほんとうの意図は、失われてしまうからです。律法や預言者を解釈するには、それらを現代の英語で書かれたようなものとしてではなく、多くの困難な事態と多くの矛盾に悩みつつ書かれたのだという、真に歴史的な精神において読まねばなりません。古代の言語と思想を研究する歴史家にとって、それらは価値が疑わしいどころか、その時代とその純粋さを、また古代の聖典のリアルな真実を、強力に確信させる証拠なのです。私たち自らの聖典を、ほかの民族の聖典と同じように、つまりより慈悲深くもなくより無慈悲にでもなく、公平に扱うことにしましょう。それらがかつて占めていた地位や、かつてもっていた影響力は、歴史を無視した作り物の理論によって、過去三世紀の間にほとんど破壊されてしまいましたが、それがこうしてようやく回復されるのです。

＊

ただ宗教学（サイエンス・オヴ・レリジョン）を学ぶ者のみが、旧約聖書を厳密に歴史的な書物として、他の歴史的な書物の横にある歴史書として、尊敬することができます。歴史の法廷において、旧約聖書は何の特権を主張することもできません。というより、そのような特権を主張することは、最

も価値ある太古の記念碑の中にあって、まさに旧約聖書が占めている高い地位を、貶めることになるでしょう。さて、旧約聖書を構成するそれぞれの書の著者、あるいはとりわけそれらが書かれた年代について、激しい論争があります。そしてそれは、宗教に敵意をもった批評家たちの間ではなく、これらの問題を最も偏見なく、誠実で公平な精神で論じる神学者たちの間においてです。彼らの仕事のおかげで、かつて思慮深い神学者たちを悩ませた多くの難問が取り除かれ、旧約聖書は、古代の最も価値ある記念碑の中で、かつて占めていた正当な場所を回復することができました。……しかしそれが可能になったのは、旧約聖書を単なる歴史書として扱う、他の歴史書と同じように歴史学の批判に身をさらす、という条件の下においてだったのです。

＊

宗教の連続した成長の歴史を学ぶ者が、旧約聖書のそれぞれの書に、宗教的な概念の連続した発展段階を見つけようとしても、それは無駄なことです。どの書がより古く、あるはより新しいと判断すればいいのか、人はその術を知らないからです。ある書にみられる宗教的理想が、どれくらい古代の伝統に属するのか、あるいははるか後代の著者が考えたものなのか、彼は確かな答えを聞くことができません。出エジプト記の第三章で、神はモーゼに対して、至高なる方（ザ・シュプリーム）としてではなく、単なる神として啓示されています。現代の有能な学者によれば、出エジプト記が書かれたのはモーゼの死後おそらく一千年後のことでした。だとすると、出エジプト記を、モーゼとその同時代人の考えを正確に描いたものと受け取ることは、不可能ではないでしょうか？　次のようなまことに尤もな正論があります。「出エジプト記の時代に、人々はすでに迷信から解放され、神は真理と正義の中にのみ存在する宇宙霊（ユニバーサル・スピリット）である、などと教えられていたそうだが、その人々が九〇〇年近く後のヨシュアの時代になると、あらゆる迷信にまみれているではないか。こんな逆行はとうていあり得ない」と。それでもなお、旧約聖書はそこで語られている物語が起こった時点で書かれたのだとするなら、この逆行する運動はそれとして受け入れなければならないでしょう。しかしこれらの難題の多くは、近代のヘブライ研究の次のような成果を受け入れれば、取り除かれないにしても、かなり軽減されます。つまり、旧約聖書は非常に古代的な伝統を含んでいるかもしれないが、おそらく紀元前五世紀の半ばまでは文書の形をとることはなく、エズラの時代の考え方によって修正され、それと混じり合っているかもしれない、ということです。

［**原注**　読者に想起してほしいのは、ミュラーのこの講演が公刊されたのが一八九一年であり、これは英国の神学者たちの間で、旧約聖書の成立時期をめぐる研究の定説が一般化する以前であった、という事情です。今日では、ミュラーが言っている「旧約聖書」を「モーゼ五書」と言い換えたほうが、より正確でしょう。それぞれの書の成立年代についての近代の見解については、S・R・ドライヴァー『旧約聖書文献序説』参照］

＊

言語とくに東洋言語の研究者としての私たちは、旧約聖書の言語を原始的な東洋言語として解釈してよいのでしょうか、あるいはよくないのでしょうか？　人間の言語は、魂（ソウル）の最も聖なる神秘にヴェールをかけますが、真の信仰者としての私たちは、そのヴェールを通して見てよいのでしょうか、あるいはよくないのでしょうか？　また、アブラハムの試練と信仰

の高貴さを、ただの超自然の出来事レヴェルに引きずりおろす代わりに、そこに人間の魂のまことの試練を認め、神の友のまことの信仰を認め、暴風も地震も火炎も侵すことのできない、静まりかえった神の囁きに耳を傾ける、そのような信仰を認めてよいのでしょうか、あるいはよくないのでしょうか？　　（草稿）

＊

仏教徒たちがいろいろと巧みに語ってきたことを、私がまた何度も繰り返し語る必要があるのでしょうか？　彼らは言っています。創造の業はいかなる人間の理解力でもまったく知ることができず、それについて何か語ろうとしても、擬人化してあるいは神話的に語ることができるだけだ、と。　　（草稿）

子供たち

あの愛すべき小さな子供たちを見ていると、すべては明るく完全で、私の前にはまったく新しい人生が開けてくるように思われてきます。子供たちのおかげで、私ははるか遠い未来を待ち望むことができますし、この地上で私が果たすべき目的と義務を、まったく新たな目で見ることができるようになります。私の人生は、神から託された彼らの魂を養うため、彼らをこの世を超えた真の家にふさわしい人にするために、新たに生きるべき別のものになるのです。

＊

こと子供の教育に関しても、高い人生観をもって臨むことが可能かどうか、私は考えることがあります。教育は私たちに委ねられた大いなる仕事の一つであり、人生の真の宗教を作り上げています。次の世代を育てることは、けっして小さなつまらない仕事ではありません。それは、私たちがやりのこした仕事を、子供たちに引き継いでもらうことです。いかなる魂もかけがえがありません。すべての人が大切です。すべての人が、永遠につづく無限なる善の原因であるかもしれず、あるいは無限なる災いの原因であるかもしれないのです。

ロゴスなるキリスト

ギリシア哲学のロゴスという言葉は、一般に考えられているよりも、ずっと簡単に説明できます。ギリシア人にとって思想と言葉は不可分であったことを覚えてさえいればいいので

す。したがってそのロゴスという言葉も、内なるものと外なるものの区別はありながら、その両方を表現していました。思想なしに言葉がある、あるいは言葉なしに思想があるなどと想像できるとは、人間の心（マインド）のもつ異常さの中でも、最も驚くべきものの一つです。それらは不可分のものです。一方は他方なしにはありえず、考えることもできないものです。

＊

ほとんどすべての宗教において、神は人間から遠く隔たったままに、とどまっています。「ほとんどすべての宗教」と言ったのは、バラモン教においては、人間の魂（ソウル）とブラーフマンとの合致（ユニティ）――合一（ユニオン）ではありません――が、至高の目的とみなされているからです。これについて、現象的にはもちろん同じではありませんが、イエスもある時は「ロゴス」という言葉で、またある時は「子」という言葉で、神的存在との合致を語りました。思想と言葉ほど、また父と子ほど、緊密に結びついたものはほかにありません。それらは互いに区別できますが、分離することはできません。お互いが相手を通してのみ存在しているからです。このようにして、ギリシアの哲学者たちは、創造は神の思想あるいは神の言葉である、と考えました。そして「人間」という思想は自ずと至高のロゴスとなり、億万の人間の中に実現され、イエスにおいて最高の完成をみました。思想と言葉は、お互いを通してのみ存在できます。ちょうどそのように、父と子はお互いを通してのみ存在しうるのです。イエスが自らを神の子と感じてそう宣言し、また「私を信じる者は兄弟である」と宣言するのは、この意味においてです。この啓示あるいは霊感は、イエスを通して人類にもたらされました。父を知る者は子のほかになく、子は父の胸に抱かれて、望む者たちに父を啓示するのです。これが言葉の真の意味での、キリストの啓示です。

＊

私たちは今この時代に、ロゴスの教義をあまり強調しなくなったかもしれませんが、当時、つまりヨハネ福音書の時代には、それはキリスト教のすべての教えの中でも、核心をなす生命力に満ちた胚種でした。アタナシウスその他の古代教会の教父たちの著作を読むと、驚くべきことに、すべてがかならず言葉（ロゴス）を出発点とし、その上で言葉は神の子であり、神の子はナザレのイエスである、という証明の仕方をしているのがわかります。そこでは、宗教と哲学が密接につながっているのです。

＊

ギリシア哲学が正しく推測したのは、人間はほんとうは神の子であるが、地上ではその本性が実現されたことはない、ということでした。この信仰のほかに、ほんとうのキリスト教はありません。まさにここにおいて、アーリアとセムという二つの偉大な民族の知的潮流が合流し、ユダヤ人が待ち望んだメシアは、神のほんとうの子であるロゴスとして、認識されたのでした。そして、つねに至高の言葉、ロゴスでありつづけた神の子は、すべての人に対して、いつかはそうなり得る可能性を啓示し、その道を開いたのです。

＊

人間には父がいて、人間のほんとうの存在はほんとうの神の中にのみあること、そして、すべての人間は同じ父の子として、神とキリストに等しい性質をもつこと、これらを知ることの中に、永遠の命があります。

＊

神の子を信じることで、永続する命が与えられるのは、なぜでしょうか？　イエスは自らが神の子であるという自覚によって、ほかの人間たちも神の子であると宣言したのです。これらを知ることで、何か神聖で永遠のもの、つまり神の言葉、あるいは神が送って下さった子が、私たちの内にも宿っていることが確信でき、それによって私たちには永遠の命が与えられます。ただし、イエスその人は、子として産まれた唯一の人であり、世の光なのです。人間の中に暗いまま横たわっている神聖な理想を、イエスが最初に成就し、万人の目に見えるものにしました。これによって、潜在的にはずっと神の子であるすべての人間が、実際に神の子となる可能性が開かれました。

＊

人間はキリストと同じ親から生まれた兄弟であるという主張に対して、神とキリストを崇拝する純粋な動機から、反対する人々がいます。これはまだ、全面的に許容できます。しかし彼らが、キリストと人間の違いは程度の問題ではなく質の問題だ、というならば、それは間違っています。自ら信じているつもりのキリストの教えを、彼らはまったく無にして、キリストの受肉という教えを否定しているのです。

＊

アンマーガウの演劇[ドイツ・バイエルン州のアルプス山麓にある村で、村人によって演じられる有名なキリスト受難劇。一七世紀以来一〇年ごとに開催]は、まことに力強いにちがいありません。キリストのほんとうの人間としての特質を、人々に強く印象づけることほど、今の時代に必要なことはない、と私は確信しています。賛美歌や信仰箇条の飾り立てた表現に押しつぶされて、今やほとんど消えかかっていますが、それでも、わずかに伝わった彼の無私の生涯の単純な物語は、後世の神学の最大級の賛辞より、はるかに偉大です。かつて愛した人間を死によって失うとはどういうことかを知っている人ならば、故人の生前の人間的なことをすべて忘れて、彼の内なる永遠のものだけに心を留めることなど、どうしてできるでしょうか。キリストが十字架に掛けられて犠牲になったのを見た時、彼の友人たちや弟子たち、また彼に導かれ救われた者たちが、いったいどんな思いを抱いたか、その人にはよくわかるはずです。　　（草稿）

＊

イエスは人間と神との間の障壁（バリア）を破壊しました。最も聖なるものを覆っていた薄布（ヴェール）は剥がされました。預言者がぼんやりと見たものを、人々ははっきり見ることを教えられました。人間は神の近くにあり、神は私たちすべての近くにあること、エホヴァは遠くに居られるという古いユダヤの神観は、神を過度に崇拝するあまりの考えであったこと、それは人間の心を、愛ではなく恐怖で満たしたこと、などです。イエスは新しい教義を教えたわけではありませんが、しかし古い誤謬を取りのぞきました。その誤謬、つまり神に対する奴隷的な恐怖がいったん取りのぞかれると、人間の心は神に対する古くからの信頼を取り戻し、失われていた息子のように、別れていた父のもとに帰ることになりました。人間が何かになりうるとしたら、神が創った通り、神が望む通りにしかなりえないと、感じるようになりました。神

と人間とのこのような親密な関係に、もし名前をつけなければならないとしたら、父と子よりも相応しい呼び方があるでしょうか？　　（草稿）

＊

イエスをあらゆる人間的なものを超えたところに祭り上げるため、彼の実際の人間らしさを削り取った人々は、そうすることでイエスの業（わざ）を台無しにしました。キリストが私たちに教えに来たのは、彼が何者かということではなく、私たちが何者かということでした。人間が神の子であるということを学びとらなければ、人間たちは失われたままであるということを、彼ははっきり見てとったのです。彼のすべての熱望は、もし神への愛という深い熱望から湧きだしたものでなければ、空しいものでした。そして、私たち自らとまったく別のものを、私たちはどうして愛することができるでしょうか？　私たちの中に、いかに小さなものであれ、神に似たものがあるからこそ、私たちは私たちの神を愛し、神に引き付けられるのを感じ、神の中に私たちのほんとうの存在をもつことができるのです。これがキリスト教のエッセンスであり、ほかのすべての宗教からキリスト教を区別するものです。しかもなお、まさにこのキリスト教の核であり種であるものが、つねに無視され、不信の目ですら見られています。私たちのために死んだキリストは、私たち以上の存在ではなかったのですか？　たしかにそう言われています。あるいはまた、私たちは自らを神とすべきでしょうか？　キリストはけっして、「私あなた方と異なった存在である」とは言いませんでした。彼はけっして、自分が神であるかのような教え方はしませんでした。彼がつねづね教えたのは、「あなた方は私の兄弟である、あなた方は私の示す模範に従いなさい、私のようになりなさい、あなた方は私のようになるよう定められているのだから」ということです。子が父の側に近づけるように、彼はそのように神に近づいていきます。彼は、定められていたとおりの者になっています。私たちはまだそうなっていません。ここに彼と私たちとの違いがあります。そしてそれは大きな隔たりなのです。　　（草稿）

＊

こう言うと、「ではキリストは神ではないのか？」という反論がありそうです。いいえ、彼はたしかに神なのです。しかしそれは、ユダヤ的なあるいはギリシア的な意味においてではなく、また多くの自称クリスチャンが信仰箇条として持ち歩いているような意味においてでもなく、彼自身が考える意味においてです。キリストの教えは、私たち人間は神であるということ、私たち人間の中には何か神聖なものがあるということ、それなしに私たち人間は無であるということです。彼はまた、人間は自分たちの過失によって、子が父のもとを離れて音信不通になっているように、神から遠く隔てられていると教えています。しかし神は、完全にして愛深い父です。神は私たち人間が心弱くもなお善良であることを知って、失われていた子が帰ってきた時は、父ならではありえない愛で、子を出迎えて許します。私たちはキリストを、神の最善の子として、誉め讃えることにしましょう。私たちはとても、彼の兄弟と呼ばれ、神の子と呼ばれるに値しないと感じざるをえませんが、それでもキリストと父から離れないようにしましょう。イエスはこの父を私たちに会わせるために来たと言っているのですから、彼をそれ以上の存在にしては、贔屓（ひいき）の引き倒しになってしまいます。キリストはけっして自分自身を父とは呼びません。彼は自分の父について、つねに愛と同時に謙遜

と尊敬をもって語ります。人間の言語の中に、神の子よりよい表現を探そうとした試みは、すべて失敗してきました。神学者や哲学者たちは、キリストと父の関係、人間と神の関係を、もっと正確に定義しようとしてきましたが、無駄でした。彼らはキリストを、神性のもう一つの位格などと呼んできました。しかしはたしてそれは、「私は父のもとに行く」というキリスト自身の単純な人間的な言葉より、勝れているでしょうか？　　（草稿）

＊

キリストは私たちにとって、あまりにも非現実的な存在にされてきました。彼はどうにも理解の及ばない言葉で語られてきたので、等身大の彼を奪還することは非常に困難で、またそうすることは、人より尊敬や愛が薄いと思われる恐れすらあります。それでもやはり、言うべきことは言わねばなりません。真実でない表現は、間違った表現ですし、また、発言のすべてが本意ではないというほど、悪い言い草はありません。もちろん、私たちがキリストを知るのは、彼の友人を通してのみです。彼らは、キリストが彼らに語ったことを語り、キリストが彼らにそう見えたように表現しています。彼らはしばしば、まことに過ちやすい審判者でしたが、彼らはそのことを隠蔽しませんでした。それがまた、彼らの証言の価値を高めているのも、疑いありません。いずれにせよ私たちは、彼らが見たようにしか、キリストを見ることができません。私たちがその人について、確かなことはほとんど知らないという事実は残ります。それでも、キリストが愛に満ちていたこと、友人だけでなく敵をも愛したことを知るのに、十分なだけものが残されているのです。キリストの全生涯は、愛の生涯であって、冷たい生涯ではなかったように見えます。その人は、私たち人間がみな等しく兄弟であること、そしてそれは、この世を超えた天国にいる共通の父に由来することを、知っていました。その人がそう言っているではありませんか。　　（草稿）

死

神に信頼せよ！　神のなさることは、すべて良いことです。われわれが存在するのは、神によってです。われわれが苦しむのも、神の御心のゆえにです。神の叡知は想像することすらできず、神の愛の深さは計り知ることもできません。しかし私たちは、神が私たちをけっして見捨てないということに、全幅の信頼を寄せることができます。神の子イエス・キリストによって教えられた通りに、「我らが父」と呼びかけて、神に寄り頼むのです。私たちが地上でまとっている肉体は滅びても、私たちのうちの善良なるもの、利己主義を超えた純粋なるものは、生き続けることでありましょう。私たちのうちには神に属するものがあり、それに対しては、死は何らなす術（すべ）がありません。死は私たちを変化させ、浄化し、完成させ、神に近づけます。神のもとで、私たちは神に属する者たちと再会し、滅びることのない愛で、神のように互いを愛することになるでしょう。

＊

今この世で進行中のことが、やがて破壊されたり、未完のまま放置されたりする、ということがあるでしょうか。いや、そのような仕事を、愛する神が始められるはずはありません。今あるものは、後にもあるでしょう。私たちの中に真に存在するものは、つねに変わらず存在するでしょう。私たちは今存在するがゆえに、後にも存在するでしょう。ほとんどのものは変化していきます、私たちの在り様は、つねにそのままでしょう。そして、もし愛が私たちの人生そのものの真実の一部であるならば、その愛は、形は変わるかもしれませんが、ともに浄化され聖化されて、死と呼ばれる大いなる変化をくぐっても、私たちのもとに留まるでしょう。しかしたとえそうだとしても、死の苦しみは変わらないままでしょう。それはちょうど、子供がこの世に産まれてくるというこの上ない喜びが、あまり行き過ぎないようにと、神によって、産みの苦しみが定められているのと同じです。そしていったん子供が産まれるや、苦痛が忘れ去られるように、死後もそのようになるでしょう。喜びの量と悲しみの量とは、ちょうど釣り合うようになっているのです。悲しみは、私たちを新たなより高い存在の階梯へ上げるために不可欠な力にほかなりません。その無上の奮闘や苦闘なしには、私たちを待っている新生活は、視野にも入らず、考えも及ばないものになります。私たちはそれについては何も知りませんが、行く先を覗こうとするのは、子供じみたことです。私たちは無知であるべく定められています。偉大な詩人にして思想家であるダンテの『神曲』にしても、子供の演劇にすぎず、ほかは推して知るべきです。神の中で静かに休らうという、魂のあの従順な願いだけが、期待してよい確かなことです。その他の図解や推量は当てになりません。魂は、すべてが善であり、すべてが神に由来し、すべてが神に向かっていることを知っています。　　（草稿）

＊

年をとるにつれ、死はそれほど人生と断絶したものとは、思われなくなってきます。遅かれ早かれ、私たちはその世界に行くのです。いずれその時は、すべてがどなたの手の内に存在するのか、私たちは知ることになります。人生はまことに美しいものです。しかし死もまた、その美しさをもっています。

＊

私たちにとって、生きていることは、あまりに慣れ親しんだ第二の自然になっているため、周囲は墓だらけなのに、死というものが、何か不自然で、困難で、恐怖を引き起こすものになっています。これはあるべき姿ではありません。あまりに早い死は、恐ろしいものです。しかし、年齢を重ね、長い人生の旅路の終わりに近づくにつれ、私たちは世を去るのだという考えに、慣れ親しむようにしなければなりません。すべてはまことに美しく、まことに善く、まことに賢明に秩序づけられているので、死でさえも、困難なものではなく、惑乱するものではありえません。それらはすべて、大いなる計画の一部なのです。それがいかなるものか、私たちには理解できませんが、しかしそれがほかのどの知恵よりも賢明で、すべての善よりも善いこと、それ以外ではありえず、それより善くはありえないことを、私たちは知っています。信仰の中に、私たちは生きかつ死ぬことができ、私たちより先に行った人たち、私たちがその後を辿るべき人たちを、見ることができるのです。すべては、私たちの意志や

知恵に従うのではなく、天なる意志に従います。ですから、神の手を通してひとたびお互いを見いだした者たちは、神の手にすがることで、ふたたびお互いを見いだすことになるでしょう。

＊

遅かれ早かれ、私たちは死に呼ばれる時が来ます。その時は、この世が私たちに与え得たのは、もともと私たちのものだったことを知り、また新たな家ではより完全な生活が始まることを楽しみにして、明るく去るべきです。やがて行く世界では、私たちの内なる善きもの、真実なるもの、利己的でないものは、より拡大して生き延び、私たちの中にあるように思われた悪しきもの、卑賤なるものは、浄化されて打ち棄てられるでしょう。ですから私たちは、この世にある限りは、昼間のように働きましょう。夜は、私たちをより明るい新たな生命の夜明けに導くものですから、恐れることはありません。　　（草稿）

＊

「霊魂消滅（アニヒレーション）」とは、意味を想像することもできない言葉です。私たちは今ここに在る――それで十分です。私たちが今ここに在ることは、やがて在るであろうことと同様、私たちに依存するものではありません。形の変化という考えはわかりますが、実体（サブスタンス）の停止や破壊という考えは、想像もできません。しばしば、「霊魂消滅」という言葉で、物質の消滅とは区別された「意識された人格の喪失」を指す人たちがあります。これについて私が思うのは、端的に次のようなことです。私たちの意識された人格の中に、何かリアルで実体的なものがもしあるならば、それが何であれ、存在を止めることはできません。逆に、もしこの意識された人格という言葉で、何か偶然の状況の産物を指すならば、そのような人格が今のような状態ではなくなるという考えに直面することを、避けられません。しかしながら、私たちの人格の真実の源泉と本質は、あらゆるリアルなものの中でも最もリアルなものの中にあると、私は信じています。そして真実である限り、それは破壊され得ないものです。意識された人格（コンシャス・パーソナリティ）と、個的な意識（パーソナル・コンシャスネス）とは、区別されるべきです。子供には、個的な意識があります。誰それには、ナポレオンであるとか、タレーラン［フランスの政治家］であるとかいう、意識された人格があります。そのような意識された人格のほとんどは、束の間つづくだけで過ぎ去ります。しかし個的な意識は残ります。

＊

天を仰ぎ見ると、人生の大通りに立ちこめるこの埃は、すべて消え去ります。そうです！天を仰ぎ見ると、死の暗い陰は消え去ります。私たちはあの陰の暗さを、自らの中に取り込んでしまい、死は神とかけ離れたものだと考えています。しかしすべての変化は、神がそうあるべく意図したのです。その変化はあまりに大きいので、天使が降りてきて教えてくれても、私たちには理解できません。それはあたかも、生まれたての子供が、人間の言葉で人生について教えられても、何も理解できないようなものです。子供の誕生と、魂の誕生について、考えてみなさい。その神秘の深さが、まったく計り知れないと感じられたならば、次には死について、考えをめぐらせてみなさい。あなたはそこに、同じように深さの計り知れない新たな誕生をみるでしょう。それは、いわゆる誕生と呼ばれる喜ばしい神秘の続きにほかならないのです。それらすべては神の働き、止むことのない働きです。あらゆる驚きの中で

最も驚くべきこの働きのどこに、欠陥があるでしょうか？　人生の悲惨と言われるものは、すべて人間の働きによるものではないでしょうか？

＊

大きすぎる幸福というものは、しばしば、それが長くは続かないこと、私たちの心がしがみつくものはすべて、いつかは手放さなければならないことを、人間に予感させます。遅かれ早かれ、その時が来ますが、それはつねに予想よりも早く来ます。ですから私は、人間は誰も死を逃れられないという考え、また、この世の幸福はただ貸し与えられたものだという考えに、自ら親しむべきだろうと思います。しかし同時に、私たちは、神から貸し与えられたあらゆるものを、ありがたく享受することができます。それだけでもすでに、私たちには、幸福と感謝に値する多くのものが委ねられているのです。ただ、そのような最も輝きに満ちた時にも、これは永遠には続かないのだ、しばしの後には別れねばならないのだ、という考えが、つねに心をよぎります。明るい昼の間は働いて、私たちの義務を果たすよう努め、また私たちの上にこんなにも豊かに降り注がれる神の祝福に、心から感謝しましょう。しかしまた、いつも彼方を見はるかし、すべてを諦める備えをし、かつ「御心のごとく」と言えるよう、学ぼうではありませんか。　　（草稿）

＊

もはやここにいない人の書いたものや、縁（ゆかり）のものを、あれこれ見ているときほど、心が痛むことはありません。何もかもが、以前とはいかに違っていることでしょう。しかし死には、一つの美しい徳があります。それは、私たちが愛した人の生前の小さな欠点を、すべて運び去ってくれるのです。死のおかげで、些細なことがほんとうに些細なことであったと、私たちはわかるようになります。死はすべての陰を取り除き、光だけをあとに残します。まさにそうあるべきなのです。そしてもし私たちが人を裁く時、その人たちが死の床にあるとしたらどう裁くだろうか、と考えてみることさえできたならば、この人生はいかに違ったものになったでしょうか！　私たちは自己防衛のために裁くので、その裁きはかくも苛酷なのです。人々が亡くなると、私たちは何と速やかに、彼らのすべてを忘れて許し、彼らの愛すべき長所をほんとうに愛するようになることでしょう。また自分が、すべて善良で輝かしく高貴なものを、単純に心から愛するかわりに、あれこれの些細なことばかりを心配していたことを悟り、自責の念にかられるようになります。私たちが、本来の善良で愛すべき姿にもどり、また、何らかの理由によって私たちに降りかかる埃を吹き払うことができたならば、人生はいかに違ったものになるでしょうか。やり直すのに、遅すぎるということは、けっしてありません。

＊

愛する者の死は、私たちが人生で受ける最後のレッスンです。そのほかのことは、私たちは自分で学ばなければなりません。年をとり、人生の終わりが近づいてくるにつれ、私には、すべてのものが、ますます完璧で美しいものに思われてきます。すべての場所が、力と叡知と愛に囲まれ、支えられているように感じます。私たちは寄る辺なく弱いものですが、まさにその寄る辺なさの中で、人間ではない何かに信頼することを学んで、強くなります。不平を言わず、信頼して待つことができるようになります。愛する者との別れは辛いのですが、

ただ、それ以外には、この世の生活を超えた彼方(ビヨンド)へと、私たちの目を開いたままにしてくれるものが、ないのではなかろうかとも思うのです。　　（草稿）

＊

私たちが今ここで享受している幸福は、すべて死を前提条件としていますが、ほとんど誰もそう考えていないようなのは、奇妙なことです。もし私たちが、人生の一時間一時間を価値あるものとし、それを十分に享受し、十分に活用し、利己心によって一分たりとも害なわないことを学びさえすれば、死はけっして尚早には訪れないでしょう。浪費された時間は、あたかも人生の中の死のようなもので、それが積み重なって、人生をかくも短くするのです。もっと謙虚に、忍耐強く、思いやり深くありたいものです。それらすべての根にあるのは愛情深さであり、よりよい生き方を学ぶのに、遅すぎることはありません。

＊

私たちがやがて住むようになる大きな世界は、私たちが今住んでいる小さな世界と、同じくらい善良なものであろうと、私には思われます。すべてが、たとえ苦しみや悲しみさえも、このように驚くほど善良で美しいのに、なぜ信仰に躓く人がいるのか、私にはまったく理解できません。愛する人々の死に際して述べられる、すべての慰めの言葉は、休息と静寂ということ以外は、空虚な偽りです。死がいかなるものか、私たちは理解できませんが、だからこそ信頼すべきであり、また信頼できるのです。私たちの住む「世界」というこの詩には、何の間違いも、何の隙間も、存在し得ません。自ら仕組むことなく互いに遭遇した星々は、ふたたび遭遇するだろうと、私は信じています。どのように、どこで、いつ？　それは神が知っており、それで十分なのです。　　（草稿）

＊

神は私たちに、「死は、多くの人間が思っているような恐ろしいものではない」と教えています。それはほんの短い間の分離であり、その後には、「永遠」が私たちを待っています。

＊

私たちはここで、四方八方から圧迫された狭い住居に生活していながら、それが全宇宙だと空想しています。しかし、ドアが開かれて、そこから愛する者が出てゆき、二度と帰ってこない時、私たちもドアに歩みよって、遠くを見やります。すると、この住居がじつに矮小で空虚であったこと、また、外にはより大きな美しい世界があって、私たちが来るのを待っていることが、はっきりわかります。そのより大きな世界がどんなものか、誰に表現できるでしょうか？　しかし、この狭い住居の中で私たちがこんなに幸せだとしたら、あの世界では何層倍も幸せになるに決まっています！　恐れることはありません。すべてがいかに美しく秩序づけられているか、まわりを見てご覧なさい。高く広がる天窮を見上げて、それすら神の万能の力と比べて、いかに小さいことか、考えてご覧なさい。星々の軌道を定めるお方が、人間たちの魂の運命も定めるでしょう。一度遭遇した星々は、ふたたびまた遭遇します。そのように、一度出会った魂たちが、ふたたびまた出会わないということがあるでしょうか？

（草稿）

＊

今ここに同席している人よりも、不在の人のほうが、より近くに存在している、そういうことが、よくあります。　　（草稿）

＊

私たちは「死」というものを、ほとんどまったく計算に入れていないので、いったんそれがやってくると、圧倒されてしまいます。私たちはいつでも、友人も自分も間違いなく死ぬ、ということは知っています。しかしそのことには目を塞ぎ、人生には終わりがないかのように、愛情や友情を楽しみます。私たちは毎晩、お互いに「さようなら」と言うようにしましょう。そうすれば、最後の「さようなら」を言う時も、それほど慌てずにすむかもしれませんから。　　（草稿）

＊

「死」には、どこかとてもナチュラルなところがあります。私たちはやって来て、去ってゆくのですが、そこには何も断絶がありません。

＊

生きていることの中に、死ぬことと比べて、よりナチュラルなものが、何かあるのでしょうか？　明るい光に満たされつつ、時には嵐と苦闘の中を父なる手に親切に導かれつつ、この長い人生を生きてきて、最後の一歩を踏み出そうとしている今、何か恐れるべきことがあるでしょうか？

神的存在

人間と神との交通、また神から人間への啓示、こうしたことが可能かどうかは、おもにかつもっぱら、神と人間という概念がどういうものとされてきたかに関わっています。これは明瞭なことであり、あらゆる神学的な研究においても、「神」といわれているのは、「私たち」の考える神であることを、注意深く考慮にいれなければなりません。この概念は、部分的には伝統によって、部分的には私たち自身の考えによって、作られてきたものです。神は、今もこれからも「私たち」の神でありつづけます。私たちは神について、感覚によってではなく、内なる意識を通してのみ、知ることができます。

＊

神と人間に対する私たちの義務、神と人間への私たちの愛は、次のような神への信仰を通して作られる固い基盤なしには、無に等しいものです。その神とは、世界を考え出した方、そしてそれを治める方、「子（キリスト）の父」、一人子（キリスト）を通して、すべての子の父として人間に啓示された方です。

＊

キリスト教によって、神性（ゴッドヘッド）、神の力の荘厳、神の意志の神聖さ（ホリネス）、などの概念は、より純粋で真実なものになってきましたが、それでもなお私たちの間には、単なる対象としての神的存在（デイテイ）の概念が、残っています。多くの者にとっての神は、今なお、地上の人間的なものからあまりにも遠ざけられて、高い雲の中にいるので、キリストの教えの意味を十分に理解しようとしても、エホヴァの眩しい光に近づくのが恐ろしくて、しばしば身震いするのです。人間は神に対して、子が父に対するような関係に立つべきだ、などと言えば、ある人々はほとんど不敬な考えと思うようです。また、神はどこでも人間の近くにいるという考え、人間は神の子だという信仰、さらには、神格と人格の間には超えられない障壁などないという信仰などは、しばしば汎神論（パンテイズム）という烙印が押されてきました。しかしながら、真に畏るべきは内なる魂の神なのですから、このいわゆる汎神論なしには、キリスト教はキリスト教ではあり得なかったでしょう。私たちの心の目を、外なる自然の神に釘づけにして畏れさせてきたのは、何かジュピターのような至善至大（デウス・オプティムス・マクシムス）の神への信仰の残滓にすぎません。

＊

神の概念は、断絶のない歴史的な進化の結果として、あるものです。それを発展と言っても、ヴェールの除去と言っても、浄化と言ってもいいのですが、ただしそれは、突然の啓示の結果ではありません。……神聖なるもの（ザ・ディヴァイン）が自らを啓示するのに、まず人間の目に、次に人間の心に、という段取りで行なったとしたら、それに文句をつけるどんな権利が、私たちにあるでしょうか？　自然における啓示は、私たちが軽蔑できるほど、あるいはせいぜい異教世界にとっては十分良いものとして扱えるほど、それほど賤しむべきことなのでしょうか？天が神の栄光をいかに宣言しているか、もはや見ることができないとすれば、私たちの目はまったく曇り、私たちの心はまったく鈍くなってきたに違いありません。

＊

一なる至高の神への信仰は、たとえはじめは単一神観（ヘノテイズム）にすぎず、唯一神への信仰ではなかったとしても、きわめて早い時期に、ユダヤ民族の中の指導的な人々の霊・精神をとらえました。一なる神、いと高き者への信仰は、多くの伝承によって、アブラハムに帰せられています。アブラハムは、隣りの部族が礼拝する神々の存在を、否定はしませんでしたが、それらは彼自身の神とは違ったもの、あえて言えばまったく劣ったものと見做していました。彼の唯一神観は、間違いなく、狭量なものでした。アブラハムの言う神は、彼の友人でした。彼らは友人関係だったのです。しかし、アブラハムによって形を与えられた神の概念は、成長する可能性があり、実際にそうなりました。モーゼも、その他の預言者たちも、またキリスト自身も、さらにはムハンマドすらも、新たな神を導入するにはおよびませんでした。彼らの神は、族長の信仰がもっていたローカルで狭量な要素から自由になった後でも、つねに「アブラハムの神」と呼ばれたのです。

＊

エホヴァという名前と概念が、ある隠れた源泉から生じてきたとすれば、その同じ源泉から、ほかの民族もまた、神的存在についての最初の暗示を引き出したのだと、神観念の由来を辿ることができるかもしれません。こうした試みを、ある人々は冒瀆的だと思うかもしれませんが、そういう人々は、神的存在についての人間的なとらえ方と、人間の手の届く範囲

を超えた神的存在そのものと、この両者の違いを忘れているのです。こうした概念をつくる人間の能力の発達について、歴史家はより深い教訓を読み取ります。つまり、どこであれ真理を探求し神を探求するあらゆる人々の心に、それらの概念は泉のように湧きだす、という教訓です。神を手探りで求めている者は、そのようにして神を見いだすのでしょう。一見して価値のない小さなことから始まって、最も高貴で最も高尚な思想へといたる、遅々たるしかし健全な成長を、彼は示すことができるのです。その時こそ彼は、働き人が黄金の収穫を喜ぶように喜びます。それともこう言ったほうがよいでしょうか。彼はしばしば、銀色の羽で天に舞い上がる蝶や、すばらしい可能性を内に秘めた卑しいサナギのように、これはまた何と驚くべきことだろうかと、自らに起こったことを不思議に思うのです。

＊

神という概念は、必然性があって人間の心に生まれてきたもので、多くの神学者がそう考えているように、ユダヤ人やキリスト教徒だけに特別の開示の結果として与えられた、というものではありません。この確信に逆らうことは、私には不可能に思われます。世界の偉大な諸宗教の比較研究の示すところによれば、私たちが神的存在に帰している至高の属性は、他の諸宗教の聖典によっても、同様に主張されているからです。

＊

何世紀も前に私たちに定められ、私たちが子供心に覚えてきた言葉を、私たちは今繰り返すことができます。すなわち、父なる神、天と地の造り主を、私は信じます、と。しかしそれは、これが使徒伝承のあるいは公会議の信条だからという理由だけではなく、そこに全世界の信仰告白が含まれているからです。表現はさまざまに異なり、何千という異なった言語で伝えられながら、それらはつねに、同じ根本的な真理を表現しています。私が「根本的」と言うのは、それが人間の心や理性や言語の本性そのものに基盤を置くからであり、また行ないのあるところには作用者（エージェント）があって、遡ると第一（プライム）作用者があるという、単純にして盤石の確信の上に据えられているからです。たとえそのお方の計り知れない本質を知ることはできなくても、私たちはその啓示を自然の中に見て、それと知ることができるでしょう。

＊

神が存在するということの歴史的な証明は、かつて論駁されたことはなく、論駁し得ない性質のものです。今日それは、世界の諸宗教の歴史（世界宗教史）によって、私たちに示され、ほかのあらゆる証明法の基盤になっています。むしろそれらの、宇宙論的、存在論的、目的論的、等々と呼ばれる証明法は、歴史的な証明法に吸収されて、不必要なものになりました。「至高の存在があるということは、まったく証明する必要がない、仮に必要ならば、ほかならぬ啓示がそれを証明するだろう」、と宣言する人々もいます。たとえ証明が欲しくなかったとしても、いったい彼らは、自分たちが最も価値ある貴重な遺産とみなすものを、人類が、また自らがいかにして所有するにいたったのか、ほんとうに知りたいと思わないのだろうか、と私は不審に思います。この類いの問題に答えるのに、啓示に訴えるのは、まったく無益です。何よりも、啓示という言葉で何を意味しているかが、まず説明されねばなりません。宗教史が私たちに教えるところによれば、キリスト教だけでなく、バラモン教、ゾロアスター教、マホメット教の擁護者たちも、ある特別な啓示に訴えています。これらやそ

のほかの訴えが、相互に矛盾したとき、その紛争に判決を下すべき判事団が、どこにいるのでしょうか？　これらの宗教の信者たちは、それぞれが互いに、ほかの宗教の啓示ではなく、自分たちの宗教の啓示に基づく事柄を信仰する、と宣言します。たしかに私たちは、自分の良心という法廷の中に、訴えるべき各自の啓示をもっています。しかし、いったん宇宙の普遍的な控訴審の法廷に立ったならば、私たちの内なる信仰は、違った仕方で証明されねばなりません。

＊

今あるような人間、今あるような世界にとって、神聖（ディヴァイン）な存在への信仰が生まれ、それが最終的には一つの神聖な存在への信仰へと至るのは、普遍的であるばかりか、不可避な事実です。それは、人間の理性のよって立つべき足場を成しています。それを無限と呼ぼうが何と呼ぼうが、自然の内や背後やあるいは彼方に、何かがあるということを認めるに至る知的プロセスには、どこにも不備を指摘することができません。したがって、このプロセスの歴史がまさに、そこから出てきた結論が正当で真実であることを、最もみごとに証明している、ということになります。

＊

人間の言語には、神を記述するのにふさわしい言葉はありません。神について私たちが言えることは、ウパニシャッドが言っていること、つまり「否、否！」ということだけです。どういう意味でしょうか？　もし神を「最も力ある方」と呼ぶ人があれば、私たちは「否」と言わねばなりません。私たちが理解できるような意味での力は、神の力に比ぶべくもないからです。また、神を「最も叡知ある方」と呼ぶのに対しても、「否」と言わねばなりません。私たちが叡知とよんでいるものは、神の叡知に及ぶべくもないからです。あるいは、神を「聖なる方」と呼ぶのに対しても、「否」と言わねばなりません。私たちがその言葉で考えていることは、神の聖性と比べて、いったい何であり得るのでしょうか？　ウパニシャッドの思想家たちが、「神について人間が言えるのは、否、否ということだけだ」というのは、こういう意味です。

＊

「知ること（ノーイング）」という言葉の意味をどう定義するかにもよりますが、ほかのあらゆることを知り得るのと同じ意味で人間は神を知り得る、と考えただけでも、あるいはまた、人間は神に関しては不可知論者でしかありえない、と考えるにしても、人間は縮み上がることでしょう。人間の知識はすべて、感覚から始まります。そして感覚から知覚へ、知覚から概念へ、そして名前へと至ります。しかるに、「神を知っている」と主張する人々が、その舌の音も乾かぬうちに、「生きて神を見た者はいない」と宣言します。まず「知ること」という言葉の意味を定義しましょう。そして、そこで使われてきたいくつかの意味を、慎重に区別しましょう。そうすれば、この言葉の真の意味で、神の真の性質に関して、「自分は不可知論ではない」とあえて言い切れる人がいるかどうか、私は疑わしいと思います。名前のない存在を前にしたこの沈黙は、神への真の信仰を排除しません。人間の感覚と理解を超え、人間の理性とそれによるあらゆる名付けを超えた、この存在への献身と愛は、沈黙によって妨げられないのです。

＊

人間という有限な存在によって、この無限な存在に付けられてきた名前は、それぞれが、宗教信仰の進化の段階を印すものとなっています。それらの名前を理解しようと努力しさえすれば、それぞれがよく考えられていること、またその時々においては考え得る唯一の名前であったろうことが、わかります。歴史的にものを見る学者は、神聖な力に付けられてきた名前を、単に正しいとか間違っているとか、決め付けた見方はしません。私たちはそれらを、よく考えられ、当座は正しかった名前として、また神の御使いが昇り降りする梯子段として、見るのです。古代の人々が、旱魃の時に天を仰ぎ、「親しい天よ、雨を降らせて下さい！」と呼びかけた時、そこには何の害もありませんでした。そして後世の人々は、次第にもっと一般的な言葉を使うようになりましたが、その人々が（自然の）力に対して、「輝かしい」とか「豊かな」とか「力ある」とか呼びかけた時、それは何か別のものを意味していました。彼らは何かを探し求めており、その跡を辿って、偶然にその何かを発見したのかもしれません。これが、宗教の成長について、聖パウロが考えたことです。

＊

「たとえ話」を用いずに、神を考え得るようになって以来、人々は彼を瞑想し、尊敬し、崇拝するようになったかもしれませんが、その厳粛な臨在を前にして、人間の心の燃えるような情熱、全身全霊の力を尽くした愛は、消えてしまったようです。私たちは父や母を、心の底から愛することがあります。魂の底から子供に寄り添い、力の限り妻や夫や友人に献身することがあります。しかし、これらの感情を、力と真実をこめて、神的存在の前に投げ出すことは、この地上ではまったく稀なことになってしまいました。

＊

宗教史が私たちに教えたことがあるとすれば、それは、名前とそう名付けられたものとを区別する、ということです。名前は変化してますます完璧なものになり、私たちが神的存在について抱く概念も、より完璧になるかもしれません。しかし神的存在そのものは、私たちが付けた名前によっては、影響されません。名前がいかに異なり、いかに変化していっても、宗教学の最終的な成果として、次のような確信が永遠にとどまります。つまり、あらゆる名前の背後には、そう名付けられた何者かが存在すること。あらゆる行為の背後には、行為者がいること。有限なるものの背後には、無限なるものがあること。自然の中には、神がいること。あらゆる名前の永遠の目的地は、神であること。すべては良く取り計らわれ、良く備えられていること。しかもなお、すべては目的地からはるかに遠く、生きてそれを見る人間はいない、ということです。人間の言語が発明した名前は、すべて不完全かもしれません。しかしながら、「我は在りて在る者」という名前［神がシナイ山上でモーゼに名告った名前］は、セム的な考え方をする人々のもとに、とどまりつづけるでしょう。一方、アーリアの言語を話す人々にとっては、ヴェーダーンタの「サチッダーナンダ」より良い名前を発明するのは、難しいでしょう。「在りて、知りて、祝福されたる者」という意味です。

＊

私たちは大人になると、幼児期の信仰の言葉をもはや語らなくなるかもしれません。しかし、人生の見聞がより広くなり、自分自身についてより知るようになるにつれて、神の摂理

が隈なく現前し、すべてを見そなわしているという信仰は、ますます強くなります。この基底音が正しく響いていれば、私たちはさまざまな変奏を楽しんでもよいのだと思います。まったく音階から外れてしまうことは、けっしてないでしょう。　　（草稿）

＊

愛する者が私たちから取り去られる時、その手は私たちには見えませんが、しかし、それが誰の手か、それが誰の意志かは、知っています。その方を何という名前で呼ぶべきか、どんな方なのかも、私たちは知りません。しかし、どんな名前で呼びかけようと、その方がその呼びかけを理解することを、私たちは知っています。これが、あらゆる宗教の基盤です。私たちが思いつくかぎり、最高のことばで名付けましょう。ただ、それですらまったく不完全な名前であることを、承知しておきましょう。そして、もしも私たちが、それが習慣だからではなく、それより良い名前を思いつかないからという理由で、ある名前を信じて呼びかけるならば、彼は理解し許してくれることを、信頼しましょう。すべての名前は真実です、もし私たちが真実であるならば。すべての名前は偽りです、もし私たちが偽りであるならば。もし私たちが真実であるならば、私たちの宗教は真実です。もし私たちが偽りであるならば、私たちの宗教は偽りです。たとえ偶像崇拝者であっても、正直であれば、貴いものを嘲る法王よりも、優れているのです。　　（草稿）

＊

「知識」という言葉の通常の意味においては、私たちは、神についての知識をもてません。神という言葉そのものが、私たちの認知力と理解力を超えたものを、含意しているからです。では、私たちはどうすればいいのでしょうか？　目を閉じて、静かにしていることでしょうか？　私たちのような生き物は、それでは満足できないでしょう。私たちは語らざるを得ませんが、私たちのあらゆる言葉は、認知して理解し得る物事にしか、適応しません。昔の仏教徒たちは、しばしば、神について言えるのは「否、否！　彼はこれではなく、あれでもない」ということだけだ、と言っています。私たちが見たり理解したりできるものは、それが何であれ、神ではありません。しかし、繰り返しますが、このような自己否定では、私たちのような生き物は、満足できないでしょう。私たちはどうすればいいのでしょうか？　私たちにできるのは、最高の表現を与えることだけです。私たちがこの世で知っており、現に所有している中で、最高のものは「愛」ですから、神は愛であり、愛すべきものである、と私たちは言うのです。愛は、まったくの自己放棄です。これ以上に最高のものは、思い描くことができません。それでも、名付けたいと思っている当のものと比べて、この名前は何と貧弱なことでしょう。愛という私たちの言葉には、へり下ること、見上げること、礼拝することの意味が、含まれています。私たちはそれを、神の愛だと言うことができるでしょうか？大丈夫です。私たちが最高の言葉で語っても、それは貧弱な努力に過ぎませんし、そう承知しておくべきですが、もしそれが私たちにできる最高のことなのであれば、恥じる必要はないのです。

＊

それぞれの時代は、神の名を崇め礼拝し、神の名において説教しかつ死し、神の名に思想と瞑想をめぐらせつつ、それぞれの言語とともに、過ぎ去っていきました。しかし、古い言

葉はそこに残ったまま、人類の夜明けの時の純粋な空気を、今も私たちに向かって吹きかけています。それは、すでに亡くなった同朋たちの思いや嘆き、疑いや涙を、私たちのもとに運んできますが、一方また、ローマのバシリカ聖堂や、ベナレスのヒンドゥー寺院から立ち上がる、昔と同じような響きを、今なお天にまで吹きあげています。あたかもそれは、語られ得ないものを語り、表現できないものを表現しようと切に願う、幾百万の人々の心を、その単純な祈り言葉によって、抱き上げようとしているかのようです。

神聖なるもの

このように、偉大な世界史において、人間の中の神聖なるもの（ザ・ディヴァイン）の謎を説くべく定められたのは、ユダヤ人でした。自然の中の神聖なるものと、人間の中の神聖なるもの、この両者の関係について、真実の考えを産み出したのは、結局のところ、ユダヤ思想という土壌だったのです。

＊

外的世界における神聖なるものが、いったん十分に認識されたならば、自然においても、歴史においても、多かれ少なかれ神聖なるもの、奇跡的なものは、もはやあり得ません。世界史の中の、ある特定の聖別された出来事にのみ、神聖で奇跡的な性格を認めようとする人々は、そのことでかえって、歴史の全ドラマから神聖さを奪うという、一つの危険を犯します。世界はそれによって、世俗的なものになるか、あるいはもっと甚だしくは、神無きものになるのです。私が述べる世界観を、汎神論的だと言うのは、容易なことです。言葉の最良の意味において、それはたしかに汎神論的なのです。そしてこの最良の意味からすれば、ほかのあれこれの世界観は、たちまち無神論になります。ギリシア人たちすら、「あらゆるものは神々で充満している」と宣言したタレスの時代から、神聖なるものの遍在について、すでに疑いを持っていました。実際ここでの問題は、汎神論を選ぶか、無神論を選ぶか、二者択一なのです。極大のものから極小のものまで、何か神の意志によらない出来事がおこり得るならば、神はもはや神ではありません。神聖なるものの影響に、直接的なものと間接的なものを区別すること、摂理の中に、一般的なものと特殊的なものを区別すること、それは、一つの神のほかに多くの神を信じるようなもので、多神教への逆戻りなのです。

＊

人間の本性というのは、神聖な本性が形を変えたものです。それ以外ではあり得ません。人間の中にはあらゆる神聖ならざるものがあり、それは一般的な言葉では、利己心と言うことができますが、キリストはそれを振るい落として、彼自身の神聖さを回復したのです。

＊

神は私たちのもとに、人間の似姿をして、やって来ます。人間のほかに、神の似姿はないからです。このような扮装は、禁じられていません。キリストは、人間の中に神を見るよう、そしてそれを愛するよう、教えました。私たちは、それより遠くに進むことはできません。人間以上の何かを思い描こうと試みると、私たちの心は壊れてしまいます。しかし私たちは、人間の中に、とりわけこの地上から天に上げられた人間の中に、神聖なるものを思い描き、認め知ることができます。生きている間、私たちの愛は人間的なものであり、俗事にまみれています。私たちはこの地上で、愛したり、愛さなかったり、愛していると思いこんだり、あるいは憎みさえします。しかしほんとうは、私たちは誰をも憎んでいるわけではなく、ただ、人間のまわりを覆い隠している何かを、憎んでいるのです。相手の背後にあるもの、つまり人間の本性は、私たちはこれをつねに愛しています。死は人間を浄化し、地上的な埃を取り払います。まだ生きている人々より、すでに死んだ人々の方を、はるかによく愛することができる、というのはほんとうです。私たちは自らに嘘をつかず、虚しい言葉も使いますまい。天に上げられた人々を心に抱く時、私たちの愛は、利己心をまったく離れ、より純粋で、より強くなります。キリストがもはやいなくなった時、使徒たちが彼をより愛するようになったのは、このためです。彼が生きている時、ペテロは彼を否定することができました。彼が父のもとに帰った時、ペテロは彼のために喜んで死にました。これらはまったく真実ですが、それを理解するためには、一人一人が自ら同じような経験を経て、そう実感しなければならないのです。祝福された者に対する愛がいかなるものかを真に知っている人ならば、使途たちの愛がふたたび燃え上がったのは、キリストのつ束の間の復活によってだった、などとは思わないでしょう。彼らは、キリストがほんとうに甦ったこと、死は彼に何の力も持たなかったこと、彼が父とともにあることを、信じました。これこそ、はかないこの世に帰ってきて、数時間、数日間、いや数週間の生命を永らえるより、はるかに素晴らしいこと、あるいは、雲を通って青空に昇っていくよりも、もっとはるかに素晴らしいことではないでしょうか？　まことに、大いなる真実の驚異（ミラ）が、何と小さな空想の慰み事（ミラクラ）に、入れ替わってしまったことでしょう。　　（草稿）

疑い

死に至る無神論がありますが、他方には、あらゆる真実の信仰の生きた血液となる、そのような無神論があります。後者は、私たちの最高に正直な瞬間において、もはや真実ではないとわかったものは、断固としてこれを捨て去る力になります。そのような心構えによって私たちは、今までの自分にとって親密で神聖（セイクレッド）であったものが、不完全であるとわかった時は、この世ではまだ嫌われていても、より完全なものがあれば、それと置き換えることができます。これが、ほんとうの自己放棄、ほんとうの自己犠牲、真理をほんとうに信頼すること、

最も真実の信仰です。そうした無神論がなかったならば、宗教は、とうの昔に石化した偽善になっていたことでしょうし、新たな宗教も、宗教の修復も、宗教改革も、宗教の復興も、すべて不可能だったことでしょう。それなしには、私たちの誰もが、新たな人生を生きることは、不可能なのです。

＊

単純な信仰をもち、物事を文字通りに受けとめ、ばら色の夢を見る、こうした人生よりも幸せな人生は、たしかにほかにありません。もしそれが可能であれば、私たちの全員が、これより完全な人生はない、と認めるにちがいありません。私がこれまで知っている男女の中で、最も幸せな人々、最良の人々の何割かは、聖書のただの一句に疑問をもつこと、たとえば、蛇がイヴに実際に語りかけたことや、驢馬（ろば）がバラムに語りかけたこと、これらを疑うようなことすら、身震いして畏れるような人々でした。私は彼らに、喜んで感謝の言葉を述べたいと思うのです。しかし、太陽の光や街路の騒音が、天国の夢を見ている幸せな子供を起こそうとするのを、私たちは防ぐことができるでしょうか？　いいえ、それは筋が違います。起きて、一日に行なうべき仕事の準備をすべき時がきたら、子供を起こすのが、私たちの義務ではありませんか？　そして、子供たちが目を開けてまわりを見回した時、その側に、先に起きた私たちが座っていて、何を尋ねたいのか理解しており、子供のおどおどした質問に、素直な言葉で答えてあげることができるとしたら、それは良いことではないでしょうか。古い詩の中に、次のような一節があります。

「正直な疑いの中には、より良い信仰が生きている。
　信条を半分だけ信じるよりは、私を信じるがよい。」

＊

あらゆる国の、あらゆる時代に、まことに多くの人々が、神を信じない者と呼ばれてきました。その理由は、目に見える有限なものを超えた何かが存在することを、彼らが否定したからではありません。また、今あるような世界は、一つの原因、一つの目的、一つの神なしに説明できる、と彼らが宣言したからでもありません。むしろその理由は、しばしば、その時代に普及していた神的存在についての伝統的な考えから、彼らの考えがすこし違っていたからでした。あるいは彼らが、子供の頃に学んだ神よりも、より高い概念を求めていたからでした。

＊

この人生には、最も熱心に神を求める人々が、自分は神に見捨てられた、と思いこむ時があります。彼らはあえて自問しませんが、では私が、いったい自分は神を信じているかどうか、自問します。彼らに絶望させないように、そして私たちが彼らを苛酷に裁くことがないようにしましょう。彼らの絶望は、多くの信条よりも、ましかもしれません。正直な疑いは、正直な信仰が湧き出てくる、最も深い泉なのです。失った者だけが、何かを見いだすのです。

＊

聖パウロは「あらゆるものを検証して、良いものをしっかり持っていなさい」と主張しました。ここで言われている霊の自由を、私たちが一度主張したならば、もう後戻りはできません。私たちは、誰も私たちの宗教を検証してはならない、誰もほかの宗教を検証してはな

らない、そしてそれらを比較してはならない、とは言えなくなります。自由な判断と隷属した判断のどちらを選ぶか、私たちは最終的に決断せねばなりません。隷属を好む人々と、あえて議論をしたいとは思いませんが、私は彼らに、次のようなことは指摘しておきたいと思います。つまり、じっくり考えた上で隷属することを選ぶ時、彼らも、ほかの人々が自由を選ぶ時とまったく同様に、自らの個人的な判断に従っているのだ、ということです。

＊

私たちの利益という点から考えても、自らの宗教を、ほかの宗教に対するのと同じほど、厳格な点検にさらすのが、たしかに良さそうです。いや、もっと厳しい点検にさらしたほうが良いかもしれません。私たちの宗教は時折、この世の荒波や風雨から、私たちを安全な港に運んでくれる、良い船に譬えられてきました。そのような乗り物であれば、自分たちや愛する者たちが乗る前に、まず試運転をして、厳格に点検するのが、賢明なやり方ではないでしょうか。どうか思い出してほしいのですが、新たな宗教の設立に参加した人々や、古い宗教から新しい宗教に改心した人々を除けば、あらゆる人々は、物心がつく前に、その宗教の信仰を、言われるままに受け入れねばなりません。そして、ほかの事柄に関しては、より成熟した時点で、独自に判断することが勧められるのに、こと宗教となると、頭が柔らかいうちに植え付けられたドグマを、自由に検討することは、あらゆる影響力を用いて、妨害されるのです。私たちは、私たちの宗教を検討しようとする試みを、たとえそれが、しっかり保持すべき真理を、自らの目で確かめようとする、最も正直な望みから出てきたものであっても、糾弾します。しかもその一方では、私たちは逡巡なく世界中に宣教師を派遣し、各地の信仰深い人々に、彼らの由緒ある宗教を再検討するよう、頼んでまわります。私たちは、彼らの最も神聖な信念を攻撃し、彼らの最も優しい感情を傷つけ、彼らを育んできた信仰を掘り崩し、彼らの家庭の平和と幸福を破壊しています。それでいて、もし学識あるユダヤ人や、繊細なバラモン僧や、率直なズールー人が、私たちに向かって、旧約の成立した年代や著者を再検討してくれと頼んだり、あるいは、自分たちもその奇跡を受け入れることができるように、証拠を見せてくれと挑発してきたら、私たちは憤慨します。これらの質問に関して、私たちに特権があるとか、尋問が免除されているとか、私たちはけっして主張し得ないのですが、それを忘れてしまっているからです。

＊

もし私たちが、子供らしい信仰、さらには子供じみた信仰すら、尊敬することができるのならば、同様にして、哲学的な無神論を尊敬することすら、学ばねばなりません。そこにはしばしば、最高の真実な信仰の種が、隠された形で含まれています。ある人がどのような神を信仰するようにと育てられたのか、また彼が拒否しようとしているのはどんな種類の神なのか、ということがわかるまでは、彼を無神論者と呼んだり、彼は神を信じていないと言ったり、そのような不用意なことを、私たちはけっしてしてはなりません。最も高尚な動機が、そうさせているのかも知れないのです。ソクラテスが無神論者と呼ばれたこと、初期のクリスチャンがすべて無神論者と呼ばれたこと、そしてこの世界が生んだ最善で最高の人々の何割かはその名前で烙印を押されたこと、こうしたことを、けっして忘れてはなりません。

＊

私たちの宗教――キリストのほんとうのオリジナルな教えという意味で、私はこう言うのですが――に対する、最悪の悪意をもった批判を、聞いたり読んだりしたことがあります。そして私は心の内で、キリストの教えの真実のためならば、命を投げ出す覚悟があると感じています。私たちが抱えている困難は、彼の教えからではなく、人間が作った教義から発生したものです。彼の教えが真実であるという証拠は、目に見える世界にはありません。しかし、私たちの内にある神の霊は、その真理を証しています。そうでなければ、私たちはいまだキリストの弟子ではないのです。しかし、いつの日かそうなるでしょう。

＊

疑いを抑圧することは、真理の霊を抑圧することです。このことを確信しなさい。良く表現された疑いは、概して、半ば解決された疑いです。しかし、これらすべてが可能になるには、大いなる精神の真剣さが必要です。この世のほかの何にもまして、それは重要なものと受け取らねばなりません。そうすれば、私たちは、その戦いをやり遂げることができます。その奮闘のさなか、神は私たちと共にあります。

宗教の進化

客観的な意味でとらえると、「進化」とは、実は歴史と同じものです。主観的には、歴史とは、もともとは探求ということ、あるいは知ろうとする願望を、意味していました。やがてそれは、探求によって獲得された知識を意味するようになり、最終的には、純粋に客観的な意味で、そのような知識の対象を意味するようになりました。

＊

神話の中にはあらゆる過誤があり、あるいは、世界中のいわゆる異教の中には誤謬があります。しかし私たちはその中にも、真理へと向かう進歩、有限なるものを超えた何かへの希求、無限なるものの認識の成長、目を遮るヴェールの除去を、見いだせるかもしれません。それらは時代から時代へと自らを啓示し、純粋さと聖性（ホリネス）において、よりよくなっています。かくして、進化という概念と、啓示という概念とは、最初はたいそう異なって見えますが、最後には一つになります。世々を貫く目的があるとするならば、自然が盲目でないとするならば、また、現象世界全体の背後に一つの意志があって、その意志を代行すると認められる作用者（エージェント）たちがいるとするならば、その時は、その至高の意志を信じる人間の信仰そのものの進化が、その至高の意志の最も真実な啓示なのです。それを自然と呼ぼうが、超自然と呼ぼうが、あらゆる宗教が休らうべき磐石の基盤として、それは留まるべきものです。

＊

聖書のあれこれの「書」を見ると、神の概念が、変化しているのがわかります。ちょうどそのように、私たちの人生のあれこれの「章」においても、同じような変化が起こります。

子供たちは、神を尊敬すべき人間としてしか、思い浮かべられません。彼は、自分が創造した者たちに、警告したり叱責したりしながら、歩きまわる存在です。これより高次の概念は、いくら神に当てはまるものであっても、まだ彼には難しすぎて、聞いても理解できません。しかし子供が成長して、より高い考え方ができるようになると、低次のものは、高次のものに、場を譲らねばなりません。感覚によって証明できるものが、子供にとって唯一の証明であるかぎり、彼は目に見える神を求めます。やがて彼は、人間の感覚というものが理解の特定の様式であり、本性からして、限界のあるものしか理解できない、ということを学びます。そうしてはじめて、彼の精神は目に見える神を嫌々ながら放棄して、霊なる神を信じるようになります。ちょうどそのように、一人一人の人間の成長も、人類全体の成長も、進んでいきます。そしてもし、世界がこれまでと同様に進んでいくとするならば、いかなる次第になるかわかりませんが、新約聖書の多くの言葉もまた、放棄されざるを得まいと、私は思います。

ごく最近では、「個人（パーソン）」という言葉に関して、そのような変化が起こっています！　以前は「人格（パーソナリティ）」という概念で了解されていた多くのことが、ただの付属物であるとわかったのです。そして「人格」とか「個性（インディヴィデュアリティ）」とか、「私（アイ）」とかいう、どちらかといえば物質的な概念の上位に、「自己（セルフ）」というより高次の概念が、登場してきています。その「私」とか「人格」は、純粋に束の間つづくだけのものから、成り立っています。その多くは、この地上では私たちに大切なものではあっても、いつか過ぎ去って行くものであり、永遠に留まる「自己」とは、別者なのです。こういうわけで、私たちはいろんなことがあっても、驚くには及びません。たとえば、ある人々は、自分の持っている最高のものだけを、神性（ゴッドヘッド）へと変換しようと願い、人格的な神について語ることを怖がりはじめます。またある人々は、「人格的な」という言葉を限定することで、完全・無限・不変の存在とは両立しないものを、すべて排除しようと主張します。「神は愛すべきもの」であるとか、「私たちは神を愛する」と語ることを躊躇したり、そこに畏敬の感情もないとしたら、「神は愛である」といった表現は、どこから出てくるのでしょうか？

このようなプロセスは、人間の思想や言葉が、成長し変化するかぎり、進んでいくことでしょう。神をパラダイスを歩きまわる人間のように語った人々は、子供のように語ったのですし、最善を尽くし、持っているすべてを与えて、そうしたのです。私はそのことを、聖書から学ぼうと思います。そして、神の目から見て、これらの小さな物語が、私たちのあらゆる信条や哲学より、価値が低いものだと、誰が言い得るでしょうか？　それらは変化するでしょう。そして将来の世代によって、子供の言語として、尊敬されることになるでしょう。しかし、私たちが思想や祈りを語りかけている、当のその方は、あらゆる言語や方言を翻訳して解釈するでしょう。彼の前では、人間の知恵は、子供の信仰深い無知と比べて、それほど賢いものには聞こえないでしょう。

信仰

私たちの全存在の健全な成長にとって、神への信仰（フェイス）の次にくるものは、人間へのゆるぎない信仰であり、それよりも本質的なものはほかに何もありません。

＊

神に信頼しましょう。私たちに与えられるあらゆる祝福は、神のみに負っているのです。もし私たちが神を見捨てても、神はけっして私たちを見捨てません。私たちは神の愛の深さを計り知ることはできませんが、しかし信頼することはできます。　　（草稿）

＊

私たちが、神への信仰と、お互いへの信仰をもっていれば、別れの苦さは消滅します。お互いへの信仰は、この人生において、私たちを近づけておいてくれます。そして神への信仰は、永遠の中において、私たちを一緒にしておいてくれます。　　（草稿）

＊

子供時代の単純な信仰の幸福を覚えている人は、なぜそれがかき乱されねばならなかったのか、と尋ねるかもしれません。それはもっともな問いです。私たちは、その信仰の至福を知っているので、育てている子供たちの信仰をかき乱すかもしれないものが、未成熟な心に入り込むことを、自然と防御します。しかし、好むと好まざると、子供が成長して大人になるように、子供の信仰は成長して、大人の信仰になります。それは私たち人間の業ではなく、私たちをかくあらしめている神の働きです。ほかのあらゆる考えと同じように、神についての考えも、成長し変化します。私が知っている男女の中には、内なる成長の最初の兆候を捉えた時、それに怯えてしまって、全力でそれを抑えこんだ人々がいます。彼らは、内と外からくる新たな光に、耳目を閉ざしてしまいました。彼らは、子供のように幸福でありたいと願い、その多くは、子供のように善良なままでいることに、実際に成功しました。しかし、神と自らのうちに働く神の働きに信頼をおく者は、戦いの場に出ていかねばなりません。彼らにとって、試練から尻込みすることがあれば、それは臆病と無信仰になるでしょう。子供らしい信仰の幸福を、ただ享受するために、自分たちはここにいるのでしょうかか、いいえ、彼らはそう信じて安心することができません。彼らは、一つの才能を委ねられたと感じ、それをナプキンに包み込むべきではないと感じます。しかし、この戦いは厳しいものです。より厳しいことには、彼らは真理の声つまり神の声に従っていると自ら知っているのに、愛する人々の多くからは、神の声に従わず、平和をかき乱し、つつましい者たちを攻撃している、と誤解されるのです。　　（草稿）

＊

ほんとうの信仰とは、子供らしいものでなければなりませんが、大人がもっている子供らしい信仰と、子供がもっている子供らしい信仰とは、違いがあります。一方は、一度も失われたことのないパラダイスで、他方は、一度は失われ、ふたたび獲得されたパラダイスなのです。一方は子供にふさわしく、他方は大人にふさわしいものです。これらが然るべくあるのは、神の意志です。私たちがお互いに支え合い、各自の声によって、偉大な賛美の聖歌に参加するのが、神の意志なのです。　　（草稿）

＊

信仰とは、それを通して無限（ジ・インフィニット）を把握するための、知識の器官です。無限とは、感覚の圏外にあり、理性の埒外にあるので、感覚からは隠され、理性によっては否認されています。しかしそれは、信仰によって知られます。そしていったん知られると、感覚の経験と、理性の共同の基盤に横たわるものとして、知られることになります。

神の父性

父が連れていってくれるところがどこであれ、そこに父の国（祖国）があります。

＊

人間が神の子になり得るに先立って、彼は神が父であることを、発見しなければなりません。知ることは、ここに存在することであり、存在することは、知ることです。単なる奇跡によって、人が神の子になることはないでしょう。子であることは、知識を通してのみ、つまり「人間が神を知ることを通して、あるいは神に知られることを通して」、獲得できるのです。そのようなものとして獲得されるまでは、たとえそれが一つの事実としてはありえても、現実には存在していません。キリストが自分のことを「神の子」と語る言葉に、これを当てはめると、彼にとってそれが何ら奇跡や神秘ではなく、超自然的な仕組みの問題でもないことが、わかるでしょう。それは単純に、自分に関する明瞭な知識であり、その知識が、キリストをあのようにあらしめました。彼の真実で永遠の神性さを作ったのは、この知識だったのです。

未来の生活／生命／人生

人は実際、親しい魂同士が別れ別れになるのはいかにしてか、不思議に思います。また、地上でそうであったようにふたたび出会うことができないという考えには、驚きと戸惑いを覚えます。それでも、世界には連続性があり、欠点や断絶はどこにもありません。かつてあったものは、必ずやふたたびあるでしょう。いかにしてそうなるか、私たちには知り得ませんが、宇宙全体を覆いつくし、隈無く影を投げかけている叡知に信頼しさえすれば、知る必要もありません。

＊

不可視で不可知なるものに、人間はあれこれの似姿を投影したり、起こりそうなことを投影したり、さらには、地上で出会った者と再会したいと願ったりしていますが、そのような空想は期待通りに成就されるとは限らない、という考えがあります。そうかもしれません。しかしこう譲歩したからといって、実際に成就される結果が、人間の弱い心によって考え出されたり、願われたりしたものよりも、不完全であるということになるのでしょうか？　そのようなことは、とても説得的とは思えません。現にあるものが最良のものであろうと信頼すること、これが信仰によって目指されていることであり、その信仰は否応なく真実の信仰なのです。私たちはその痕跡を、多くの場所、多くの宗教の中に見いだしますが、しかし、その信仰が、最も単純に力強く表現されているのは、旧約聖書と新約聖書をおいて、ほかにどこかあるだろうか、と思うことがあります。たとえば次のような一節です。「あなたを待つ者に計らってくださる方は、神よ、あなたのほかにはありません。昔から、ほかに聞いた者も耳にした者も目に見た者もありません」（イザヤ書、六四章四節）、あるいは「しかしこのことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです」（コリント前書、二章九節）と。

＊

人間が理解し得る最高のものは、人間です。あと一歩を踏み出しさえすれば、彼は彼方（ビヨンド）に至るかも知れません。そして、彼方のものはこちらとは違っているが、不完全になることはありえない、と言えるでしょう。未来が過去よりも悪くなることは、あり得ないのです。激しい非難を浴びた進化論の中に、もし私たちに教えるべき良きものがあるとすれば、それはよりよい未来を信じること、人間が到達すべく定められているより高度の完成というものを、固く信じることです。

＊

先立った者たちに思い焦がれる時、私たちはしばしば、その若い姿や老いた姿を、男や女、父や母、夫や妻としての姿を、思い描いています。国籍や言語さえも、死後に残るものして想像されており、「何と、もし死後の魂が、年齢も性別も国民性もなく、母国語さえ持たないとしたら、彼らは私たちにとって何なのだろう？」といった発言をしばしば耳にします。答えは、彼らはこの世でそうであったごとく、まったく同じままだろう、ということです。魂には始まりがあり、出生時に存在界に飛び出してくるのだ、というような話を私たちが信じられないのであれば、人間の内なる魂は、それ以前から存在していなければなりません。しかし、いくら魂の永遠の存在を確信しても、いかにしてそうなのかについて、私たちはいつまでも無知なままでしょう。それでも、私たちは不平不満を言いません。今ここに目覚めている私という魂は、自分にとって見知らぬ人間ではありません。また、両親や配偶者や子供や友人となっている多くの魂は、この人生において、最初は見知らぬ人間として言葉を交わしましたが、今では、ずっと昔から知っているかのような、もう二度と失うことがあり得ないような、そのような存在になっています。次の人生でも同じことが再現されるのだとしたら、つまり、この人生で不思議な愛によって引き合わせられたように、次もまた最初は見知らぬ者として出会うのだとしたら、私たちは不平不満を言うべきでしょうか？　夫が妻に

語ったという、何千年も前の言葉があります。「まことに、妻を愛するがゆえに妻が慕わしいのではなく、魂を愛するがゆえに妻が慕わしいのである」と。これはどういう意味でしょうか？　それは、滅びるべきものを愛することではなく、男女の中にある永遠のものを発見し、それを愛することの中に、ほんとうの愛が存する、という意味です。サンスクリット語では、それはさまざまな名前で呼ばれていますが、しかし最良と思われるのは、アートマンという名前です。私たちはそれに「魂（ソウル）」という訳語をあてていますが、「魂」よりもっと高度で純粋な存在ですから、「自己（セルフ）」という訳語が最良です。真実の自己を構成しているもの、私たちの内にあって見守っている証人、身体のあらゆる所を満たしながらどこにも触れ得ないもの、呼吸することがないゆえに、死ぬことも消えることもあり得ないもの、それが人間の中の無限なるものです。「彼はわれわれすべてから遠く離れてはいない」とはいえ、哲学者たちはそれをずっと探求してきました。それが人間の中の神聖なるもの（ディヴァイン）、神のごときものです。

＊

南方系アーリア民族は、思想の戦いに没頭していました。彼らにとって、過去とは創造の問題であり、未来とは実存の問題でした。そして現在は、それら二つの問題を解決すべき時のはずでしたが、それは彼らの注意を引くことなく、彼らのエネルギーを奮い立たせるものでもなかったようです。他界をあれほど固く信じながら、こうしたことにあれほど無関心であった民は、ほかにはけっしてありません。彼らにとって、この地上での状況は、一つの問題でしたが、実在する永遠の生活は、一つの単純な事実でした。彼らが外からの征服者と遭遇する以前は、もっぱらこの通りの状態でしたし、その性格の痕跡は、今でも、アレクサンダー大王の仲間たちが記述したインド人たちの間に、いや、現在のインド人たちの間に、見ることができます。インド的な精神が、自由に行動したり創造したり礼拝したりできるのは、ただ宗教と哲学の領域においてのみです。そして、宗教的また形而上学的な考えが、民族の精神の根幹をこれほど深く打ったのは、インドをおいてほかのどこにもありませんでした。魂の内なる生活が、人間のほかの働きをこれほど完全に吸収した例は、歴史の中に二つと類がありません。

＊

今この人生における私たちの幸福は、のちにくるべき私たちの祝福された人生の、ほんの味見のようなものでしかありません。このことは、けっして忘れてはなりません。私たちは召されますが、またふたたび出会うでしょう。

＊

私たちは忍耐強くなければなりません。この世に私たちを愛する者がいるかぎり、私たちは皆、人生にしがみつきます。しかし、私たちを愛してくれる者は、いつも私たちのものです。世界では何も失われることがありません。それがいかにしてか、私たちは知りません。しかし、ここ地上において、神聖な叡知が働いているのを認めたならば、私たちは安んじて、来たるべきものを心静かに待つことができます。

＊

まことに、若くして召される者は幸いです。しかし私たちは、去ったときと同じままの彼らを、ふたたび見いだすでしょうか？　きっとそうなります。この地上でも、私たちが愛する者たちは、刻々に変化してゆき、日々に死んでいます。来る年ごとに、写真帳を開いて喜びに輝く人々の顔を見る時、これらの人々は皆どこにいったのかと、私たちは思います。彼らはこの地上からはいなくなりましたが、しかし他界の生活のために秘蔵されているのではないでしょうか？　そこでは私たちも、ここでのように、昨日から明日へと日々変わりつつ、同時にまた、なりたいと思うあらゆるものになり得るでしょう。そこでは、記憶と知覚とは異なったものではなく、私たちの意志は、私たちの行為と異なったものではないでしょう。私たちはいずれ、すべてを知ることになるでしょう。しかしそれまでは、私たちは現にあるがままに留まり、人間的な希望にしがみつく権利を、確実に保有しています。人間的であればあるほど、私たちはより真理に近いように思われます。

＊

私たちはまだ十分、人間的であり得ていませんが、あらゆる楽観的希望を私は信じます。私たちはあるがままでいましょう。人間として、人間らしく感じ、人間らしく悲しみ、人間らしく希望しましょう。希望は人間的なものだ、と言われます。それはほんとうですが、では疑いや困難は、どうなのでしょうか？　それらもまた、人間的なものではないでしょうか？　私たちは、別れた時と同じように、ふたたび会うでしょうか？　きっとそうなります。それがいかにしてそうなるか、私たちは知りませんが、それがあり得ないという権利が、誰にあるでしょうか？　人間として思い描き得るかぎり最善のものを、想像し希望しようではありませんか。そうしたらあとは、千倍も善いものが来るだろうと信じて、休息しましょう。

＊

内なる声は、未来の生活が現実であることについて、私がわずかの疑いや不安をもつことさえ、けっして許しません。世界中のすべてが連続しているのに、私たち人間にだけ、離別や消滅の苦痛があるということが、あり得るでしょうか？　「すべては、これまでそうであったように、これからもあり続けるであろう」、これが、私たちが自然から学ぶ教訓です。それがいかにしてか、私たちは知るように定められていません。古いギリシアの格言に、「神々が人間に告げないことを知ろうとするのは信心ではない」、という趣旨のものがあります。もし神が人間に、あることを知るよう望んだのなら、神はそれを告げてくれたことでしょう。ダーウィンは私たちに、物事には最初から最後まで連続性がある、ということを教えてくれます。

＊

私は自己（セルフ）の連続性というものを信じています。個々の自己意識がなくなったり、まったく変わってしまえば、誰かほかの人にはなり得るかもしれませんが、もはや私たち自身ではあり得ないでしょう。個人的には、私は、死後に個人の存在が続くことを、まったく疑っていません。創造されたものの中の冠や花ともいうべき頂点的な存在が、産み出した者の手によって破壊されるとは、私には想像できません。そういうことはあり得ない、と言っているわけではありません。それに対して、然りとか否とか、私たちが言うべきことではないのです。

私たちは、単純に信頼すればよいのです。しかしその信頼や信仰は、私たちに植えつけられ、周囲のあらゆる物事によって強められます。

＊

先に召された者を、私たちはほんとうに失ってしまうのでしょうか？　私には、彼らがこの世にともにあった時よりも、もっと身近にいるように感じられます。視野をもっと広くもたねばなりません。私たちの地平は、彼方にあるものからわれわれを隔てる、カーテンのようなものにすぎなません。そのことが見て取れれば、私たちの生活はここで終わるものではありません。私たちより先に行った者たちは、現在のこの地平を超えたところにいます。しかし、彼らが完全に消滅したのだと仮定する権利は、私たちにはありません。私たちには彼らが見えない、それだけのことです。しかもこの分離すら、ほんの束の間にすぎないことを、私たちは知っています。愛する者と知り合う前の長い年月、私たちは自分の人生を生き、仕事をしてきました。それと同じくらいの年月を、私たちは彼らと別れて、暮らさねばならないのかもしれません。しかし、何一つ失わるものはありません。私たちの目は、愛する者たちを見ることができないかもしれませんが、彼らを思いの中に身近に留めておけるかどうかは、私たち次第です。世界はこの小さな地球より大きいものです。このより大きな世界の中で、私たちの住まいを見つけさえすれば、その大きな家には、愛する者たちが集まっているのを、見いだすことができるでしょう。人生には偶然ということはありません。のちの世においては、数年の早い遅いなど、何事でもなかったように思われることでしょう。

＊

私は（我が子の）実際の死の意味を、完全に理解します。また、自分も同じように現実の死を迎えるであろうことを、知っています。そしてその現実の死を通るとき、キリストの霊が私を導き助け、よりよい生活にもたらし、これまでもこれからも、お互いに愛し合う者たちと、ふたたび結びつけてくれるであろうことを、信頼しています。神は不完全なものを与える与え主ではありません。神は私に生命を与えましたが、この地上だけの生命では不完全です。彼は私に愛を与えましたが、この地上だけの愛では不完全です。私は神の完全を信じており、信じなければなりません。このようなわけで、私は、完全なものにされた生命、完全なものにされた愛を、信じます。「ここに私は立つ（ヒア・シュテーエ・イヒ）。私はこのほかに何事も為し得ない（イヒ・カン・ニッヒト・アンダース）。神よ助け給え（ゴット・ヘルフェ・ミア）。アーメン」[マルティン・ルターが一五二一年に国会に審問されたときの宣言]（草稿）

＊

愛する者から当分の間まったく離れていなければならないということ、このやがて来たるべきことに関して、私たちは何も知ることができません。辛いことですが、それは私たちからあまりに遠すぎて、理解する術がないように思われます。これらのあらゆる制約は、どこに由来するのでしょうか？　満たされることのない、これらのあらゆる願望は、どこに由来するのでしょうか？　これらの制約は私たちに、人間はより高い力の手の内にあるという、一つの教訓を与えます。身体や感覚は、たとえ素晴らしいものであっても、牢獄や鎖であり、それ以外の何ものでもあり得ないものとして、そこにあるのです。　　（草稿）

＊

来たるべきことに関して、私たちを待ち受けているものに関して、私たちは何も知りません。そう知れば知るほど、私たちの信仰は、ますます大きく強くなるのです。来たるべきことは正しものであるに違いありません。悪いものではあり得ません。過去がしばしば、たいそう美しいのはなぜでしょうか？　それは、あらゆるものが美と完成に向かっており、その最高の到達点が愛だからです。私たちはまだその地点から、はるかに遠く離れていますが、それでも、人生のあらゆる悲惨は、少なくともその多くは、愛を前にすれば消滅するでしょう。最も高度に発展したとされる国々において、人生は最も不自然なものになっているようです。生活のための戦いが、そこでは苛酷をきわめるからです。休息と愛は不可能にも思われますが、しかしそれこそ、私たちが熱望するものです。それはのちの世において、与えられることでしょう。　　（草稿）

＊

死後の生活についてほとんど知らないのは、どうしたことでしょうか？　私たちがそれについて何かを想像する時、すべては人間の詩的想像だろうという感じを、ほとんど禁じることができません。私たちは、有限なるものや記述し得るものではなく、最高のものを信じるべきです。神についても事情は同じです。私たちは、信じることができる最高のものを、信じるべきです。それでも、すべては地上的で、人間的で、弱いのです。私たちは、ここでは暗い牢獄の中にいますが、外には、闇ではなく光があると信じましょう。それがどのような光かは、誰も知りません。

＊

待ちなさい、待ちなさい、質問してはいけません。子供たちは毎年、幼児キリストが何を持ってきてくれるのか、と尋ねますが、それに答えはなく、彼らは暗い部屋で待ちます。毎年、彼らはまったく新しいものを期待しますが、いつもと同じような、灯りやら花やらで飾られたクリスマル・ツリーがあるだけです。ところが、ドアが開いて、この暗い生活から明るい部屋に出ていく時、すべてがこんなに違っているのは、なぜでしょう？　なぜあらゆるものが違っているのでしょう？　私たちはかつて、この地上の暗い部屋に入ってきました。そして、ここはとても明るくとても暖かいと、何度も何度も思いました。私たちは、今度は別の部屋に入っていくことになるでしょう。そしてそこは、より明るく、より暖かく、より純粋で、より完全であることでしょう。　　（草稿）

＊

過去、現在、未来とは、何でしょう？　それは一つではないでしょうか。ただ、過去と未来は、現在にいる私たちが、存在できないどこかにあるのです。しばらく待っていると、永遠なるものが現在という位置にやってくるでしょう。そして私たちは、過去をふたたび手にするでしょう。それは失われていないからです。何も失われるものはありません。しかしこのように待つこと、このように乞い願うことは、時としてたいへん辛いものです。友人たちはあちこちに去ってゆき、この世がまるで違った世界のように見えますが、ここにはまだなすべき仕事があり、愛すべき多くの人々が残っています。　　（草稿）

＊

不死ということは、存在の継続という意味でしか、用いられないことがあります。また、ユダヤ人にとって、不死の信仰という言葉で意味されるのは、死ぬ時に魂が消滅することなど信じない、ということのようです。もしそうであれば、この「霊魂消滅（アニヒレーション）」という考えが、ユダヤ民族の大多数にとって、いまだ疎遠なものであるということを、私たちは確信をもって主張できるかもしれません。実は、完全な「霊魂消滅」や「無（ナッシングネス）」というこの考えは、かなりの哲学的教育を受けたことのある精神の持ち主以外には、ほとんど見られないものです。初期のユダヤ人の精神は、おそらくそこには達していませんでした。ユダヤ人は、魂の完全な破壊ということを、信じていませんでした。しかしその一方、彼らが考える死後の生活とは、まったく生活と言えるようなものではありませんでした。それは生命のない存在でした。彼らはギリシア人と同様、死を最大の不幸と考えていました。死において喜ぶというのは、純粋にキリスト教的な考えであり、ユダヤ教的ではありません。ユダヤ人は、魂は冥府（シェオル）で存在しつづけると信じていましたが、そこでは悪人は罰せられ善人は報われる、とは信じませんでした。美徳に対する報償と、悪徳に対する刑罰は、この世界に限られていました。そして長生きは、エホヴァの恩寵の確かな証拠と、みなされていました。それがユダヤ人たちの考える神であり、それはこの世から無限に隔たっていたため、彼らにはほんとうの不死への信仰が、ほとんど不可能でした。また、神にもっと近づくという希望、神にのみ帰せられるべきほんとうの不死に何らか与るという希望も、奪われていました。　（草稿）

＊

私たちの天使は、この地上ではなく、天にいます。人間の中の天使的なものを認識できるのは、彼らがもはや見られなくなった時です。最も愛する者たちに対してすら、そうなのです。彼らは死後、かつてよりも私たちに近くなり、私たちはかつてよりも、彼らをより愛するようになります。彼らは、私たちの心を地上から引き上げ、それをほんとうの家への憧れでいっぱいに満たします。天にそのような天使がいる人は、幸福です。彼らは、人生の重荷を軽くし、生活の喜びに、静かで優しい風合いを与えます。彼らは、かつて知らなかったような愛、すべてを堪え忍び、すべてを信じ、すべてを喜んで許すような愛をもって、この地上に残された者たちを愛するよう、私たちに教えます。それはたった数日のことなのか、それとも数年のことなのか、わかりませんけれども。　（草稿）

＊

永遠の生命。私たちはなぜこうもしばしば、この大きな問題に向き合うのでしょうか。私の見るところ、その主要な理由は、私たちは何も知ることができないし、私たちは待って信頼しなければならない、という確信です。ここにある日々の仕事を、行ないなさい。神の意志によらないかぎり、何事も起こり得ないと信じなさい。知識が可能なところでは、知りなさい。信仰のみが可能なところでは、信じて、信頼しなさい。　（草稿）

＊

私たちはふたたび会うだろうと、私は知っています。神は自分の作ったものを破壊しないし、魂は偶然に出会うことはないからです。この人生は謎に満ちています。しかし神聖な謎は、神聖な結論をもっています。

無限なるもの

有限なるものを、そのあるがままの姿で知ることは、私たちにはできません。しかし、それらが存在するということは、ともかく知っています。そしてこれは、「無限なるもの（ジ・インフィニット）」の知覚に関しても、当てはまることです。それが何であるのか、感覚を通しては分かりませんが、それが存在するということは、まさに感覚を通して、私たちに分かるのです。有限なるものの中に、私たちは、無限なるものの圧力を感じます。「無限なるもの」という言葉で何を信じるにせよ、もしこの圧感がなかったならば、その信仰のための真実で確実な基盤を、私たちはもち得ないでしょう。私が「無限なるもの」と呼んでいるものは、ある批評家によれば、ただ「限界のないもの（ジ・インデフィニット）」にすぎない、とのことです。当然そうです。私たちは無限なるものを、ただ限界のないものとしてのみ、あるいは部分的に限界のあるものとして、知り得るのです。私たちはそれを限界づけよう（定義づけよう）、よりよく知ろうと務めますが、これは果てしのない試みです。全宗教史は、無限なるものを制限（定義）しようとする、人類の絶え間ない進歩を示しています。しかしその試みがどこまで深く進もうと、無限なるものはけっして汲み尽くされないでしょう。私たちがそれを制限（定義）した時点で、それは無限なるものであることを止め、知られざるもの、考え及ばないもの、あるいは神聖なるものであることを、止めるでしょう。

＊

あらゆる感覚への圧力を通して、私たちは、無限なるものの圧力を感じています。私たちの感覚が感じるものはどれも、こう言ってよければ、無限なるもの以外の何ものでもありません。それらの豊かさをとおして、感覚は無限なるものを把握します。有限なるものを把握するとは、無限なるものを制限（定義）するというのと、同じことなのです。

＊

原始の未開人は、五感しか持っていなかった、と私たちは考えています。彼らはこれらの五感によって、有限なるものの知識を与えられました。ここで問題になるのは、そうした人類が、有限なるものではなく、無限なるものについて、考えたり話したりするようになったのは、いったいどのようにしてか、ということです。無限なるものの第一印象を彼に与え、無限なるものがあることを認めるよう彼に強いたのは、それらの感覚です。原始の未開人にとって、あるいは人類の知的活動の初期の段階の人々にとって、限界・制限を認められないものはすべて、限界のないもの、無限なるものでした。人間の目は、一定の所までは見ることができますが、そこから先は、視界が利かなくなります。しかし、人間の視界が利かなくなるまさにその所で、否応もなく、限界のないもの、無限なるものの知覚が、人間に圧力をかけてきます。言葉の通常の意味では、それは知覚ではない、と言えるかもしれません。より進んだ営みですが、それでもただの推量よりは、手前にある営みです。無限なるものを知覚するに際して、私たちは、数を数えたり、寸法を測ったり、比較したり、名前をつけたりはしません。私たちはそれが何であるかは知りませんが、それが存在することは知っています。そして、私たちがそれを知るのは、それを実際に感じるからであり、それに接触させられるからなのです。人間は「不可視なるもの」を実際に見る、と言えば、あまりに大胆と思

われるかもしれません。では、人間は不可視なるものの力を受ける、と言いましょう。この「不可視なるもの」とは、「無限なるもの」の、一つの別名にほかなりません。したがって、「無限なるもの」は、ただあとになって抽象されるのではなく、実は、感覚に基づく知識の最初の顕現に、もともと含まれているのです。そもそもの初めからそれは真実だったのですが、まだ定義されず、名前もつけられていなかっただけなのです。もし、無限なるものが、私たちの感覚に基づく知覚の中に、最初から現前していなかったとしたら、「無限」といった言葉は、一つの音にすぎなかったでしょう。有限なるものの知覚そのものに、無限なるものの知覚、無限なるものの感情、無限なるものの現前が、付随しています。触覚、聴覚、視覚の最初の働きによって、見えるものと接触するだけでなく、私たちは同時に、不可視の世界との接触に導かれます。この中には、宗教が可能になるために、欠くことのできないものが含まれています。この無限なるものの知覚の中に、宗教の発達の全歴史の根拠があります。

*

いかなる考えも、いかなる名前も、まったく失われてしまったことはありません。私たちは今、ここウェストミンスター寺院におりますが、これは遠い昔の、古代ローマ時代の寺院の廃墟の上に、建てられたものです。ここで私たちは、小さな暗い部屋に跪(ひざまず)き、ふたたび子供になったように感じながら、四方八方から私たちを取り囲む無限なるもの、知られざるもの、世界の真実のセルフ、私たち自身の真実のセルフ、いずれにせよ不可視なるものを表わす名前を求めても、「天にます我らの父」という名前よりも良い名前を、思いつくことができないのです。

*

無限という考えは、すべての宗教思想の根にあります。それは、理性によって無から作り出されたのではなく、私たちの感覚によって、そのオリジナルな形が私たちに供給されたものです。有限なるものの彼方に、背後に、足下に、内部に、無限なるものがあって、それがつねに私たちの感覚に現前しています。それは四方八方から私たちに圧力をかけ、私たちの上に覆い育ってきます。私たちが有限と呼ぶものは、時空間の中にあって形と名前をもっていますが、それらは、無限なるものの上に、私たちが投げかけたヴェールあるいは網なのです。無限なるものなしに有限なるもの思い描くこと、有限なるものなしに無限なるものを思い描くこと、これはどちらもまったくの不可能事です。理性は人間に、感覚や信仰やその他もろもろの働きを提供して、有限な物質を取り扱いますが、同時に、それら有限なるものの深層に横たわる、無限なるものを取り扱います。感覚、理性、信仰と呼ばれるものは、知覚する同一の自己のもつ三つの機能です。しかし感覚なしには、理性も信仰もあり得ません。少なくとも、今ある私たちのような存在にとっては、そうなのです。

*

人類の祖先は、川や山、空や太陽、雷や雨の中に、多かれ少なかれ感覚に現われる神聖なる力が宿っていることを、信じていました。しかしまた同様に、人類の感覚は、あらゆる宗教に本質的な二つの概念、つまり無限という概念と、法と秩序という概念とを、人類に暗示していました。これらは、一方は夜明けの黄金の海として、他方は太陽の日々の運行として、人類の前に啓示されていました。後者の二つの概念は、遅かれ早かれ、全人類の心に取り込

まれるべきものでしたが、最初は一つの衝動のようなものでしかありませんでした。しかしこの衝動的力は、人類の父祖の心の奥深くに、「すべては良い」という印象を消しがたく刻み込み、人類の心を「すべては良くなるだろう」という希望以上のもので満たすまで、休むことはありませんでした。

＊

ほんとうに宗教的な本能あるいは衝動というのは、「無限なるものの知覚」です。

＊

私たちがあらゆる対象を知覚し、それについて思いをめぐらし、それに命名しようとする時、それらは周囲の環境から区切られ、区別され、測られねばなりません。そうしてはじめて、それらは、知覚し得るもの、知り得るもの、名付け得るものとなります。したがって、それらはもともとの本性からして、有限なるものです。有限なるものの限界というものは、それをいかなる意味で考えるにせよ、つねにその彼方にある何物かを暗示しています。もし私たちの通常の知識にとって、有限であることが不可欠の要件であるならば、このことは、少し考えただけでわかることです。私たちの精神は、否応もなくそのようにできているので、究極の限界というものを思い浮べることはできない、と言われています。いかなる限界の向こうにも、何か別のものが当然あるということを、私たちはいつも認めなければなりません。しかし、その理由は何でしょうか？　私たちが究極の限界を思い浮べることができないのは、私たちがその究極の限界なるものを、知覚することがないからです。あるいは、別の言い方をすれば、私たちは有限なるものを知覚する時、つねに無限なるものをも知覚しているからです。あらゆる限界は、二つの側面をもっており、その一方は私たちの側を向き、他方は彼方（ビヨンド）を向いています。そもそもの初めから、あらゆるものの真の基盤となっているのは、この彼方なるものであり、それを私たちは、知覚的あるいは概念的な知における、超越的（トランスセンデンタル）なるものと呼びます。

＊

物質的現象における無限なるものの顕現が、神話や宗教のさまざまな考え方の、最も原初的で最も豊穣な源泉であったことは、疑いがありません。とはいえ、無限なるものは、自然というヴェールの背後だけに、発見されたものではありません。それ以外にも、無限なるものあるいは未知なるものは、さらに二つの仕方で顕現しました。物心ついて以来の人類の精神は、神々の起源についてのさまざまな考えを経験しなければなりませんでしたが、この全プロセスにわたる洞察を得たいと望むならば、その二つのことは無視されてはなりません。つまり、無限なるものは、自然においてのみならず、また対象として見られた人間においても、さらには主体として見られた人間においても、自らを開示したのです。対象として見られた人間は、生きて動くものとして、自然の中の単なる部分より以上のもの、と感じられました。人間の中には何ものかが存在しました。それを息と呼ぼうが、霊（スピリット）、魂（ソウル）、精神（マインド）と呼ぼうが、それらはごく初期から、知覚されたり知覚されなかったりしながら、肉体というヴェールの背後にあって、そこに居住しているように思われ、病気や死が肉体を破壊したり崩壊させたりしても、手付かずのまま残るものだと、信じられていました。たとえばここに最も単純素朴な農民がいて、彼の父親が死んで、遺体が崩壊していくのを見た時、今まで父親だ

と思っていたものの存在が、魂であれ精神であれ人格であれ、それはまったく消滅したのだと、彼に信じさせるだけの説得力あるものは、どこにもありませんでした。哲学者の中には、そのような考えに達した者もいますが、通常の理解力をもった人間ならば、むしろ、死に際の形相に慄きながらも、自分がこれまで父や母と呼んで慣れ親しみ愛してきた存在は、もはや肉体の中にはいないにしても、どこかに存在するに違いない、と信じたいと思ったことでしょう。そのような信仰が普遍的だというのは、おそらく言い過ぎかもしれませんが、少なくともそれは非常に広く普及したいましたし、今もなおその通りなのです。実際それは、宗教や宗教的礼拝の、非常に大きな部分を成しています。

＊

自然、人間、そして自己（セルフ）という、三つの大いなる顕現は、無限なるものが何らかの形をとって知覚される際の回路です。これら三つの知覚はすべて、それぞれの歴史の発展段階において、宗教と呼び得るものに貢献してきました。

＊

ほかのあらゆる経験と同様、宗教的な経験も、感覚とともに始まります。感覚がもたらすのは、有限な経験だけのように、思われるかも知れません。しかしその、すべてにではないにせよ、多くのものには、知を超えたもの、知られ得ざるもの、無限と呼び得るものが、何か含まれているのを、示すことができます。このようにして、人間の精神は、私たちの有限な経験の彼方や背後、あるいは内部にある、定義（制限）し得ない無限な作用因や行為者を、認識するに至ります。これらの作用や力能の顕現によって引き起こされた、恐れや畏怖や尊敬や愛といった感情は、人間の精神にさらに働きかけて、やがて私たちが「自然宗教（ナチュラル・レリジョン）」と呼ぶものの、最も低く単純な形態を、産み出すに至ります。それが、神々への恐れ、畏怖、尊敬、愛です。

＊

「無限なるものの知覚」は、あらゆる宗教が共有する一つの要素であり、このことは、歴史的な証拠によって示すことができます。ただ、私たちが忘れてならないのは、ほかのあらゆる概念と同様、「無限なるもの」という概念も、歴史的な進化の多くの位相を、通過してこなければならなかった、ということです。それは有限なるものの単純な否定に始まり、彼方なる不可視のものの主張を経て、そのあとになってようやく、私たちがその中で生き動き、存在を保っている、リアルな無限なるものがあるという、最も確実な信仰へと、高まったのです。

知（識）

私たちの知（識）には限界があるという教訓は、古くからあるものですが、何度も繰り返し教えられるべき教訓です。仏陀もこれを教えましたし、ソクラテスも教えましたが、最近では、カントがもっとも強力なやりかたで、これを教えました。哲学は、人間の知に関する知であると言われて来ました。しかしより正確に言えば、それは人間の無知に関する知であると言うべきかもしれません。あるいはもっと穏健に言えば、人間の知の限界に関する知であるという、カントの言葉を採用すべきかもしれません。

＊

形而上的な真理は、物理的な真理より、幅広いものです。物理学の観察者による新たな発見は、それらがもし単なる偶発的な真理以上のものであるとすれば、形而上学者によって跡づけられた不動の限界の内側に、休らうべくあてがわれた居場所と、自然な隠れ場を見いだすはずです。自然の研究者が、ただしい精神で仕事を始められるようになるのは、形而上的な原理を身につけてからあとのことです。そうしてはじめて、彼は人間の知の地平をわきまえ、北極星のように不動の原理によって導かれることができます。

＊

人間の知の全領域の中における主題で、明確に知り得るものにできないものは、何一つありません。もし私たち自身が、それに完璧に熟達したならば、ですが。

＊

アーリア世界の全歴史をつなぐ思想と嘆息の橋を見ると、最初のアーチはヴェーダにあり、最後のアーチはカントの『純粋理性批判』にあります。私たちはヴェーダの中に、ほかのどこにも見られない人間精神の最初の開示を見ます。人生は単純で、自然で、子供らしく見えます。この人生の下にあるもの、上にあるもの、彼方にあるものは、ぼんやりと知覚されており、あらゆる言葉や流儀で表現されています。表わし得ないものを表そうとして、すべてが口ごもった表現でしかありませんが、それでもすべては、自然の中の神聖なるもの、有限の中の自然なるものが現前しているという、リアルな信仰に満ちています。私たちはヴェーダの中に、アーリア精神の幼児期を学ぶでしょうが、カントの『批判』においては、完全な成熟期を学ぶことでしょう。この精神は、多くの段階を経験してきており、その中にはそれぞれの段階の痕跡が残されています。それはもはやドグマ的ではなく、懐疑的でもありませんが、とりわけそれは、自信過剰ではありません。それは私たちの前に、自らの弱さと強さ、温厚さと勇敢さを自覚して、立っています。それは、自らの幼児期と少年期の昔の偶像が何からできていたのか、今は知っています。そして、それらの偶像を壊すのではなく、それらを理解しようと試みるだけですが、ただそれらのはるか上に、「理性」という理想を措くのです。それはもはや耳目に触れるものではなく、悟性の届く範囲をも超えていますが、リアルに輝いており、闇夜にも私たちを導く天上の星のようなものなのです。

＊

あらゆる知は、それが知であり得るためには、二つの門を、二つの門だけを通らねばなりません。つまり、感覚という門と、理性という門です。宗教的な知もまた、真実のものであ

れ虚偽のものであれ、この二つの門を通ってきたはずです。したがって、私たちはこの二つの門を拠り所とします。ほかの門を通って入ってきた主義主張はみな、原初の啓示と呼ばれようが、宗教的本能と呼ばれようが、思想の密輸品として、拒絶せねばなりません。また、はじめに感覚の門を通ることなく、理性の門だけを通ってきたと主張するものに対しても、妥当性が不十分だとして、これを拒絶せねばなりません。あるいは、少なくとも最初の門に戻って、そこで十分な証明書をもらってくるよう、追い帰さねばなりません。

言語

言語の歴史が私たちに開いて見せるのは、人にほとんどめまいを起こさせるような、果ての見えない景色です。年代学者の物差しは、それを計るのにはまったく役立たないだろうと思われます。見る目をもっている人は、言語が歴史に最初に出現した段階と、人間の発話が実際に始まった段階との間の、計りしれない距離を、見ることができるでしょう。見る目をもたない人は、仏教徒たちのとても大きな姿や、あるいはラビたちのとても小さな姿の間で、行ったり来たりすることでしょうが、それでも彼らは、本来の無限なるものを捉えることは、けっしてないでしょう。

＊

動物に備わるあらゆる能力から、言語がいかにして発達してきたのか、私は自らに説明することができます。たとえそのために何百万年かかっただろうと認めるにしても、理解しようとわざわざ努力することなく、想像の翼を広げることもなく、です。人間という「種に特有な特徴」と呼ぶに値するものが何かあるとすれば、言語こそがそれです。私たちはそれを、人間において、人間においてのみ、見いだすからです。哲学辞典から「種に特有の特徴」という見いだし語を削除したとしても、人間という名に値するのは、語ることができるものだけだという意見に、私は固執するでしょう。

＊

すべての言語は学習されねばなりませんが、では学習されるべき言語を作ったのは、誰でしょうか？　言語を、人間の本能であるとか、天賦の才能や、機能であると呼ぼうが、あるいは特性と呼ぼうが、ほとんど意味はありません。確かなことは、言語あるいは言語能力、あるいは言語が可能となる条件は、動物界の中でも、人間にしか見出だされない、ということです。

＊

ユダヤ人と異教徒の間、ギリシア人と野蛮人の間、白人と黒人の間、これらを隔てる壁を最初に壊したのは、キリスト教でした。人間性（ヒューマニティ）という言葉を、プラトンやアリストテレスの中に探しても、無駄なことです。一つの家族としての人類（マンカインド）、神の子供たちとしての人類とい

う考えは、キリスト教の発展とともに出てきた言葉です。そして、人類の科学、人類の言語の科学は、キリスト教がなかったならば、けっして生じることはなかったでしょう。あらゆる人を兄弟と見るように教えられて以来、その時になってようやく、人類の語る言葉の多様性が、思慮深い観察者の目に、解決を要する問題として、立ち現われてきました。そして歴史的な観点からは、聖霊降臨日（ペンテコスト）の第一日が、まさしく言語の科学の始まりを印している、と言って過言ではありません。

＊

さて今、私たちは母国の岸辺から、人間たちの語る言葉の大海を見ています。波また波が、歴史の夜明けの新鮮なそよ風に吹かれて起こり、大陸から大陸へと逆巻き、潮の香りに満ちた私たちの大気へ、ゆっくりとうねってきます。その水面には帆船が滑り、多くのオールが磯波を漕ぎ渡り、あらゆる国々の旗が、喜ばしげに一斉に揺れています。辺りには、岩礁や難破船、嵐や戦もありますが、大海はそれらすべてを、静かに映しだしています。私たちはまた、不思議な音が、途切れることなく耳に入ってくるのに、耳を傾けていますが、それらはもはや荒々しい喧騒のようではなく、私たちはあたかも、どこか古代の大聖堂の中にいて、無数の声の合唱を聴いているかのように感じます。私たちが耳をそばだてて聴けば聴くほど、不協和音と聞こえたあらゆる音も、より高い和音へと溶け込みます。そしてついに私たちは、聖なる交響楽の終結部が来たかのように、一つの堂々とした三弦楽器か、力強い斉奏の響きを聴くのです。そのようなビジョンが、文法学者の学問を通して浮上するでしょう。そしてそのような苦労の多い研究のさなか、人類は言葉のもっとも単純な意味で兄弟なのだ、たとえ国や言語や信仰は違っても、同じ父をもつ子供同士なのだ、という確信が強まるにつれ、彼の心臓は突然熱い鼓動を打ちはじめることでしょう。

生活／生命／人生

ほんとうに偉大で正直な人間は皆、三つの生活を送る、と言われています。世間一般によって見られ、受け入れられる一つめの生活があり、これは人間の外なる生活です。最も親密な友人によってのみ見られる二つめの生活があり、これは彼の家庭内の生活です。そして三つめの人生は、その人自身によって、また、人間の心を探し求める方によってのみ見られるもので、内なる生活、天なる生活と呼ばれます。これは、神との交わりの中で営まれる生活であり、すでに成し遂げられた生活というよりは、むしろ未来に向けて願い求める生活です。

＊

プラトンは、人間の言葉の中に、不完全なものや、創始者の失敗しか、見ませんでした。しかし私たちはそこに、人間の生活のあらゆる面におけるのと同様、不完全から完全へと向かう自然の進歩、理想的なものを実現しようとする止むことのない努力、などを認めます。

地上的な条件のもとでは、避けがたい多くの困難がありますが、人間の精神は、この困難との戦いにおいて、しばしば勝利をおさめてきました。それらの困難と思われるものは、人間が自ら作ったものではなく、より高い力、至高の叡知によって、人間の労苦と課題のために、確実な目的をもって、備えられたものです。私は、固くそう信じています。

＊

私たちの人生は、まったく私たちの手の内にある、というものではありません。私たちは、心の内奥で冷笑する多くのものに、服従しなければなりません。しかしそれらは、私たちの幸福のためだけではなく、私たちがそのためにここに呼ばれた義務を果たすためにも、本質的なものです。私たちは、自分が生まれ育てられた環境を、より高い力によって定められたものと見なすべきです。そして私たちは、指し示された道を歩むことを、学ばねばなりません！

＊

自分自身につねに誠実であること、つねにそうありたいと思う通りにあること、そうあるべきだと感じている通りにあること、これは難しいことです。私たちがそのように感じているかぎり、私たちが人生の理想を放棄しないかぎり、すべては正しいのです。私たちの願い求めるものは、私たちの日々の実生活よりも、私たちの魂の本性を、よりよく反映しています。私もあなたと同様、走るように定められたレースで、はるかうしろに取り残されていることを、痛感しています。しかし私は、自ら立ち上がり、そうあるべきと感じる状態にまで達するよう、誠実に努力しています。小さくて平凡で利己的なことに対して、絶え間なく戦うよう、わが身を持しましょう。理想的な生活への信仰というものを、けっして失わないようにしましょう。私たちは、そのような生活の中にあるべきですし、神への絶え間ない祈りによって、私たちはそこにあることができるでしょう。そして、神が注いでくれるあらゆる祝福に、私たちがいかに値しない存在であるか、けっして忘れないようにしましょう。

＊

どんな小さな不幸であっても、私はとてもありがたく感じます。あたかも、私たちに与えられた幸福という大きな負債の、一部を支払うようなものですが、それはまったく取りに足りない利子で、元本は永遠に負わなければならないのです。　　（草稿）

＊

私は長い間、私の幸福について、私がそれに値しないことについて、また神の限りない慈悲について、考えました。それから、私は自らの内に、「恐れるな」という言葉を聴きました。そうです、恐れるものは何もありません。恐れのあるところ、完璧な愛はありません。この地上における私たちの幸福は、のちに来るべき祝福された生活の、ほんの味見のようなものでしかありません。私たちはこのことをけっして忘れてはなりません。私たちは召されますが、またふたたび会うでしょう。　　（草稿）

＊

私は、落胆についても、まったくありがたく感じるようなりました。私たちは皆、ネジを巻かれて元気になる必要があります。大きな落胆は、私たちのネジを巻きます。私たちにそ

れを送ったのは誰かを、はっきりと見てとり、そのこと以外はすべて忘れさえすれば、こんなに良いネジ巻きは、ほかにありません。　　（草稿）

＊

ここでのあらゆることは、のちに来るべきことの準備にすぎない、ということを、人は時々忘れます。しかしそのことは、けっして忘れてはなりません。さもないと、この人生は、ほんとうの意味と目的を失います。私たちがここに生きているのは何のためか、ということさえ知っていれば、この人生で持つに値するものは何か、そうでないものは何か、容易に判別することができます。この世界のみに目が釘づけになっている人々が、自分たちの幸福のために本質的だと考える、多くの事物があります。のちに来るべきものを知っている私たちは、そうしたものがなくても、この人生を容易に進んでいけるのです。　　（草稿）

＊

愛の精神（スピリット）と真理の精神、この二つは、私たちの全存在、あるいは、同じことですが、私たちの全宗教の、生命の源泉です。もしも、私たちを持ち上げ、私たちをより高い世界に結びつけている、その結びつきが失われれば、人生は、目的のない、喜びのないものになります。もしそれが私たちを持ち上げ支えるなら、人生は完全になり、小さな心配事はすべて消滅し、私たちは偉大な目的を、可能な限りうまく仕上げつつあると感じます。その目的は、私たち自身のものではなく、利己的な目的を求めるものではなく、言葉の最も真実の意味で、神に使え、神を求めるものです。温和さとは、愛と真実さの一種の混合で、ほんとうの温和さは、私たちの人生のすべてに魅力を投げかけます。そのような温和さにより近づくことが、人生の最も高い目標であるべきです。声にも、外見にも、振る舞いにも、言葉使いにも、温和さが表現されるのは、すべて心のほんとうの温和さが外に現われたものにほかなりません。
（草稿）

＊

人生観を高くかかげすぎる、ということはあり得ません。私たちが最も高いと思うものでも、まだ低すぎるのです。人生が次第に終わりに近づくにつれ、かつて重要と思われた多くの事柄が、まったく取るに足りないものと感じられるようになります。永遠に意味あるものとして残るのは、ほんのわずかばかりです。　　（草稿）

＊

この世的（ワールドリ）な知恵といわれるものを、私は信じません。世界がそのように作られたとは、私には思えません。より高い人生へのほんとうの信仰をもつことで、人はこの人生を妨害や障害なしに通過できると、私は信じています。私が恐ろしいと思うのは、妥協です。そこにはつねに虚偽の響きがあります。そして虚偽の響きは、いつまでも残るのです。　　（草稿）

＊

楽しむべきあらゆるものを豊かに与えてくれる神に対して、私たちがそのような存在とされたことに、私たちは毎分毎分、どれほど感謝すればよいのでしょうか。人生が重荷であり、辛く苦しい試練に苦しんでいる、多くのかわいそうな人々がいます。私たちは彼らよりも、この幸福な人生に値しないこと、いかばかりでしょうか。しかし、であるならば、私たちは

いかに大きなことを求められることでしょう。怠けないこと、時間や力を浪費しないこと、妥協しないこと、あらゆる事々に神を誉め讃えて生活すること、つねに神とともにあること、神の声に、神の声のみに、従う準備をしておくこと、こうした義務が、さらにどれほど聖なるものとなることでしょう。繁栄は私たちに、反対のものが来たときはそれを受け止めよ、と教えてくれたでしょうか？　私はしばしば恐れ戦きますが、すぐにすべてを神に委ね、こう言います。「この哀れむべき罪人を、哀れんで下さい」と。

＊

この人生には、何かとてつもなく恐ろしいものがあります。そしてそれを忘れようとするのは、正しいことではありません。ほかの人が試練の中にあるのを見て、何かが私たちにも降りかかってくるかもしれないこと、そうなっていないのは自分に何か長所があるからではなく、天の父の愛によってのみであること、こうしたことを思い出すべきなのです。
（草稿）

＊

人生は、若い時にそう考えていたものと、何と異なっていることでしょう。周囲のあらゆるものが変わってしまい、私たち自身もこのように変わっています。地上のものすべては、いかに無意味で虚しく見えることでしょう。そして彼方の生活の現実性が、いかに身近に迫ってくることでしょうか。ここでは、多くの美しい日々がありました。しかし幸福が大きければ大きいだけ、それらすべてが過ぎ去るのだ、地上の幸福は跡形もなくなるのだ、という考えが、より辛いものになります。ただ、私たちにとって何が最も良いことか、最もよく知っている神への、感謝の心と信仰だけが、残るのです。　　（草稿）

＊

ほんとうに、この人生において本質的でないすべてのものを、忘れることができさえしたら、そうして、この人生で束の間ともに過ごすだけの人々の、真に偉大で善良な性格を知ることができさえしたら！　ささいなことを重大視することで、私たちはいかに多くのものを失っていることでしょうか、また本質的で永続的なものを、それにふさわしく十分に考慮することが、いかに稀なことでしょうか！　　（草稿）

＊

ここは私たちの永住の地ではないこと、私たちが自分のものと呼んでいるのは、ただ借りているだけで与えられたものではないこと、こうした考えに、あなたはますます親しむようにしなければなりません。そして、私たちのもとを去った人々への悲しみは変わらなくても、神が彼らを親や子や友として私たちに会わせてくださり、長い年月をともに楽しく過ごすという大いなる祝福を与えてくださったことを、神に感謝しなければなりません。最も親しい人々と過ごした幸福な年月を、人はあまりにも容易に忘れてしまいます。そうした幸福な年月は、たとえ短かったとしても、それに値しない私たちに、ただ与えられたものです。この別れの苦しみに何の慰めもないことを、私はよく知っています。傷はいつまでも残りますが、人はその苦しみに耐えることを学び、神が与えてくれたものに、過去の美しい思い出やもっと美しい未来への希望に、感謝することを学ぶのです。人があるものを私たちに何年か貸してくれたあと、それを返してくれと言う時、私たちに期待されているのは、感謝であって、

怒りではないでしょう。神は、私たちの弱さに対して、人間よりも忍耐強いかもしれません。それでも、私たちのためを思って与えてくれた人生に、私たちが不平不満を言うとしたら、それは神が期待していることではないでしょう。神の意志に服従する精神は、私たちの唯一の慰めであり、神が与えた試練の中の唯一の救いです。そのような精神をもつことによって、人生の試練はその軽重にかかわりなく、耐えられるものとなるだけでなく、有益なものとなるのですし、また神への感謝と、生と死における歓喜が、何物にも妨げられず残るのです。

＊

墓の傍らに立つ時、人は人生とは実際には何かということを、学びます。ほんとうの人生はここではなく別のところにあるのだということ、ここは異郷であり故郷はあそこにあるのだということを、学びます。年齢を重ねるにつれ、人生という列車はますます速く走るようになり、一緒に旅行していた人々は駅ごとに降りていきます。そして私たちが降りるべき駅も、やがて告げられることでしょう。　　（草稿）

＊

一瞬一瞬が歓喜と幸福に満ち、あらゆるものを楽しむようにと、あり余るほど豊富なものと与えてくれた神への感謝に満ちてあるべきです。そうでない一瞬が過ぎ去るのを許すことは、私には恩知らずなことに思われます。やがて雲が出てくるでしょう。それはそうでなければなりません。しかしそれはけっして、私たちが作った雲であってはなりません。

＊

影はますます濃くなってきますが、しかし日陰でも、影一つささない日向より、しばしばよいことがあります。そして夕方になると、人は疲れて眠る用意をするのです！　ちょうどそのように、あらゆるものが私たちのために整えられています。私たちは、ただ心静かに、それに順応すればよいのです。

＊

神の意志がそうであるかぎり、私たちはこの人生に耐えることを学ばねばなりません。しかし神が私たちを呼んだら、その時は、私たちは進んで目を閉じるでしょう。ここよりも向こうのほうが、私たちにとってより良いことを、私たちは知っているからです。私たちが愛した人々の多くが先に行っていますから、私たちは喜んでそのあとに従います。人がこの世で年をとるにつれ、死は一つの救いだと感じられるようになります。それでも私たちは、この地上で自分たちに残された多少のものを、かつてほどそれに心が執着することはもうないとはいえ、感謝して楽しむことができます。

＊

この人生は、私たちが自ら作ったものではありません。そして私たちは、それがすべての人にとって、考え得るかぎり最善のものであることを、知っています。私たちはそれに耐えるべきであり、実際に耐えることになります。そして、より忍耐強く、より嬉々としてそれに寄り添った分だけ、それはより良いものとなります。人生をあるがままに、与えられた道をそのままに、私たちは受け取らねばなりません。そうすれば、私たちは確かな目的地に導かれるにきまっています。速やかに進む人もあれば、遅れて行く人もあるでしょうが、いずれにせよ私たちは誰もが同じ道を行き、誰もが同じ安息の地を見いだします。短気や陰気、

不平や涙は、私たちには役立ちません。それらは何も変えることはなく、道をいっそう長くするだけで、短くすることはありません。平静、忍従、感謝、信仰、これらが私たちを先に進ませるものであり、そしてこれらのみが、私たちすべてがそれぞれの持ち場で課された義務を果たすべき、助けとなり得るのです。夜の闇がより深いほど、天の星はより明るいのです。

＊

もしも私たちが、日々の交わりや語らいの中で、友人たちが臨終の床にあるかのように接するなら、人生はどれほど違って見えるでしょうか。またどれほど違った裁き方をし、どれほど違った振る舞い方をすることでしょうか。その時は、地上的なものはすべて忘却され、人間にありがちな性格上の小さな欠点はすべて心から消滅し、私たちはただ良いものだけ、非利己的なものだけ、魂の中の愛すべきものだけを、見ることでしょう。またその愛に報いるため、もっとたくさんの行ないをすべきであったのにと、どれほど後悔することでしょう。興味深いことに、私たちは死というものを忘れがちであり、人間は日々死んでいるのだということ、私たちが人生と呼んでいるのは、ほんとうは死であり、死と呼んでいるのは、より高い人生の始まりだということを、ほとんど考えないのです。こうした考えが、私たちの人生をより明るくしないものであってはなりません。私たちが重要だと考えていた多くのものが、いかにつまらないものであったかを、それは私たちに感じさせるはずです。私たちあるいは友人たちが、明日にでも取り去られるかもしれないと考えてみれば、たとえ短時間ではあっても、耐え難いと思っていることにも、どうにか耐えられるでしょう。あなたは、死について考えるべきです。そうして、自分のものと思っているものが実はここでの借り物にすぎないこと、また死を超えてほんとうの慰めとして残るのは、この短い旅の間になされた良い仕事と、神が高い目的をもって私たちのそば近くに送ってくれた人々に注いだ、ほんとうに無私の愛だけであることを、感じるべきです。

＊

年齢を重ねるにつれて、人生は何と奇跡的なものに見えてくることでしょう！　より分かりやすくなるどころか、日ごとに驚きが大きくなってきます。人は驚いて立ちすくみます。そしてすべてがとても小さく見えます。人がなし得るささやかなことは、あまりに小さすぎるのです。光明の差す見込みがないとき、人はあまり考え込むべきではありません。それでも、人生のささいな事物についてではなく、むしろ生と死について考え込むことは、人として何と自然なことでしょう。

＊

もし私たちが、神の意志によらなければ何事も起こらないという信仰を、固く手にしていさえすれば、平静であることを学び得て、すべてに耐えることができます。人は年齢を重ねるにつれ、ここでの人生は長い幽閉にほかならないことを、より確かに感じるようになります。そして、自由とより高い活動とを、待ち望むようになります。目を高みに向ける時、この人生のあらゆることは、何とも小さく無意味に見えます。宇宙の主を見上げると、あらゆる労苦はたやすいものになります。至高の存在について考える時、私たちは別々の言葉で語りますが、誰もが皆、同じ意味のことを語っているのです。　　（草稿）

＊

かつて存在したあらゆることが、もはやないと考えるのは、悲しいことです。しかし思い出の中には、かつて考えていたよりも、もっとリアルな何かがあります。私たち人間の弱々しい感覚が求めるもの以外は、すべてそこにあります。いつか消滅するだろうと、私たちが知っているもの以外は、何物も失われ得ず、実際に失われていません。皮だけが失われ、核は残ります。私たちより先に旅立った人々とともに生きることを、私は学んできました。彼らは生身をもって存在していた時よりも、ずっと近くにいるように感じられます。そして私たちはと言えば、ここで果たすべき義務があるかぎり、私たちを頼りにし、私たちを必要とする者たちがいるかぎり、あと数年の人生を生きることができます。ほんのあと数年のことでしょう。　　（草稿）

＊

「人生は真剣なものである！」というのは非常に古い教訓であり、これを学ぶのに老いすぎたということは、けっしてありません。「人生は芸術である」とはゲーテの教えですが、「芸術（アート）」が、単なる「技巧（アートフル）」や「人工（アーティフィシャル）」を意味するのでないかぎり、そこにも何からの真実があります。ハクスリーはつねづね、人生の至高の目的は、知識ではなく行動だと言っていました。その点について、私の考えはまったく別です。まず知識、それから行動ですが、それにしても行動は何という博打（ばくち）のようなものでしょうか！　最良の意図がしばしば挫折します。今日為されたことが、明日は為されません。しかしながら、私たちはその日その日が持ち込むことを、骨折って為さねばならず、可能であれば、ほかの誰よりも良く、できる限りのことを為さねばなりません。

＊

神がそのような恩恵を日々与えてくれなかったならば、私たちは何をもって自分のものだと言い得るでしょうか？　とはいえ、自分自身を完全に神に明け渡し、すべてを神の愛と叡知に委ねることは、たいへん困難です。私はかつて「神の御心のようになりますように」と言えると思いましたが、実際には言えないことに気づきました。私自身の意志が、神の意志と闘ったのです。私は祈るべきでない時に祈りました。それでも神は私に耳を傾けてくれました。この人生とそこにあるあらゆる幸福を、好むようになるのは自然なことで、そうなるまいとするのはたいへん困難です。しかしそれに愛着すればそれだけ、私たちは苦しみます。それを失わねばならないこと、それはすべて過ぎ去るということを、知っているからです。（草稿）

＊

人生についての考え方がより大きくなると、誕生と死は、朝と夜のようなものにすぎないと思われてきます。そして人は次のように感じるようになります。すべては、ずっとそうであった通り、ふたたびそのようであるだろう、日々は来ては過ぎ去る、そして人間にできるのは、その日その日の最善をつくそうと努力することだけだ、と。

＊

私たちがここに存在する目的は何か、つねに心に留めておくならば、人生で私たちを悩ませるものは、どのみちごく些細なことです。そして人は、この上なく苛酷な試練の中にあっ

てすら、すべてはより高い力によって送られたものであること、そしてすべては最終的に私たちの最善の利益となるに決まっていることを、知っていますし、知るべきです。それらのことは私たちには理解し得ない、というのはほんとうです。しかし、神がこの世界において、ごく小さなものからごく大きなものまで、あらゆる出来事を支配していることを、私たちは理解することができます。これらのことをつねに心に留めている人は、神の平和を持って、人生が続くかぎりそれを楽しみます。

＊

人生は日ごとにますます、奇妙で恐ろしいものになっていくかも知れません。しかし、そのように奇妙で恐ろしくなった分だけ、ほんとうの意味と現実、そしてその神聖さの深みが、私たちにより啓示されるのです。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」。

＊

絶え間ない感謝の心をもって、魂の静けさと純粋さをもって、地上のものよりも天上のものをいっそう仰ぎながら、神があなたの人生に付与してくれた貴重な年月を、楽しみなさい。それは私たちに、魂のほんとうの喜びを与えてくれます。私たちはただ、あらゆる瞬間に永遠なるものを思い出し、人生の小さなあるいは大きな心配事の中で、自分自身を見失ってしまうことさえしなければ、それでよいのです。

＊

もし私たちがこの地上のみに住んでいるのならば、またもし私たちの思いがこの人生の狭い地平で縁取られているのならば、死がとり去った者たちは、ほんとうに私たちから失われていることになります。しかし、ほかならぬ死そのものが私たちに教えるのは、彼方なるものがあるということ、私たちは上げられて、かつて見たものをはるかに超えた新たな世界を見るということです。その広い世界には、この地上でもはや見ることのない者たち、別れたくない者たちが住んでおり、私たちはそこで、新たなより広大な生活を送ることになります。古代インドの哲学者たちは、妻子に心が執着している者は真理を見いだすことができない、と言っています。疑いもなく、あらゆる愛着から完全に自由であることは、生と死をきわめて容易なものにするでしょう。自らに属する者に感じる私たちの愛そのものは、たとえその者たちが奪われたとしても、私たちの目に光をもたらすのではないでしょうか？　そしてまたその愛は、私たちは別の世界に属すること、その世界から愛は排除されないこと、それらについて今はほとんど知ることはできなくても、そうした真実を私たちに見せるのではないでしょうか？　人は願望するものを信仰する、というのはほんとうかもしれません。しかし私たちが願望するのはなぜでしょう？　私たちは私たち自身のままでいましょう。この地上でそうあるべく意図されたままでいましょう。そして私たちを今ある通りに作った神に信頼しようではありませんか。　　（草稿）

＊

日ごとに新たな思いが新たな薄い層となって重なり、それが私たちの性格を形づくります。材料は浮かんで寄せてきますが、しかしそれがどのように定着するかは、私たちの内なる潮の満ち干に左右されます。異物を取りのぞき、強い岩を作り上げるのに最も役立つものを集

めるために、為し得ることがたくさんあります。しかし時として、大きな悲しみが、私たちの魂のすべての層を突き破ります。あらゆるものが持ち上げられ、打ち砕かれ、ねじ曲げられます。自然界のあらゆる壮大なものは、そうした激変から始まっています。それなのに、なぜ私たちは、新しい滑らかな表面を願い求め、悲しみが日常生活の堆積物で平坦に覆われることを願うのでしょうか？　　（草稿）

＊

鎖や円には初めも終わりもなく、あるいはどこでも初めであり、終わりであるようです。この人生がそのような繋がりにほかならないと感じるなら、私たちはまた新たな意味で、それに耐えることを学び、それを楽しむことも学びます。私たちがここで為し遂げることは、新たな意味を帯びます。善かれ悪しかれ、それが完全に消滅することはありません。時の中で為されることは、永遠の中で為されるのであり、一人によって為されることは私たち皆に影響します。このように、私たちの愛もまた失われません。時の中で愛されたものは、永遠の中で愛されるのです。形は変化しますが、変化する当のもの、変化を経験するものは、それ自体は変化しないままに留まります。私たちは、人生の中で移ろいゆく形を愛しているように見えますが、そんなにも当てにならないものを、私たちがどうしてほんとうに愛せるでしょうか？　いいえ、私たちがほんとうに愛しているのは、今あり、かつてあり、のちもあるであろうものであり、それは人生の中で移ろいゆく形の下に隠れているものであり、いかに美しかろうとも移ろいゆく形以上のものなのです。私たちは美しい外見も愛します。そうする以外に、どうしようがあるでしょうか？　しかしそれらは、ただ私たちが好きだからという理由ではなく、私たちの愛するものに属するからという理由でのみ、愛されるべきです。そうなのです、そうあるべきなのです。それでも、私たちの有り様をいえば、私たちが愛するのは花であり、はっきりした形のない粒や種ではありません。そして花が萎れて散っていく時、私たちはそれを嘆き悲しみます。私たちの慰めはただ、私たちもまた衰えて死んでいくということです。花が散っていったところに、私たちも赴きます。すぐに枯れる花もあれば、ゆっくり枯れてゆく花もあります。しかしどの花も、まったく忘れ去られてしまうのではありません。　　（草稿）

＊

人生においてほんとうの責任が生じるのは、若い頃のどの時点なのか、はっきりと言うのは難しいでしょう。法的にその年齢は定まっていますが、私たちの心はそう決めつけることはできません。しかし、初めはその年代が未知であるにもかかわらず、のちに私たちは自らその年を数えはじめます。地上での私たちの人生が始まる前の年代も、これと同様に未知のものですが、なぜ私たちはそれを数えるのに抗議するのでしょうか？　いつ、どこでそうしたにせよ、私たちは今ある私たちを、自ら作ったように感じます。このことは、信仰に有益な材料ではないでしょうか？　たとえそれが、この人生において、内面的にも外面的にも、何も実を結ばないとしても、私たちがかつて犯した過ちを取り戻し、為し得る善を為そうと決断しようとする時に、それは役立つのではないでしょうか？　自分自身の中で為されたと見えるものは、その記憶はなくても、自分自身によって為されたものに違いないということを、もし私たちが推論によって知るならば、意識が断絶していることと、責任を持つことと

は、矛盾するようには思えません。この地上の人生の最初の二、三年間のことについて、責任を問われても、私たちは取り合わないでしょうが、それでも、たとえ記憶はなくても、その期間に私たちが存在していたのは確かなことです。この地上の人生の前についても、事情は同じではないでしょうか？　　（草稿）

＊

私たちは、二つの生活を送ることを学ばねばなりません。ここ地上での喜びと悲しみにともなわれた短い生活と、彼方のほんとうの生活と、この二つです。この人生は、彼方の人生の断片あるいは中断にすぎません。そのほんとうの生活に入っていけば、ここで見いだすことができないものを見いだし、ここで失ったものを見いだすことでしょう。ただ、あまりに多くのことが、変則的で、不自然に見えなければいいのにと思います。たとえば、両親より幼い子供が先に死ぬことなどがそうです。私たちは、子供を先に死なせることもあると知っているがゆえに、子供をいっそうつよく愛します。それは真実ですが、これは学ぶのが辛い教訓です。
（草稿）

＊

一月一月と過ぎてゆき、とうとうこの旅は終わります。そして私たちはうしろを振り返り、それが与えてくれた多くの喜びに感謝し、そこで出会った多くの親切な友人たちとの交わりに感謝します。また、経験しなければならなかった闘争にも、感謝の思いでいっぱいです。すべてが終わり、執着駅と安息の地に無事に辿り着けば、それらはまことに些末で、泣いたり悩んだりするに値しなかったことが、はっきりわかるでしょう。　　（草稿）

愛

私は次のように考えずにはいられません。この人生で心引かれる魂たちは、前の人生（フォーマー・ライフ）の一つで私たちが知っており、愛していた当の魂たちであること、そしてここで反感を覚える魂たちは、理由はわかりませんが、前の人生の一つで私たちの不満を買い、距離をおかれた魂たちである、と。しかし、次のようなことは忘れないようにしましょう。もし私たちの愛が、単に現象的なもの、つまり肉体や、心の親切さや、知性の活力や、知恵への愛であるならば、それは変化し消滅し得るものへの愛です。……しかし、もし私たちの愛が、そのあらゆる地上的な外観に関わりなく、その背後にあるほんとうの魂への愛、すべての男女の中にある不滅にして神聖なものへの愛であるならば、それは死ぬことはあり得ません。そしてそれは、来たるべき世界において、過ぎ去った世界でそうであったように、美しく、真実で、愛すべきと見えるものを、ふたたび見いだすでしょう。……私たちがほんとうに愛するのは、あらゆるものの中にある永遠のアートマン、すなわち不滅の自己（セルフ）です。そして、不滅の自己と不

滅の神は一つであるはずなのですから、私たちが愛するのは不滅の神であると、付け加えてもよいでしょう。

＊

低俗な心の中では、地上的な愛がしばしばただの動物的な激情に堕落しまうかもしれません。たとえそうであっても、その最も純粋な意味において、存在の至高の神秘や、この地でありうるかぎり最も完全な祝福と喜びが留まること、また同時に、私たちの人間的な性質以上のこの上ない真実の誓いも留まるということを、私たちは忘れてはなりません。人間の心に可能なかぎりの、神的存在（デイテイ）への無私の献身を感じ得る能力は、もしそれがほかの人間の魂への愛に満たされるならば、最善の宗教と呼んでもよいようなものです。

＊

この世代の老いも若きも等しく学ぶべきことは、美しいものを発見する精神と忍耐、それを他に知らしめる楽しみと喜び、そしてその喜びに感謝の心をもって我が身を委ねること、などです。これらを一言で表わすのが、言葉の昔からの真実で永遠の意味における、「愛」なのです。自己欺瞞という埃、利己心という蜘の巣、嫉妬という泥を一掃しさえすれば、「何百万人を抱擁する」ことができた頃のような、古風な人間らしさがすぐ現われてくるでしょう。人類愛という、あらゆる人間らしさの真の泉が、今も変わらずそこにあります。この若さの泉はけっして涸れることはあり得ません。そこへ降りていくことができる人は、ふたたび自分を取り戻し、自分の本来のあり方に戻り、いたる所に美を発見して、それを愛することができます。その人は、現に生活しているこの騒々しくせわしない時間の中にあっても、自分のために静かなひとときを確保することができて、そこに歓喜と感激があることを理解するのです。

＊

「互いに愛し合いなさい」という、キリストのたった一つの戒めさえ実行すれば、この世は全面的に変わり、刑務所や労役所、嫉妬や闘争といった悪魔のあらゆる砦は、すべて一掃されるのではないでしょうか？　キリスト以来やがて二千年が過ぎようとしているのに、人々は「互いに愛し合いなさい」というこのたった一つの戒めさえ、まだ理解していないのです！　そうすることは可能であるのに、私たちはこの一つの点において、いまだ完全に異教徒のままです。神の御業と神の戒めを実行しさえすれば、この世は地上の天国のようになったでしょうに。しかし今はそうでなくても、やがて来世ではそうなるでしょう。

＊

私たちが何事かを為すとき、それを義務だと思ってすれば、大体において失敗します。これは、私たちのために非常に有益な古い法則です。私たちの人生のほんとうの泉、人生における私たちの仕事は、「愛」でなければなりません。それはほんとうに深い愛、この人やあの人に対する愛ではなく、この理由やあの理由による愛ではなく、深い人間的な愛、魂の魂への献身、神が愛する人々の中においてこそ成就される神への愛、でなければなりません。ほかのすべては脆弱で、はかなく過ぎ行くものです。愛のみが、私たちを支え、人生を耐えられるものにし、現在を過去と未来につなげます。そして、そう信じていいと思いますが、それは滅び得ないものです。

＊

とても非利己的に見える愛でも、気をつけていないと、きわめて利己的な愛になり得るものです。他人の中の暗い部分に、目を閉ざしてはいけません。しかし、彼らの中の明るい部分、愛すべき非利己的な部分を、より強く引き出すのに役立つのでなければ、暗い部分にあまりに長く気を留めてもいけません。ほんとうに愛することのほんとうの幸福とは、自己を忘れることと信頼の中にあります。

＊

子供たちがそれに気づくのはあまりに遅いのですが、この人生において、母親の愛ほどのものはほかにありません。この人生でほんとうに幸せになりたいと思ったら、心を尽くしてあなたの母親を愛しなさい。あなたが母親に属しているということ、また彼女を通して、私たちは存在の至高の源泉に不壊の鎖でつながっているということ、こう感じことができるのは、一つの祝福です。　　（草稿）

＊

失われた愛という、そのようなものがあるでしょうか？　私はそれを信じません。真実で偉大なる何ものは、たとえその成就がこの短い人生を超えて遅れることはあっても、この地上から失われることはけっしてありません。……愛は永遠です。もしそれが地上で成就されることがなければ、それはいっそう、そうなるのです。私たちの人生が神の手の中にあること、また神の意志なしには何事も私たちに起こらないこと、こうしたことをいったん知ったならば、神が私たちに送る試練に対して、私たちは感謝を覚えます。神よりも私たちを愛してくれる人が、誰かいるでしょうか？　神よりもほんとうに私たちのためになることを知っている人が、誰かいるでしょうか？　ちっぽけで人工的で複雑な、私たちのこの社会は、時として神の支配の外にあるように見えるかも知れません。しかしそう考えるのは、私たち自身の過ちであり、私たちはその報いとして苦しまねばなりません。私たちは友人たちを非難し、自分自身に不信を抱きます。こうしたあらゆることが起こるのは、私たちの粗野な心が、悪さをしないようにと閉じこめられている狭い籠の中で、静かにしてはいられないからなのです。

＊

愛は（死とともに）過ぎ去るのでしょうか？　私にはそう信じることができません。神は私たちを現在あるように、一人ではなく、多くの人間として作りました。キリストは、私たちすべての一人一人のために、死にました。その私たちはと言えば、それ自身では不完全なのですが、ただ、一つには神への愛を通して、一つには人間への愛を通して、完全になります。私たちは、こうして存在するまさにそのために、この二つの愛を必要としています。ですからまた、より高くより良い存在においても、親しい魂たちへの愛が、神への愛とともに、おそらく存在しているのでしょう。この地上でもっとも愛した人々を、天国においてより強く愛することはあり得ても、より少なく愛することはないはずです。愛とは結局、私たちと仲間たちを隔てる不自然な障壁を、取り去ることにほかならないように思われます。私たちすべてを神に結びつける絆は、ここ地上では不可解な方法で壊されているのですが、愛とはそれを回復することにほかならないのです。その絆は、キリストにおいてのみ、保たれてい

ました。なぜなら、キリストが私たちすべてを愛した愛は、妻に対する夫の愛よりも、子に対する母の愛すらよりも、暖かいものだったからです。キリストは私たちのために、自分の命を差し出しました。妻や子のために、ほんとうに喜んで死を受け入れようとする夫や母がいるかどうか、私たちは自問してみると、ほとんどいないだろうと思われます。かくして、私たちの目に最も完全と見える愛ですら、自己と利己的なものをすべて追い出すような、そうした愛の完成からは、いまだ程遠いのです。ですから、私たちはより少なくではなく、より強く愛さねばなりません。そして、ここでは不完全なるものも、破壊されるべく存在しているのではなく、のちの世で完成されるべく存在しているのだと、信頼しなければなりません。神とともにあれば、何事も不完全ではありません。私たちは神の中で生き、愛さねばなりません。そしてその時、私たちには恐れる必要がなくなります。私たちの人生は、めまぐるしく変化し、はかなく過ぎていくように見えます。しかし、私たちのための家が神の中にあること、私たちのあらゆる困難のための休息がキリストの中にあることを、私たちは知っています。

＊

人生が続くかぎり、団結していましょう。一人一人で行なうよりも、手に手をとった方がよりよい仕事を達成できるはずです。人間は一人よりは二人でいる方が、より恐れが少ないのです。あらゆる霊的（スピリチュアル）・精神的な友人関係にとって、第一の条件は完全な率直さです。批判が必要とされるとき、誠意ある批判をしてくれることほど、ほんとうの友人であることの良い証拠は、ほかにありません。私たちが携わっているのは、一つの偉大な仕事です。そしてこの自覚に立つとき、あらゆる些細なことは必然的に消滅するものです。

＊

私たちがこれほど深く愛するのは、なぜでしょうか？　それもまた神の意志ではないでしょうか？　もしそうであれば、その愛が無になることがあり得るでしょうか？　愛がなければ、私たちは何者であり得るでしょうか？　そのような愛を、私たちがいつか放棄することになるとか、また、愛するようにと委ねられた人々を、私たちがいつか失うことになるとか、私には信じることができません。愛は浄化されるかもしれません。それはもっともっと非利己的なものになり、この地上でのあり方とは非常に異なったものになるかも知れません。しかし、共感すること、ともに苦しみともに喜ぶことは、あらゆる存在の根源の深みに横たわっています。それがもし無になるようなことがあると、私たちの存在そのものも無になることでしょう。私たちは愛さずにはいられません。もっと深く、そしてより良く、愛さずにはいられないのです。かくして、人生はふたたび、明るい上にも明るいものとなります。私たちから取り去られた人々は、しばらくの間いなくなっただけで、けっして失われていないと、私たちは感じます。それゆえにまた、よりいっそう、私たちは彼らを愛します。
（草稿）

＊

私たちは愛する時にも、何と利己的であることでしょう。私たちはここで束の間生きるだけで、遅かれ早かれ、誰にも別れがくることを知っています。私たちは自分たちが先に逝き、愛する者たちをあとに残したいと願います。そして彼らの方が先に逝って、私たちがあとに

残されたとなると、悲しみます。しかし、この人生を超えたところをいったん目にすると、かつてはこの世が終わりなく続くように見えた時もあったのに、今はそれがとても短く見えます。　　（草稿）

＊

過去は私たちのものです。そしてそこには、私たちを愛したすべての人々がおり、私たちがかつてと変わらず、いや、かつてよりもさらに愛する人々が、存在しています。
（草稿）

人類

この地球は、古代の人々にとっては、計り知ることのできないものでした。彼らはそれを、全宇宙の中に寄るべき港のない、孤立した世界のように見なしていたからです。しかしそれが人類の目に、多くの惑星の一つと見えてきたとき、そしてあらゆる星々は同じ法則によって支配され、すべてが同じ中心の周りを回転していると見えてきた時、地球は新たな真実の意味を獲得しました。人間の魂についても、同様のことが言えます。人間が自らを大いなる家族の一員として知り、感じるように教えられて以来、魂の性質は、私たちの精神の前に、まったく異なった光を浴びて、立っています。私たちは皆、同じ法則によって支配され、同じ中心の周りを回転し、同じ源泉から光の筋を引いている、幾百万とさまよう星々の一つのようなものなのです。「普遍史（ユニバーサル・ヒストリ）」は、思想の世界に、新たな広々とした道を敷設しました。それは、ソクラテスもプラトンもアリストテレスも唇に乗せたことのない、ある一つの言葉で、人類の言語を豊かにしました。「人類（マンカインド）」という言葉です。ギリシア人が野蛮人（バーバリアン）を見たところに、私たちは兄弟がいるのを見ます。ギリシア人が民族（ネーション）を見たところに、私たちは人類がいるのを見ます。海によって隔てられ、言語によって分かたれ、民族的な敵意によって分断されていますが、それでも人類は、神聖（デヴァイン）な導き手のもと、この世界がそのために創造され、神の似姿を担った人類がその中に配置された、計りがたい目的の実現に向けて、いたるところで働き、苦しみ、たゆみない歩みを進めています。このような意味で、歴史は、その汚れた泥まみれのページも含めて、私たちにとって、自然の書（ブック・オブ・ネイチャー）と同じくらい、神聖な書物なのです。どちらの書物においても、私たちは神聖な叡知の法則と思想が、そこに映し出されているのを読みますし、あるいは読むように努めます。私たちの信じるところでは、歴史にも自然にも、非合理なものは何もありません。そして人間の精神は、この二つの書物に神聖な力が顕現しているのを読み、それを敬うべく召されているのだと思います。

＊

人類の発展に関しては、二つの対立する見方があります。一方はそれが下降するものと信じ、他方は上昇するものと信じています。前者が主張するところによれば、人間の精神史は、

必然的に純粋で単純な状態から始まり、それが徐々に腐敗と倒錯と野蛮に道を譲っていったものです。後者が強調するところによれば、最初の人類は動物から一歩しか隔たっておらず、それからの全歴史は、より高い完成へと向かう進歩の歴史です。宗教の起源に関して言えば、一方の学派は、超自然、超越的、無限、あるいは神聖などと呼ばれる、何か彼方にあるものへの、原始的な気づきに執着します。この学派が、原始宗教のより完全な実現とみなすのは、ヴェーダの讃歌の詠唱、ユダヤの犠牲の奉献、あるいは非常に洗練された教条や信条ではなく、視線を高みに据えてこの人生の橋を静かに歩いて渡ることなのです。他方の学派は、人間の純粋に動物的で受動的な性質から考察を進めます。そして、人間が生活する世界で繰り返された印象が、どのような方向に人間を突き動かしたか、と考えます。人間は、言葉の意味はともかくとしても、フェティシズムやトーテミズムへ向かい、先祖崇拝や自然崇拝、樹木や蛇、山や川、雲や流星、太陽や月や星、天の蒼穹の崇拝へ向かい、そして最終的に、天の高みに住まう一者の信仰に至りました。

精神あるいは思想

ものごとを明晰に見ることができれば、私たちが精神（マインド）や思想（ソート）と呼ぶものは、以下のようなところに存することがわかります。つまり人間は、動物のように現象を受容するだけではなく、それらの中にある普遍的なものを発見する能力がある、ということです。あれこれの要素を、人間は音声記号によって、削除したり固定したりすることができます。さらに、一種類の現象を同じ一般的な概念のもとに分類し、同じ音声記号によって刻印することができます。

＊

言語と思想は、あい携えて進みます。いまだ言葉がないところには、何の考えもありません。精神が思考する能力は、言語から発し、言語の中で生き、言語の中で連続的に発展します。

＊

私たちのあらゆる思考は、明らかに最も抽象的なものですら、日々私たちの感覚の前を通るものに、そもそもの自然な始まりがあります。「あらかじめ感覚の前にあることなしに、何ものも信じられることなし」とローマの格言にあるとおりです。こうした自然の声に、人間はしばらくの間は気づかないでいられるかも知れません。しかしその声は、何度も何度も、昼となく夜となく聞こえてきて、ついにはそれに気づかざるを得なくなります。そしてひとたびそれに気づくと、それらの声は自らの目的をより明らかに開示するようになります。初めは単なる日の出と見えたものが、ついには無限なるものの可視化された啓示となります。入り日と見えたものが、不滅なるものの最初の幻視へと変貌されます。

＊

自然の進化の研究がどうにか成功すると期待できるのは、自然が私たちに委ねた産物においてのみです。ちょうどそのように、精神の進化も、精神が私たちに委ねた産物においてのみ、有効に研究できるのです。これらの精神の産物は、最初期の形態においては、つねに言語の中に具現しています。したがって、精神の成長に関して、その起源の問題や、継続的な諸段階を研究するのは、言語においてでなければなりません。

＊

もし、言語と理性が同一視できるものであり、あるいは同じことの単なる二つの名前や二つの局面にすぎないのであれば、また、言語には歴史的な始まりがあり、人間の何千年の仕事の営みを具現していることが疑い得ないのであれば、次のような結論を退けることはできません。つまり、それら数千年の以前のある時に、言語という偉大な寺院の最初の礎石が置かれたこと、そしてそれ以前には、人間は言語をもたず、したがって理性をもたなかった、ということです。

奇跡

すべてが説明されるべきだ、あるいは時としてそう表現されるように、すべての中には一様性があり、配慮と秩序があり、因果の鎖が全宇宙を抱き留めているのだ、こういう確信に、人間の精神はいつの日か到達することになります。その時、奇跡的なものに関する考えが起こってきます。私たち人間という、このか弱い被造物は、自分たちに知り得ないこと、法則に合致しないこと、因果の鎖を破るように見えるものを、「奇跡」と呼びます。したがって、すべて奇跡というものは、私たちが作り出したものであり、また私たちが消し去るものなのです。

＊

宗教の創始者たちによって行なわれた真実の印や驚異の多くは、きわめてしばしば誇張され、これらの創始者自身の強い抗議にもかかわらず、単なる曲芸へと貶められてきました。これは、宗教的な熱狂に鼓舞された影響のもと、人間の心理的な必然性から起こったものです。現在の私たちが理解しているかぎりでの宗教についていえば、こうしたあらゆることが、宗教の本質的な要素をなしていないのは確かです。宗教的な教義の真実性を支持するための議論として、もはや奇跡が動員されることはありません。奇跡はこれまでしばしば信仰の助けと呼ばれてきましたが、むしろ分かったのは、よりしばしば信仰の躓きの石になったことです。そして今日においては、いかなる宗教が教える真理であっても、何らかの不思議な出来事によって、それが支持されたり倒されたりするとは、誰もあえて言わないでしょう。それは起こったかもしれないし、そうではなかったかもしれません。またそれは、ブッダやキ

リストやムハンマドの信奉者たちによって、ただしく理解されたかもしれないし、そうではなかったかもしれないのです。

＊

「我らが主の昇天」とは、崇高なる考えが、子供の言語の中に具体化されたものとして、理解されるべきでしょう。神の意志に反しては何事も起こり得ないこの世界において、いかなる奇跡よりも、ほんとうの事実のほうが良くはないでしょうか？　キリストの不滅なる霊が父のもとに昇天したということ、これのみが真の不滅性であり、神聖なる不滅性です。死すべきはかない肉体の蘇生ではなく、不滅の神聖なる魂の不滅性なのです。私たちがそのことさえ固く信じていれば、知り得ること以上を知ろうとする必要があるでしょうか？　聖パウロが「それなしに私たちの信仰は無益である」と言ったのは、この霊の復活のことであり、肉体の復活ではありません。人を活かすものは霊であって、肉は何ら益するところなきものなのです。

＊

キリスト教神学の辞典から「奇跡」という項目そのものが削除された時こそ、キリストの誠実な弟子たちの多くにとって、まことのダマスカスの日[パウロが回心した出来事のこと]となるでしょう。あれこれの事実はそのままに残りますが、真実の霊はそれらにより高い意味を付与するでしょう。そのためには、より少ない信仰ではなく、より多くの信仰が必要になります。なぜなら、奇跡の助けなしにキリストを信じるためには、奇跡によってキリストを信じるより、もっと強い信仰が求められるからです。キリスト教会には、ごく最初期から奇跡的な要素が導入されてきました。これによって、いかに多くの精神的な悩み、知的な不実、懐疑、不信仰が産み出されたか、計り知れません。異教徒に彼らの奇跡を信じることを先ず止めるよう説得し、しかる後に、キリスト教徒になるための条件として別の奇跡を信じさせる、そういう企てほど、宣教の働きのはなはだしい障害となってきたものは、ほかにありません。「キリストの奇跡を信じなければ、あなたはキリスト教徒ではない」と言うのは容易なことです。しかし私は次のように言われる時がくることを期待しています、「奇跡の助けなしにキリストを信じることができなければ、あなたはキリスト教徒ではない」と。

音楽

音楽は魂の言語ですが、解釈を寄せ付けません。それは何かを意味していますが、その何かは、感覚と論理のこの世界ではなく、あらゆる定義を超えながらもきわめてリアルなほかの世界に属しています。……音楽の中には、そしてあらゆる芸術の中でも音楽の中にのみ、完全にこの世界のものではない何かが、ありはしないでしょうか？　……メロディーはどこから来るのでしょうか？　確かなことは、外なる耳で聴いて、模倣し利用し純化できるよう

なものではないということです。……どこでもそうなのかもしれませんが、ここで私たちに見えるのは、黄金の階段を天国から天使が降りてきて、聴く耳のある人間の耳に甘美な音を囁き入れている様子です。言葉は、そのようには吹き込まれ得ません。というのは、周知のように、言葉は地上に属するもの、地上的なものだからです。メロディーは地上に属するものではありません。いみじくも次のように言われている通りです、「聞こえるメロディーは甘美だ、しかし聞こえないメロディーはさらに甘美だ」と。

自然

ただ一人で自然とともにあること、これほど美しいことはありません。つぼみが花咲き、葉が枯れることの中に、神の意志がいかに成就されているか、人は目にします。また人は、自然に対するこの渇望が、自分の中にどれほど深く根付いているか、認識することを学びます。人間たちとともに生活すると、人はこの本来の故郷から実に簡単に引き離されてしまいます。そのとき、人間自身の計画や希望や恐怖が、芽生えてきます。そうすると私たちは、自分一人で何かを完成することができると空想し、すべてが私たち自身の目的や楽しみに奉仕すべきだと考えます。ところがやがて、人生における自然の影響が、あるいは神の手が、私たちの目を覚まさせます。そして私たちに警告してくれます、私たちがここで生活し繁栄しているのは、楽しみのためではなく、乱されない静寂のためでもなく、もう一つの人生で実を結ぶためなのだ、と。

＊

人は自然の雄大さのただ中に立つ時、自らのちっぽけな不平や苦難を携えながらも、このもの言わぬ魂の奥深くを覗き込みます。すると、彼には多くのことが明らかとなり、この人生についてこれまで思い描いてきたことが、いかに間違っていたかに驚き呆れます。この人生は、ほんの短い旅でしかありません。そして、普段の生活では必要不可欠に思われる多くのものも、人は旅する時、それなしで済ませることができます。そうです、私たちはそのように、心から愛おしく思うものですら、この世では、それなしに済ませることができるはずです。私たちは、堪え忍ばねばならなかった旅のあとで、自分たちよりもっと早く、もっと楽に目的地に到着した人々と、ふたたび出会うであろうことを知っているからです。もし人生が元気回復や娯楽のための旅と見なされたならば、そこを一人で苦労して進まねばならないとしたら、それが悲しく感じられるのも当然です。しかし、そうであってはなりません。私たちはそれを真剣な仕事の旅として扱いましょう。その時私たちは、自分の前には困難で不快な仕事があることを知っており、それゆえ、神の愛が私たちそれぞれの人生に備えてくれた美しい休息所を、よりいっそう楽しむことができるのです。

＊

世界の最初期において、そこはあまりに多くの驚異に満ちていたので、それ以上ほかの奇跡を求めるには及びませんでした。世界全体が奇跡であり、啓示であり、特別な開示の必要は何もありませんでした。その時、あらゆるものが主を祝福していました。天、水、太陽と月、天の星、雨と露、神の風、火と熱、冬と夏、氷と雪、夜と昼、稲妻と雲、大地、山と丘、大地の上の緑の植物、泉、海、洪水――これらすべてが、神を永遠に誉め讃えていました。これよりも力強い啓示を、私たちは想像できるでしょうか？　神が自らのやり方で、あらゆる荘厳と、叡知と、自然の秩序の中に、自らを啓示している時、人類の子供たちがこぞってその神を誉め讃えているとしたら、私たちはそれを、ただの異教だとか、多神教や汎神論だとか、忌まわしい偶像崇拝だとか、とやかく言うべき立場にあるでしょうか？　私はこれまで、たくさんの冒瀆の言葉を耳にしてきました。しかしこれよりもひどいものは、聴いたことがありません。

曖昧さ

あらゆる暗黒と漠然としたものの中に、知恵の深みがあるのかもしれません。しかし私は、明瞭で明るく単純にできないものはない、またどんな時も、曖昧さは鈍感な考え方と怠惰な書き方から起こる、と考えずにはいられません。　　（草稿）

老年

他人の幸福を分かち持つこと、その人々の感情に寄り添うこと、その人々とともに、またその人々の中で、人生をもう一度生きること、それだけが老人たちに残されていることのすべてです。それはしかるべく定められたのだと、私は思います。人生の第一の目的は、言葉のあらゆる意味において、自己を克服することと定められているのではないでしょうか。

＊

人は老いていくとき、学ぶべき一つのレッスンがあります。それは一人でいること、しかも霊にあっては、そばに誰かいるかどうかにかかわらず、愛するすべての人とともにあること、これです。　　（草稿）

＊

老年がゆっくりやってくるか、突然やってくるかはともかく、あなたはそれから逃れることはできません。しかしそれは、気づかないうちに来るのです。かつてのように歩いたり跳びはねたりはできないこと、精神の筋力すらかつてのようではないこと、こうした感じに、あなたは突然気づきます。よろしい、それはしかるべく定められたのです。そして新たな筋肉で、新たな仕事にとりかかるのも、楽しいことでしょう。人生を十分に経験したあとでも、最も大きな満足を与えてくれるのは仕事だと、私は思います。私が言っているのは、強いられた労役のことではなく、自分で発見した仕事のことです。

＊

人は年老いて、それでも未来に何が待ち受けているのか、希望というよりは恐怖で想像する時がきます。その時彼は、過ぎ去った明るく幸せな日々を思い出すという、けっして失敗することのない楽しみを、よりよく味わうことを学ぶのです。それらは過ぎ去っていますが、しかし失われてはいません。私たちが過去を呼び出し、思い出すのに応えて、それらはつねにそこにあるようになり、活き活きとした鮮やかさを帯びるに至ります。かわいそうな魂である私たちは、過ぎ去ったもの、つねに過ぎ行くもの、留まることがあり得ないであろうものを思って、かつては毎日、毎時間、毎分ごとに慄いていました。そしてその当時は、このような鮮やかさはほとんどなかったのです。

宗教そのものと諸宗教

神を求める人々が、ときとして神を手探りで探そうとすることがあるかもしれません。その時、神はその一人一人から、遠くに離れているのではありません。神学者たちには、彼らの言う神学なるものを、何巻も積み上げるがままにさせておきましょう。しかし、宗教はまったく単純な事です。それはあまりに単純で、しかも私たちにとってきわめて重要です。私の信じるところ、宗教の生きた核は、それを包む皮はいかに異なっていても、ほとんどすべての信仰箇条に、等しく見いだすことができます。このことが何を意味するか、考えてみて下さい！　それが意味しているのは、すべての宗教の上に、下に、背後に、ひとつの永遠の普遍的な宗教がある、あらゆる人が属し、あるいは属するようになる宗教がある、ということです。

＊

真実の宗教、つまり、実践的で活動的で生きている宗教とは、論理的あるいは形而上学的な屁理屈とは、ほとんどあるいはまったく関係がありません。実践的な宗教は、生活であり、新たな生活であり、神の御前で営まれる生活であり、それは真に「新たな誕生」と呼ばれるべきものから、湧き出してくるものです。

＊

私たちの感覚は、大きな規模であれ小さな規模であれ、ほんとうの境界というものを、けっして知覚し得ません。感覚があらゆるところで私たちに示すのは、その背景にある無限な

るものの存在です。そして宗教と関わりがあるものはすべて、この無限なる背景を究極で最深の基盤として、そこから湧き出してきます。

＊

英国教会で現在（一八六五年）進行中のあらゆる論争に、私はあまり興味をもって参加する気になれません[カトリック的な要素に肯定的なオックスフォード運動の典礼主義とそれに反発するプロテスタントの間の論争]。……疑いもなく、問題となっている論点は重大であり、私たちの心や頭に訴えかけます。しかし、それらを扱っている精神は、私にはとても小さなものに見えます。双方の陣営のうち、人間と対面してではなく、神と対面して書いているという印象を与える人は、何と少ないことでしょう。人間とその小さな権力に対面して書いているのではないでしょうか。初期の何世紀かにおいては、事情はこれと異なっていました。宗教改革の時代においてもまた、事情はこのようではありませんでした。

＊

私たちは二つの世界で生きています。見えるものの背後には、見えないものがあります。有限なるもののまわりには、無限なるものがあります。理解できるものの上には、理解できないものがあります。この世界だけに生きて、見えないもののほんとうの現前をけっして感じない、そのような人々がいつの世もありました。それでも彼らは、あるいは民の支配者として、詩人として、芸術家として、哲学者として、また発見者として、なにがしかの偉大さに達しました。しかし、偉大なる者の中で最も偉大なる者は、その最も偉大なる仕事を、自己を忘却したエクスタシーの瞬間、より高い世界との合一と交感の瞬間において、為しとげたのです。それが為しとげられ、彼らがそのような沈黙の法悦から帰ってきた、彼らにはそれがまさか自分のものだとは信じられなかったので、その栄光を神に帰しました。その神の名は、さまざまな表現の中で、あれこれの名前で呼ばれました。偉大なる者の中で最も偉大なる者たちが、自分たちはこの世だけの存在ではなく、自分たちの最良の仕事はその一部しか自分たちのものではない、と告白しました。そうした人々を、私たちは宗教の創立者として尊敬しています。彼らはまた同時に、哲学者であり、詩人であり、人間の統治者でもありましたが、自分たちは父祖から教えられたことや、はるか遠い声が自分たちの耳に囁きかけたことを、ただ伝え教えるだけであると、公言しました。……古代の諸宗教は、寺院や宮殿のように創立されたのではなく、人間性の土壌から聖なる墓のように立ち上がり、天上の光線によって燃え上がらされたのです。インドやギリシアやイタリアやドイツでは、初期の預言者たちは、その名前すら残っていません。ほかの国々においては、宗教信仰や崇拝の創始者の姿形や容貌が、伝説や詩歌の雲の中に、ぼんやりとながら、いまだに見えています。その中には、モーゼのほかにゾロアスターや、孔子、ブッダ、ムハンマドがいますが、もしそこに創始者の影を見てよければ、彼らはみな異口同音に、自分の信仰は新たなものではなく、父祖たちの信仰であること、自分の知恵は自分自身のものではなく、全き良き贈り物がすべてそうであるように、天上から与えられたものであることを、宣言しているように思われます。遠い国々の遥かな時代から、同じ真理を等しく証しているあらゆる預言者たちから、私たちは何を学ぶべきでしょうか？　私たちが学ぶべきは、諸宗教は人間の手によって奇妙な形に造り上げられているかもしれないが、宗教は一つであり永遠である、ということです。

人間の炉床を照らし人間の心を暖めた最初の夜明けの時から、夜明けを超えた彼方に一つの世界があることを、代々の世代は相伝えてきました。無限なるものを感じること、理解し得ないものの前に額突くこと、見えざるものに憧れること、こうしたことはあらゆる宗教の基調音であり、いったん鳴り響くように設定されて以来、諸宗教や諸宗派や諸科学の奏でる奇妙で粗野な音楽の中に、まったく埋もれてしまうことは、けっしてありませんでした。世界の最も偉大な預言者たちは、さまざまな時代に、多種多様なやり方で、何度も繰り返し、最も単純な言葉で、父祖たちの単純な信条を宣言してきました。それは、見えざるものへの信仰、理解し得ないものへの尊敬、無限なるものへの畏れ、あるいは、もっと単純に言えば神への愛、あらゆる者の父と一体となること、などです。

＊

私が明らかにしようと努力して来たのは、二つのことであり、それはあらゆる宗教の基盤を成しています。一つは、世界は合理的であること、それは思考の結果であること、そしてこの意味においてのみ、それは理性をもった存在、あるいは理性そのもの（ロゴス）の創造である、ということです。もう一つは、精神や思考は物質から出て来たものではなく、逆にあらゆる事物に先立つものである、ということです。

＊

宗教は哲学ではありません。しかし、哲学に基づかない宗教、人々の哲学的な理解力を前提としない宗教というものは、いまだけっしてありませんでしたし、そもそもあり得ません。あらゆる哲学が追い求めている至高の目標は、神の概念です。そのことは、これからもつねにそうでありつづけるでしょう。この概念こそ、キリスト教がプラトン的な意味で把握したものであり、最も明瞭な形においては、第四福音書において、私たちに示されたものです。

＊

世界が始まって以来、まったく新しい宗教というものはありません。人類史を辿れるだけ遡及してゆくと、宗教の要素や根はそこに見出だされます。そして宗教史は、同じ根本的な諸要素が次々と受け継がれて、いたるところで新たな組合せをとることを、私たちに示してくれます。神の洞察、人間が弱く何かに依存しているという感覚、世界が神聖なるものによって支配されているという信仰、善と悪の区別、より良き生活への希望、これらはあらゆる宗教の根本をなす同じ諸要素です。それらは、ときとして隠されていながら、何度も繰り返して表面に立ち上がってきます。ときとして歪められていながら、それらは何度も繰り返して全き形へと向かいます。もしそれらが、人間の魂の本来的な天賦の才能の一部を成しているのでなかったら、宗教は一つの不可能事であったことでしょうし、天使が人間の耳に語ることは、うるさいラッパか、耳障りなシンバルのようであったことでしょう。

＊

宗教の起源と成長を講義するに際して、私の主要な目的はつねに次のようなことでした。すなわち、神への信仰、魂の不滅の信仰、未来の応報への信仰などは、人間の理性を正しく働かせることによって、しかもいわゆる特別な啓示の助けを借りることなく、得ることができるし、ただできるというだけでなく、実際に得られてきた、ということです。こうすることで私は、自分たちの時代の偉大な神学者たちの足跡を単純に辿っているのだと思います。

東方の諸聖典は、最近になってようやく容易に読めるようになりましたが、そこから集められた豊富な歴史的な証拠によって、聖パウロや教父たちや中世の神学者たちや、あるいは近代の神学者のうち最も学識ある人々が繰り返し語ってきたことが、キリスト教以外のあらゆる宗教文書によっていかに強力に確認されているかを、示すことができます。このことによって、私は真実の宗教の大義に奉仕していのだと思います。私はこの仕事にとりかかるにあたって、神学者たちの攻撃に我が身をさらすことがあり得ようとは、信じられませんでした。しかし、自らクリスチャンであると告白し自称する彼らは、神が過ぎゆく何世紀もの間、世界中のあらゆる国々があるにもかかわらず、ほかのどこにも自らを証する人間を持たないまま、ただパレスチナ地方のユダヤ人のみに自らを現わしたという、あらゆる異端の中でも最悪の説をいまだに抱え込んでいるのです。

＊

宗教の比較研究によって、明瞭な光のもとに引き出されるものが、もし一つだけあるとするならば、それは、すべての宗教が避けようもない衰退に身をさらしている、ということです。いかなる宗教も、その創始者や直弟子たちの時代にそうであったごとく、あり続けることができないのは、ほとんど公理のように見えるのではないでしょうか。それでも、絶えず改革することなしには、つまり絶えず源泉に帰ることなしには、次のようなことはほんとうに稀にしか心に浮かびません。つまり、あらゆる宗教は、たとえそれが最も完全なものであっても、あるいはその完全さゆえにほかの宗教よりもいっそう、世界と接触することで苦しみを被る、ということです。それはちょうど、非常に澄み切った空気が、呼吸されるという事実だけで、汚れを被るようなものです。

＊

宗教をほんとうに信じるそれぞれの人にとって、その宗教は自分から分離することのできない何ものかであり、ほかのものと比べることができない、ほかのもので置き換えることができない、何か特別のものです。この点において、私たち自身の宗教は、私たち自身の言語のようなものです。形だけみれば、それはほかの言語と似ているかもしれません。しかしその本質において、私たちとの関係において、それは唯一のものとして立っており、競合するものを寄せ付けません。

＊

私が信じるところ、宗教の比較研究が確実に導いていくべき三つの結論があります。それをここで述べたいと思います。私たちは次のようなことを学ぶでしょう。

一、諸宗教は、その最も古い形においては、またその創始者の精神においては、後代になって付着したような多くの汚点を、概して免れていました。

二、何らかの真理、何らかの重要な真理を含まないような宗教は、ほとんどあり得ません。あらゆる宗教は、主なる神を求めて手探りで探す人々が、その苦難の時に彼を見いだすために必要な真理を、十分に含んでいます。

三、私たちが自らの宗教において所有しているものを、よりよく理解できるようになります。世界のほかの諸宗教を、忍耐強くかつ正直に調べたことがない人は、キリスト教

が何たるか、実際には知ることはできませんし、聖パウロの「私はキリストの福音を恥としません」という言葉に、真実と誠実をもって参加することはできません。

*

ほかの諸宗教を注意深く研究することからは、多くの利益が流れだしてきます。しかしあらゆる利益のうちでも最大のものは、それが私たちに、自らの宗教の中に所有しているものを、よりよく味わうすべを教えてくれることです。宗教が占めるべき場所に、ほかの民族がいまだに据えて保持しているものを、見てみましょう。きわめて高度に文明化した種族ですらが行なっている、祈りや崇拝や神学を調べてみましょう。そうすれば、私たちは生まれて初めての一息から、キリストの光と知識の土地の、純粋な空気を呼吸するという、何たる祝福を賜っていたかを、もっと徹底的に理解することでしょう。私たちはえてして、最もすばらしい祝福を、あまりにも当然のことと受け取りがちですが、宗教ですらその例外ではありません。私たちは自分の宗教を獲得するために、ほとんど何もしていませんし、真理のために、ほとんど何の苦難も引き受けていません。ですから、たとえ私たちが自分たちのキリスト教をいかに高く称賛しようとも、世界のほかの諸宗教と比較してみるまでは、その称賛は不十分なのです。

*

真理の霊（スピリット）・精神が、あらゆる宗教の命の泉です。そしてそれがあるところ、それは自らを顕現せずにはいられません。それは弁明し、説得し、確信させ、改心させずにはいられません。

*

言語の歴史的な形態とは独立して、話すという機能が存在しています。ちょうどそのように、歴史的な諸宗教とは独立して、人間の中には、信じるという機能が存在しています。人間を動物から区別するものは宗教だ、というとき、私たちはキリスト教やユダヤ教を意味しているわけではなく、そのほかの特定の宗教を意味しているのでもありません。そうではなくて、感覚と理性とは独立に、いやむしろ、それがあるにもかかわらず、さまざまな名で呼ばれ、さまざまな装いで現われる無限なるものを、人間が把握することを可能にする、そのような人間的傾向をもった機能を意味しているのです。そのような機能がなかったとしたら、あらゆる宗教はもとより、偶像や呪物の崇拝という低級な行為すら、不可能であったことでしょう。そして、私たちが気をつけて耳を傾けさえするならば、あらゆる宗教の中に、霊・精神のうめき、思い描き得ないものを思い描き、言表し得ないものを言表しようとする苦闘、無限なるものへの憧れ、神への愛などを、聞き取ることができるでしょう。

*

古代宗教は、ちょうど古い貴金属のように、長年の埃が取り除かれたあとにようやく、本来の純粋さと輝かしさをもって、本体を現わすでしょう。そしてそれが開示する似姿は、父の似姿、地上のあらゆる民族の父の似姿でしょう。そしてその表題は、ユダヤの言語だけではなく、世界のあらゆる種族の言語で、「神の言葉」と記され、私たちはそれを繰り返し読むことになるでしょう。その言葉が人間の心に啓示されるのは、そこが「神の言葉」が啓示され得る唯一の場所だからです。

＊

キリスト教とモーゼの律法を例外として、ほかのあらゆる宗教の起源が、自然宗教の根本教義を生み出すのに十分な、精神の機能だけに由来することを、ペイリー[ウィリアム・ペイリー（一七四三〜一八〇五）、英国の神学者]にならって認めるならば、そうして、一方でキリスト教とユダヤ教を「啓示されたもの」、他方でそのほかの諸宗教を「自然なもの」と分類するならば、まだ不完全だと言わざるをえないでしょう。というのは、啓示に基づくとされるいかなる宗教も、自然宗教から完全には切り離し得ないから、という単純な理由からです。自然宗教の教義は、それだけでは歴史的な諸宗教を構成することはけっしてありませんが、啓示宗教すらもそこに基づくべき、唯一の基盤、唯一の土壌を提供するものです。啓示宗教もそこに根を下ろし、そこから養分と生命を汲み上げることができるのです。

＊

宗教の意図するところは、どこにおいても、つねに神聖です。ある宗教がいかに不完全で、いかに子供じみていても、それはつねに、人間の魂を神の御前に置きます。そして、神の概念がいかに不完全で、いかに子供じみていても、それはつねに、完全という理想を、人間の魂が当面のところ手を伸ばしてつかむことができる範囲で、最高度に表現しています。したがって宗教は、人間の魂を、最高度の理想の存在の前に置きます。宗教は人間の魂を、通常の善の次元を超えたところに高めます。そうしてついには、より高くより善い生活、つまり神の光に包まれた生活への憧れを、作り出します。

＊

私はこんな仮定をしてみます。もしも私たちが、人間はよい動機をもっていると認め、けっして人を疑いの目で見ず、悪を思わず、自分が他人より優れていると思うまいと、いったんそう心に決めたならば、どうだろうか、と。私たちはこの人生において、遅かれ早かれ、「惨めな世界」と私たちが呼んでいるこの世界全体が、何と変えられたことかと、まるで魔法のように感じる時がくるでしょう。人間は真実で善良であると、信頼しなさい。そうすれば、もし相手がそうでなかったとしても、あなたの信頼によって、彼は真実で善良な人へと作り変えられていくでしょう。人々の中に真実で善良なるものを探し求めるよう、ただ一度だけ心に決めましょう。そうすれば、私たちはあれこれの古い宗教を、ふたたび思い出すことはないでしょう。「善を行い、悪を避けよ」と教えない宗教は、ありません。もしかしたらあるかもしれませんが、私はそれを知りません。ヒレル師[紀元前後に活躍したユダヤ教のラビ]があらゆる宗教の真髄と呼んだのは、「息子よ、善良であれ」という単純な戒めでしたが、この教えを含まない宗教はありません。「息子よ、善良であれ」とは、あまりに短い教理問答に見えるかもしれませんが、それに一言を加えて、「息子よ、神のために、善良であれ」と言ってみましょう。すると私たちはそこに、律法と預言者のほとんどすべてを持つことになります。

＊

異なった神々の中から一つを選び、さまざまな形の信仰から一つを選ぶためには、啓示されたものかそうでないかを問わず、真実と不真実を見分けるための道具が必要であり、人はその道具を選ぶ能力を持っていなければなりません。どんな宗教であれ、真実の宗教には一

定の根本的な教義が不可欠であること、しかしまた、理性的で倫理的な良心から見て、真理と両立しないものとして反感を覚えるような教条があること、こうしたことを人は知らねばなりません。簡単に言うと、宗教の基盤なるものがなければなりません。祭壇や教会や寺院を建てることが可能になるためには、それに先立って固い岩がなければなりません。その基盤を「自然宗教（ナチュラル・レリジョン）」と呼ぶならば、いかなる啓示宗教といえど、多かれ少なかれ、自然宗教に固く基づかないようなものが考えられもしないのは、明らかです。

＊

普遍的で原初的な啓示というのは、単に「自然宗教」の別名にすぎません。そのような啓示は、哲学者たちの思惑（スペキュレイション）が作り出したものであって、それ以外のいかなる権威に基づくものでもありません。これと同様に、言語の獲得は人間の精神にとってまことに驚くべき達成でありましたので、同じような考え方をする哲学者たちは、普遍的で原初的な言語は、神から人間に、あるいはむしろ神から無言の存在に直接、啓示されたと考えるべきだと、主張しました。他方、教父たちや現代哲学の創始者たちのうちでも、とりわけ思慮深く敬虔な人々は、次のようなことを指摘しました。つまり、全知で全能の創造者が、無言の存在に対して、出来合いの文法書と辞書を贈答したと考えるよりは、言語能力の基本的な条件を人間の本性に付与したと考えるほうが、彼の全体的な働きとより調和的だ、と。同じことが、宗教にも当てはまります。神から人間に、あるいは神から無神論者の群衆に、直接に啓示された、普遍的で原初的な宗教という考えは、私たちの人間的な知恵にとって、あらゆる難問の最良の解決であるように見えるかもしれません。しかし、より高い知恵は、歴史の現実の彼方から私たちに語りかけ、次のようなことを学ぶよう教えます。「主は私たち一人一人から遠くに離れているのではありませんが、彼を手探りで探し、彼を偶然にでも発見しようとするなら、私たちはみな彼を探し求めねばなりません。」

＊

私は確信するのですが、もしも人類のさまざまな古代宗教の研究が、大胆に、学者のようにではなく、注意深く、かつ敬虔な精神をもって行なわれるならば、私たちの宗教的地平のあまりの狭さゆえに生じた、多くの疑いと困難が、取り除かれるだろうと思います。それによって私たちの共感は拡大し、私たちの思いは日々の些細な論争を超えて高められ、そして遠くない将来において、キリスト教のまさに核心に、新鮮な霊・精神と新たな生命が、呼び起こされるでしょう。

＊

ほとんどの歴史家や神学者が、世界の諸宗教を論じてきていますが、その扱いたるや、犯罪者の中の極悪人を前にした判事よりも、なお苛酷なものです。教祖たちの生活の中で、彼らがただの人間だったことを示すようなあらゆる行為が、熱心に取り上げられ、無慈悲に裁かれます。無防備に語られた教義が、考え得るかぎり最悪の意味で、解釈されます。私たち自身の神への礼拝方法と異なる、あらゆる崇拝行為が、嘲笑と軽蔑の種にされます。そしてそれは、偶然にではなく、意図をもって、否、わざとらしい義務感すらもって、行なわれています。それはちょうど、弁護士が依頼人を守るために、彼には天使的なものだけを認め、対する原告側には天使以外のものだけを認めるようなものです。その結果は――そうなるよ

りほかないのですが――正義の完全な誤用であり、人類のさまざまな古代宗教の、真の性質と目的の、完全な誤解でした。そして必然の成り行きとして、世界の諸宗教からキリスト教を真に際立たせているのはいかなる特徴なのか、そしてその創始者は世界史の中で、ゾロアスターやブッダ、モーゼやムハンマド、孔子や老師と比べた時どのような場所を占めるのか、ということを発見し損ないました。あらゆるほかの宗教を不当に貶めることで、私たちは自らの宗教を、創始者がまったく意図しなかった場所に祭り上げ、それを世界史の神聖なる文脈から切り離してしまいました。過ぎ去った時代に、神が預言者たちを通して父祖たちに語りかけた、さまざまに異なったあり方を、私たちは忘れたか、あるいは勝手に狭めてしまいました。また、時が満ち全世界の希望と願望が成就してキリスト教が出現した、と認めるべきですが、私たちはそうする代わりに、その出現をある断絶と見なすようになりました。つまりキリスト教は、「神による世の支配」と正しく呼ばれるべき不壊の鎖の中の、唯一の壊れた環と見なされているのです。否、さらに悪いことに、人類の古代諸宗教に対する単なる無知から、古来のいかなる宗教文書の中に見るより、最も非キリスト教的な教義を採用してしまった人々がいます。すなわち、キリスト教が起こる以前、地上のあらゆる民族は、神を知ることなく、天国の希望もなく、天なる父から、ただ見捨てられ見離され、忘れ去られていたと、彼らは信じたのです。世界の諸宗教の比較研究は、すべてのキリスト教徒の心から、このような神なき異説を追い出すという、ただ一つの結果を、確実に生み出すでしょう。そして、被造物へ向けられた神の永遠の叡知と愛を、私たちが全世界史の中にふたたび見て取ることを可能にするでしょう。もしそうなれば、比較宗教学は良い仕事をしたことになるでしょう。

＊

皆さんはまだ、多神教や神話を疑わしいものと思っているのですか？　いいえ、それらは不可避のもので、もしそう言ってよければ、宗教の幼児語（パレル・アンファンタン）なのです。世界にはその幼児期というものがあります。そして幼児期には、幼児のように語り、幼児のように理解し、幼児のように考えねばなりません。そしてそれが幼児のように語る時、その言語は真実なのです。もし私たちが、幼児の言語を成人の言語として聞くことに固執するならば、また、古代の言語を現代の言語に、東洋の語りを西洋の語りに、詩歌を散文に、逐語的に翻訳しようと企てるならば、間違いは私たちの方にあります。

＊

私たちが感覚を持ったままで取り残されているということ、それも人間の定義としてではなく、実際の状態としてそうであるということ、これだけでも、宗教は不可避のものとなります。私たちは、特別な機能や特別な啓示を、何も自らに要求しません。私たちが自らのものとして要求するのは、感覚という機能であり、歴史という啓示、あるいは現在の表現では、歴史的進化という啓示です。しかし、無限なるものの概念が、歴史のそもそもの初めから、人間の精神に備え付けられているのがわかる、などと仮定しないことにしましょう。私たちがせいぜい主張できるのは、その概念の胚種や可能性や未完成品が、初期の感覚的な知覚の中に隠れて存在するということ、そしてまた、理性が有限なるものから発達してくるように、

人間の感覚が知覚する中には、そもそもの初めから無限なるものがあり、信仰はその無限なるものから発達してくる、ということです。

＊

どの宗教もそれぞれ独自の成長を辿りますが、宗教が芽生えてくるもともとの種は、どこでも同じものです。その種とは、「無限なるもの（ジ・インフィニット）の知覚」であり、人間が自らあえて目を閉ざそうとしない限り、誰一人そこから逃れることはできません。意識が最初に揺らいだ時から、その知覚は、人間の感覚が及ぶあらゆる知覚、あらゆる想像、あらゆる発想、人間の理性が行なうあらゆる議論の下に、横たわっています。それはときとして、私たちの有限な知識の断片の下に、埋もれてしまうかもしれませんが、しかしそれはつねにそこに存在しています。十分な深さまで掘るならば、そこに埋もれた種が、つねに見出だされることでしょう。その種は、あらゆる真の信仰の繊維や導管に、生きた樹液を供給しているのです。

＊

世界の諸宗教は、ユダヤ宗教の変造であるとか、あるいは、ユダヤ宗教もそうであるように、原初の完全な啓示からでたものである、という既成概念があります。そうした先入観を抱いて宗教に近づく代わりに、宗教学（サイエンス・オヴ・レリジョン）を学ぶ者たちは、まず次のようなことを、第一の義務と見なしてきました。それは、宗教思想の初期の歴史からあらゆる証拠を集めるために、世界のもろもろの聖典の中に、またさまざまな人種の神話や慣習、あるいは言語の中にすら残された痕跡を辿る、ということです。しかるのちに宗教学徒は、こうして集められてきたあらゆる材料を、系譜に基づいて分類し、その上ではじめて、宗教の起源という問題に、新たな精神をもって近づきます。彼らは、感覚的な知識と、人間を取り囲む世界という、この二つだけを所与のもとして、さまざまな宗教の根源や、その基盤をなす根本的な概念や、とりわけ無限なるものの概念が、いかにして発達してきたのかを、明らかにしようとしているのです。

＊

宗教と哲学の区別が試みられてきていますが、こと形式と対象に関する限り、そうした区別が有益であることを、私は否定しません。しかし、宗教がかかわっている主体に注目するとき、それらはつねに哲学が思案しているまさにその主体であり、否、哲学がまさにそこから現れてくる主体であり続けています。もし宗教の生命そのものが、感覚に依存しているのならば、あるいは有限なるもののうちにおける、あるいは有限なるものを超えた所での、無限なるものの知覚に依存しているとするならば、その感覚、あるいはその知覚の正当性を決定するのは、哲学者でないとしたら、誰なのでしょうか？　人間がその感覚によって無限なるものを把握し、その単純な、したがって有限な印象から、理性によって諸概念を作り上げる能力を所有している、と決定するのは、哲学者以外の誰でしょうか？　通常に用いられる意味での感覚と理性が、つねに反対しているにもかかわらず、無限なるものが存在すると主張する権利を人間が持っているかどうか、明らかにするのは、哲学者でなければ誰でしょうか？　宗教が哲学から分離されると、宗教は地獄に落ちることになるでしょう。またもし哲学が宗教から離縁されたならば、哲学は廃墟と化すことでしょう。

＊

自分に正直な人なら、成年期の宗教は幼児期と同じだとか、老年期の宗教は成年期の宗教と同じだとか、誰が言えるでしょうか？　自らを欺き、最も完全な信仰は幼児のような信仰だ、と言うのは簡単です。実際、これほど真実なことは、ほかにありません。私たちが年をとればとるほど、幼児のような信仰のもっている知恵を、よりよく学ぶようになります。しかし、そのことを学び得る前に、私たちはまず別のレッスンを学ばねばなりません。つまり、幼児的な事柄を片づけるというレッスンです。沈む夕陽には、昇る朝陽と同じような輝きがあります。しかし、その二つの間には全世界が横たわっており、太陽は大空を渡り、大地を超えてゆかねばならないのです。

＊

私は次のような時がくることを期待しています。それは、人類の宗教の地下領域が、ますます近づきやすいものになる時……また宗教学（サイエンス・オヴ・レリジョン）が、たとえ今はまだ願望や種子にすぎなくても、やがて実を結び、豊かな収穫をもたらす時です。その収穫の時が来て、そしてあらゆる世界宗教の最深の基盤が解放され、回復されたら、あに計らんや、まさにその基盤が、地下墓地（カタコンベ）のように、あるいは聖堂の地下堂（クリプト）のように、人々の避難所としてもう一度役に立つかもしれません。誰もが皆、この地上の偶然によってそれぞれの宗派に配属されていますが、宗派の定める供犠や礼拝や説教に日々参加する中で発見するものよりも、より良くより純粋で、より始源的でより真実のものを願い求める人々がいます。そのような人々のために、これは役立つかもしれないのです。幼児的な事柄を片づけることを学んだ人々は、それらを系図、伝説、奇跡、託宣などと呼ぶかもしれませんが、その彼らにしても、心の中から幼児のような信仰を手放すことはできません。それぞれの信仰者は、自分が最も大事にするもの、いわば高価な真珠をもって、静かな地下堂に降りていくことでしょう。ヒンドゥー教徒は、現世への生来の不信と、他界への揺るぎない信仰をもって。仏教徒は、永遠の法の知覚とそれへの帰依、そして優しさと哀れみをもって。イスラム教徒は、ほかの何はなくとも節酒をもって。ユダヤ教徒は、日々が良きにつけ悪しきにつけ、正義を愛し、「私はある」と名乗る一なる神への密着をもって。キリスト教徒は、それらすべてより良いもの、つまり神への愛をもって。もしそれを疑う人があれば、私たちの愛を試みるとよいでしょう。無限なるもの、不可視なるもの、不滅なるもの、父、至高の自己、そのほか、それを何と呼ぼうが、あらゆるものを超え、あらゆるものを通し、あらゆるものの中にある彼への愛は、私たちの人間への愛、生きているものへの愛、死んだものへの愛の中に顕現するもので、それは私たちの生き通しの愛、死ぬことのない愛なのです。

＊

使徒たちによって、またいわゆる異教世界の偽預言者たちによって、同じ教えが、しかも時としてまったく同じ言葉で、語られることがあります。そうしたものを見たとしても、彼らが高価な真珠をもっていることを、羨むには及びません。二つの宗教が同じことを言っているからといって、つねに同じ内容が語られているとは限りません。しかしもしそうだったとしても、私たちはむしろ喜ぶべきではないでしょうか。そして、人類の天なる持参金と呼ばれるべきものに、真理という資金を増し加えるよう、全力を尽くすべきではないでしょう

か。真理とは、私たちがそう教えられているように、それを探しもとめさえすれば発見できるような、誰にも身近なものなのです。

＊

宗教は、超自然的なものではなく、人間にとってまったく自然なものと見なされるべきです。そしてその宗教は、人間を今あるごとくに、かつ時の初めから定められたごとくに作り成した、あの歴史的進化に統合されるべき一部として研究された時はじめて、新たな意味とより高い威厳を獲得しました。この世界のあらゆる時あらゆる場所に、神は自らの証人を置いたと知ること、また神の手はどこでも赤子や乳飲み子の手の届く範囲にあったと知ること、否、時を経て神を真実に讃える言葉となって完成したのも、もとはと言えば、赤子や乳飲み子つまり未開人や野蛮人の口から発せられた、粗野な言葉であったと知ることは、慰めではないでしょうか？　自然の中だけでなく歴史の中にも成長と進化を探求することは、何ら責められるべきではなく、今のところまたこの一世紀の間、何らの損失ともなりませんでした。聖なるものの中でも最も聖なるものから、ヴェールがまだほんの少ししか取り除かれていないとしても、私たちのあとからくる人々は、少なくとも一つの教訓を学んでいることになるでしょう。すなわち、このヴェールを持ち上げるという、司祭にだけ許された特権と見なされていた行為は、もし誠実な真理の追求者によってなされるならば、もはや神聖冒瀆ではない、という教訓です。

＊

宗教とは「無限なるものの知覚」に存しますが、それはその顕現が、人間の道徳性に影響を与え得るかぎりにおいてです。

＊

ただ単に、最も偉大な知性の持ち主たちによって、あるいは世界史のさまざまな時期の大多数の人類によって考えられたから、というだけで、それが真実の意見だとは限りません。世界の諸宗教を、最も低い形態から最も高い形態にいたるまで、研究しつくすために長い年月を費やすことは、誰にもできません。私たちがややもすると異教徒や野蛮人と呼びたがる人種の間に、宗教的努力の正直さ、宗教的感情の暖かさ、宗教的行動の気高さを見いだし得るためには、私たちはともかく謙遜というレッスンを学ばねばなりません。ユダヤ人であれキリスト教徒であれ、マホメット教徒であれバラモン教徒であれ、もしその人たちに慎ましさというものがすこしでも残っているならば、次のようなことを認めなければなりません。つまり、自分たちの宗教だけがまったく完全であって、ほかの人たちが信仰する宗教は初めから終りまで間違っている、などということがあれば、それこそ奇跡以外の何物でもないだろう、ということです。

＊

世界の諸宗教の歴史（世界宗教史）を学べば学ぶほど、個人的な宗教と呼び得るようなものは実際にはあり得ないということが、ますます明らかになってきます。私が言っているのは、いわば新たに（デ・ノヴォ）、あるいはむしろ卵（アブ・オヴォ）から、ただ一人の人間によって創造された宗教、という意味です。こう言うと奇妙に思われるかも知れませんが、それでもこれはまったく自然なのです。宗教は言語と同じように、どこにあっても歴史的に成長するものであって、完

壁に新しい宗教を発明しようとしても、それは完璧に新しい言語を発明するのと同じくらい、絶望的な仕事になるでしょう。それに、歴史的な偉大な世界宗教の創始者たちも、そのような排他的な権利を主張しようとはしないでしょう。それどころか、彼らの多くが強い口調で逆に断言したのは、自分たちは古い寺院を破壊したり、まったく新しい寺院を建立したりするために来たのではない、ということでした。

＊

全世界はそのすばらしい歴史を通じて、生命を求める苦闘、永遠の生命を求める苦闘を経験してきました。そして私たち一人一人も、それに劣らぬ自分たちのすばらしい歴史を通じて、同じようなすばらしい苦闘を経験してこなければなりませんでした。なぜなら、そのような苦闘なしには、いかなる聖典をもった宗教といえども、人間の心の中に、根づいて成長し実りをつけるための土壌を、見いだすことができないからです。いかなる聖典であれ、それが私たちの中に安全で磐石の基盤を見いだすことができるのは、私たち皆が、自らの中に書かれざる（ブック レス）宗教を持っているからに違いありません。その基盤なしには、どんな寺院も建ち行くことができません。寺院の壁が安全でなくなり、今にも崩れそうになるのは、この基盤があまりにしばしば無視されるからです。

＊

どこの空の下にあっても、また人間の生活があらゆる異なった状況で営まれていても、人間の心（ハート）と精神（マインド）と魂（ソウル）とは、つねに同じものです。どんな人間であれ、「すべての人を照らす光が来ようとしていた」そのまことの光（ヨハネ、一章九節）から隔てられてしまうことがある、などと信じるのは恐ろしいことです。その光はすべての人を照らし、また世界のあらゆる宗教を照らすのです。書かれざるものであろうが書かれたものであろうが、人間的なものであろうが神的なものであろうが、自然なものであろうが超自然なものであろうが、ただその光のみが、この世を支配する疑いと恐れの闇を晴らすことができるのです。ほかの何にもまして、私たちの時代が必要としているのは、自然宗教（ナチュラル・レリジョン）です。さまざまな神学者が超自然的（スーパーナチュラル）宗教に対してどのような意味を付与するにせよ、歴史が私たちに教えているのは、超自然ほど自然なものはない、ということです。しかし、その超自然的なものは、つねに自然なものの上に重ねられ（スーパーインポーズド）ていなければなりません。自然宗教なしの超自然的宗教は、砂に建てられた家のようなものです。そして私たちのこの時代、疑いの雨が降り、批判の洪水が起こり、不信の風や絶望が吹きつけ、家に叩きつけると、その家は倒れてしまうでしょう。書かれざる宗教、自然宗教、永遠の宗教という、固い岩の上に建っていなかったからです。

＊

すべての宗教は、新しいものであれ古いものであれ、賢いものでも愚かなものでも、つねに一種の妥協でしかあり得ません。ですから、実際の腐敗や堕落に対しては抗議するにしても、私たちと言葉が違っているだけの人々に対しては、我慢することを学ばねばなりません。しかし私たちはまた、次のようなことは信頼せねばなりません。それは、暗夜には雑草が芽吹くかもしれないけれども、麦の穂はすべての正直な心の中の収穫に向けて、豊かな実りをつけるだろう、ということです。

＊

宗教の根本的な事柄において、私たちは隣人と比べ、より良くもなく、より悪くもありません。また、自らを天にまします一つの同じ父の子供であると教えられてきた偉大なる家族の一員として、私たちはあらゆる兄弟たちと比べて、より賢くもなく、より愚かでもありません。

＊

自然宗教の研究が私たちに教え得ることとは、何でしょうか？　ほかでもない、宗教は自然であり、リアルであり、不可避であり、普遍的である、ということを教えるのです。これはつまらないことでしょうか？　宗教を自然と呼ぼうが超自然と呼ぼうが、あらゆる宗教がその上に建つべき固い岩があると知ることは、つまらないことでしょうか？　私たちは歴史の記録から、神は自らよいことを為しかつその証し人を備えること、天から雨を降らせ私たちに実り豊かな季節を与え、私たちの心を満たし、全人類の心を食物と喜びで満たすこと、などを学びますが、これはつまらないことでしょうか？

＊

自然宗教を研究することで、私たちは一方において、自然なものと見なしがちなこと、当然のこととして受け入れがちなことの多くが、実は意味に満ちあふれ、神に満ちあふれ、実際はそれこそがほんとうに奇跡的である、ということを教えられます。他方また、それは私たちの目を、別の事実に開かせます。つまり、私たちが超自然的なものと見なしがちなことの多くが、実は完全に自然的であり、完全に理解できるものであり、それどころか、すべての宗教が成長するのに不可避である、という事実です。

＊

世界のあらゆる宗教の間に、ほんとうの一致があるということ、このことが私たちに教えるのは、あらゆる宗教は同じ土壌から、つまり人間的な心から芽吹いたのだということ、それらは皆同じ理想を目ざしているということ、そしてそれらは皆同じ危険と困難に取り囲まれている、ということです。この観点からすれば、古代世界の諸宗教の記録の中に、超自然的に描かれていると見えるものの多くは、完全に自然的なものになります。

＊

自らの宗教の中に何の困難も認めない人は、他宗教を研究しても、それで新たな困難が生じるということはありません。むしろその助けによって、すでに所有しているものを、よりよく理解することが容易になるだけでしょう。ほかの諸宗教も救済に必要なあらゆる要素を含んでいることを示すために、私はこれまで縷々と述べてきましたから、もし自分の確信を隠匿するようなことがあれば、それは私としてまったく不正直なことになるでしょう。その確信とはすなわち、キリストによって教えられた宗教は、教会のあらゆる壁や壕堀に閉じこめられないかぎり、世界がかつて知っている中では最良のもの、最も純粋で最も真実のものである、ということです。

＊

宗教がふたたび、科学的扱いや正直な批判の手の届かないところに位置を占め得る、などと期待するのは、時の印をまったく誤解している証拠です。それは結局のところ、私的な判断に対抗して、それをもう一つの私的な判断で置き換えるにすぎないでしょう。宗教的論争

は、制約することによって憤りを呼び起こし、かくして宗教的な主題に関するあらゆる議論を害ないます。もしも、私的に判断するという絶対的な権利、つまり正直であり真実であるという奪うべからざる権利が、もっと広く認められたならば、そのような宗教的論争の性格はたちまち変化することでしょう。

＊

宗教のあり方に、より高いものとより低いものを区別するのは、不正直であるどころか、ほんとうはそれのみが、人生の現実というものの正直な認識なのです。もしも哲学的な精神にとって、宗教は神への霊的な愛であり、自分の中にある神の霊のまったき自覚の喜びであるとしても、そのような言葉が、何百万という人々に、はたしていかなる意味を伝えるでしょうか？　それでもそれらの人々は、宗教を必要としています。神が存在すること、神の命令には疑うことなく従わねばならないこと、こうしたことを教えてくれるような、実際的で権威ある、啓示された宗教を必要としているのです。

＊

目に見えないもの、有限でないもの、人間的でないもの、人間を超えた神的な何ものか、こうした存在を表わす言葉を何も持たないような人種は、いまだかつて発見されたことはありません。ある人々はこのことを示した上で、諸宗教を網羅的に研究することで何が得られるのか、と尋ねます。神学者の中には、そのような信仰の普遍性が発見されたという点について、憤慨するに至った人々すらいます。彼らは、人間の理性だけでは神の概念にけっして到達できなかったと、やっきになって証明しようとしています。天から雨を降らせ、実り豊かな季節を与え、食物と喜びで私たちの心を満たしてくれる存在への感謝の思いから、有限なるものを超えた高い何ものかへの信仰が、人間の心の中に芽吹いてきたのかも知れないのに、そのようなことを信じるくらいなら、彼らはむしろいっそのこと、神は自らを証し人のないまま放っておいた、と信じたがるのです。

＊

物の宗教（フィジカル・レリジョン）は、大いなる自然現象の背後に作用者（エージェント）の存在があるという信仰に始まり、人間の精神が思考の作用者あるいは神の存在を信じるに至った時、たとえそれらが何という名前で呼ばれようが、その最高点に達しました。この神は、祈りによって懇願することができ、供犠によって宥和することができる、と考えられていました。この神は、神々や人々の父と呼ばれました。それでも、その最高の概念においてすら、その神はニューマン枢機卿[ジョン・ヘンリー・ニューマン（一八〇一～一八九〇）英国のカトリック神学者、文人]が定義した以上の存在ではありませんでした。ニューマン枢機卿は次のように書いています。「至高の存在という言葉で私が意味しているのは、端的に自己にのみ依存する存在であり、そのようなものとして唯一の存在のことである。彼は無からすべてを創造し、作ったのと同じくらい容易に、すべてを破壊することができる。したがって当然、彼はそれらから深淵によって隔てられており、あらゆる属性に関して何も言い表わすことができない」と。人から神を隔てるこの深淵は、物の宗教の到達点において、留まります。ここにその固有の弱点が存しますが、しかしまさにこの弱点が、やがては強さの源となります。というのは、より良きものへの憧れが、そこから芽吹いてくるからです。ユダヤ人の神ですら、その近寄りがたい威厳にもか

かわらず、また地上に生きている人間の尊敬と敬愛を受けたにもかかわらず、いわば束の間の忠誠を受け取ることができただけでした。なぜなら、「死者は神を讃えることができず、闇に沈んだ者たちも同様である」からです。神は不死であり、人間は死すべきものでした。そして物の宗教は、神と人を隔てるこの深淵に、橋を架けることができませんでした。しかしながら真実の宗教は、神への信仰以上のものを必要とします。そこでは、いずれにせよ来たるべき人生における人間への信仰や、神と人間の親密な関係もまた、必要なのです。人間の中には、生存が継続することへの願望が、抑えがたく存しています。この人生において、それは自己防衛と呼ばれる形で表われます。そしてこの人生の終りに死が近づいてくるとき、それは不死への希望という形で表れるのです。

＊

そうであり得たかもしれない、あるいはあり得なかったかもしれない何かとして、人類史を見ることができるでしょうか。その場合、宗教の性質やその成長の法則に関する考えを形成するために、宗教を学ぶ者が、『東方聖典集』よりもトマス・アクィナスの傑作『神学大全』を好んで用いるのは、不思議ではありません。しかしもし私たちが、歴史の中に理性的な目標が実現するのを認識する術を学ぶならば、また、もし言葉の真の意味においてその歴史を神聖劇と見なすことを学ぶならば、そこに啓示される筋書きは、哲学者の目から見ても、たとえ彼が最も啓蒙された論理的な神学者であったとしても、その憶測をはるかに超えた意味と価値を帯びてくるはずです。

＊

この地上からより高い世界へと、人間の心を持ち上げ得るもの。人間により高い力が遍在することを感じさせ得るもの。人間を悪から退かせ、善へと向かわせ得るもの。幸福に輝く束の間の時間と、長く続く恐ろしい絶望をともなった、人生というこの短い旅を通して、人間を支えるもの。こうしたものが、諸聖典の一つ一つの中に秘められているかどうか、あるいはいないのか、それが問題です。

＊

ニューマン博士（ジョン・ヘンリー、前出）がいみじくも強調して言われたように、神への信仰だけでも、魂への信仰だけでも、宗教にはなりません。リアルな宗教とは、魂の神への関係、神の魂への関係を、真実に知覚することの上に、築かれるのです。

＊

世界の諸宗教の創始者たちは皆、まさに橋を架けた人々と言ってよいかもしれません。彼方なるもの、地の上の天、私たちの上下に存在する神々、こうしたものがいったん認識されると、さまざまな対語で呼ばれる二つのものの間に、大きな溝が口を開きます。いわく、地上的なものと天上的なもの、物質的なものと霊的・精神的なもの、現象的なものと本体的なもの、あるいは最もよい表現では、見えるものと見えないものの間に、溝ができます。これら二つの世界を、希望のアーチによってであれ、あるいは三段論法という論理的な鉄の鎖によってであれ、ふたたび一つに結びつけるのが、宗教の主な目的でした。

＊

宗教が、リアルな宗教、人間自身の宗教であるためには、それは探求され、発見され、勝ち取られねばなりません。単に相続されただけ、あるいは自明のものとして受容されただけであれば、そのような宗教はしばしば、年を経て衰微しがちです。そうなると、それはふたたび勝ち取られるか、別の宗教で置き換えられねばなりません。

＊

宗教は成長するものであり、けっして完成することはありません。最も低い段階から最も高い段階まで、宗教はただ意志されるだけではなく、ただ与えられるだけでもなく、ふたつながらのものとして、成長してゆきます。最も低い段階は、私たちにはきわめて不完全に見えるかもしれませんが、だからこそそれらは、いっそう重要なのです。言語と神話は、人類が自然から神へと旅してきた古い道筋を、私たちに示しています。　　（草稿）

＊

すべての宗教の中に貴重な粒々がある、ということを学ぶほど、今日重要なことはありません。すべての宗教について、本質的なものとそうでないもの、永遠のものと束の間のもの、神的なものと人間的なものを、大まかに区別する線を引かねばなりません。そして、たとえ万巻の書が非本質的なもので埋められているとしても、しばしばほんの数語の中に本質的なものが含まれていることがあり、そこに「すべての律法と預言者がかかっている」のです。

＊

宗教も言語と同じく、多様であるべく定められています。一見したところ、私たち全人類が一つの言語を使うことは、はるかによいことのように見えます。しかし、そうであってはならないのです。それぞれの言語は、それぞれの人種にとっての学校となるべきものであり、それぞれの民族に委ねられた才能です。それらすべての中に真実がありますが、真実の全体をもっているものはありません。それぞれは自らの宗教を育み浄化するべきであり、死して腐りつつあるものは投げ捨てるべきなのです。しかし自らの宗教を放棄するのは、自らの生命を放棄するに等しいことです。最も低きにある野蛮人ですら、キリスト教に改宗したあとにも、彼自身の神への古い信仰を保存していなければなりません。そうでないと彼は、自分の信仰に生き生きとした生命を与える根を、失ってしまうことになるでしょう。もし人々が、あらゆる宗教の中にある良いものを探すことを学びさえすれば、その人々の目には、この世界がどんなにか素晴らしいものと見えることでしょう。彼らは、十分な努力をもって鉱脈を掘り進み、掘った土を篩にかけ、鉱石を製錬して純度を高め、金のかけらを手にします。こうした苦労の果てに貴重なものを手に入れた時、鉱滓やかすはすべて、忘れ去られるのです。これこそ、私たちが宗教学徒として為すべきことです。しかし私たちがしていることといえば、これとまったく反対に、鉱滓を後生大事に抱きかかえ、輝く黄金の光に目を閉ざしているのです。ユダヤ人とキリスト教徒は、この点では、ほかのあらゆる人々より最悪です。それはひょっとすると、これらの宗教がほかの宗教よりも、人間的な不純物を免れているからかもしれません。しかしだからといって、ほかの宗教のほんとうに良い点について、彼らが盲目になってよいはずはありません。ほかの宗教は悪魔の作ったものだと見なすほど、彼らが盲目であってよいはずはありません。悪の力は、あらゆる宗教の中に働いています。私たちの宗教さえ、その例外ではありません。しかし善の力は、いたるところを隈無く覆ってい

るのです。そのことを知るまで、この人生と歴史は、堪え難いものに思われます。それを知ったからといって、宣教という仕事に終りが来ることはないでしょう。その仕事はむしろ、私たちにとっては愛の仕事となり、私たちが勝ち取ろうとしている人々にとっては、より苦痛少ないものとなります。私たちは彼らを彼らの神から引き離そうとしているのではなく、彼らの神に連れ戻そうとしているのです。彼らはこれまで神の真の姿を知らずに礼拝していたのですが、私たちは自らの光の中で神と見えるものを、彼らに宣言するのです。私たちが見ている神は、多くの点から見て、彼らの神よりも、暗さを脱しているかもしれません。しかし、それでもやはり暗いのです。聖パウロのように、人間の精神という弱々しいガラスを通して神を見ようと、最も激しく努力してきた人たちが、よく知っているように。
（草稿）

＊

あらゆる宗教を超えた一つの宗教そのものが実際にあること、人は誰でも自ら勝ち取った自らの宗教を持たねばならないこと、また何であれ宗教を見たら寛容に扱うという姿勢を学ぶべきこと、こうしたことを人々が学び知りさえしたら、と思います。もしもキリストの単純な言葉から足を踏み出さなかったら、また、もしもそれらの言葉が発せられた時や所や状況を十分に斟酌して、私たちが神に従うようキリストが望んだ通りに、私たちがキリストに従ってさえいたら、キリスト教は完璧な宗教になっていたことでしょう。私たちはすでに多くの点において、それらの時代や状況をはるかに超えて進んでいます。しかし最も本質的なところで、私たちはいまだにキリストの教えのはるか後方にいます。クリスチャンであること、キリストに従うということが、いかに困難かという考えもなしに、自分はクリスチャンだと自称する人々が、何と大勢いることでしょう。奇跡が簡単に起こりそうにみえる時、信仰箇条をただ繰り返したり、信心めいた気分を作り上げたりするのは、きわめて容易なことです。　　（草稿）

＊

唯一真実なる神の名のみにおいて、世の前に立ちあがり、自分たちの神が、アテネやエフェソスで崇拝されていた偶像とはまったく無関係である、と証しすることは、使徒たちや初期の多くのクリスチャンたちの義務でありました。また初期の回心者たちの義務は、彼らのかつての神々への忠誠を、すべて否認することでした。もしも、ずっと崇拝してきた神々が実はどこにも存在しなかったのだと、すぐには信じられない時は、彼らは徐々に考えを変えるように指導され、それらが悪魔的な性格だったのだと見なすようになりました。そして、初期教会の教義に慣れ親しむようになると、それらを悪（イーヴル）という新たな原理の所産として、呪うようになったのです。……聖アウグスティヌスの全作品を通じて、また彼より前のキリスト教神学者たちの全作品を通じて、こうした敵意が貫いているのがわかります。彼らはその敵対的な精神のせいで、人類の古代の諸宗教の中にある、あらゆる善良で真実で神聖なものに対して盲目にされ、あらゆる邪悪で虚偽で堕落したものに対しては、誇大な恐怖を抱かざるを得ませんでした。ただ使徒たちとその直弟子たちだけが、古い崇拝の形式に関して、あえて異なった語り口で、そして間違いなくよりキリスト教的な真実の精神において、語った

のです。……アテネにおける聖パウロの言葉に比べて、より確信に満ちより力強いものが、ほかにあり得るでしょうか？

＊

一なる神が存在すること、その神が天と地を創造したこと、神は休むことなき摂理によって世界を治めていること、こうしたことを信じる人々には、次のようなことは信じられません。それは、私たちと同じ神の似姿として創造された億万の人々が、その無知なる時代には神からまったく見捨てられ、その頃の宗教はすべて虚偽であり、崇拝行為はすべて茶番であり、生活はすべて悪ふざけであった、などということです。世界の諸宗教を誠実かつ偏りなく研究すれば、事実はそうでなかったことがわかります。……真実の幾許かを含まないような宗教は、一つもありません。それどころか、宗教学は私たちに、より以上のことを教えるでしょう。つまり、ほかのどこよりも古代の諸宗教の歴史の中にこそ、私たちは「人類が受けた神聖な教育」というものを、より明らかに見ることができるでしょう。

＊

神聖なるものが、もし私たちに全き姿を現わすとしたら、それは人間の姿をとってこそ最もよく現われることでしょう。人間的なものが神的なものからいかに遠く隔たっていようとも、この地上において、人間より神に近いものはほかになく、人間より神に似たものはほかにありません。そして、人間が子供から老人へと成長するにつれ、神的存在の理念も揺り籠から墓場まで成長してゆかねばならず、それは恩寵から恩寵へと至る道筋なのです。このように、生きて成長してゆく人間とともに、生きて成長してゆくことができない宗教は、すでに死んだ宗教です。限定されて変化することのない均一さは、誠実と生命の印であるどころか、つねに不誠実と死の印です。およそ宗教というものは、もしそれが賢者と愚者を結びつけ、老人と青年を結びつけ得るものであれば、柔軟なものでなければならず、あらゆることを許容し、あらゆることを信仰し、あらゆることを希望し、あらゆることを我慢するほど、高く深く広いものでなければなりません。宗教がそのようであればあるだけ、その生命力は大いなるものであり、その宗教が包容する強さと暖かさは、より大いなるものなのです。

啓示

真実の霊感（インスピレーション）とは、現在もまたこれまでもつねに、内なる真実の霊・精神（スピリット）であり、それはまた神の霊・精神の別名に他なりません。真実がインスピレーションを作るのであって、インスピレーションが真実を作るのではありません。真実の何たるかを知っている人は皆、シンスピレーションの何たるかもまた知っています。それは、神によって魂に吹き込まれる霊感（テオプネウストス）だけではなく、まさに神の声そのもの、そこでのみ私たちが人間として神を知覚し得る、神のリアルな現前なのです。

＊

啓示という考えの中には、進歩という考えを排除するものは、何もありません。啓示という言葉をどう定義しようとも、それは神的存在と人間とのコミュニケーションであり、つねにその両方を必要としています。啓示に含まれる真実が何であれ、それが啓示における神的な要素であり、それは不変であるとしましょう。しかし、受け手の側の人間的な要素は、偶発事件や人間の性質の弱さによって、つねに変動せざるを得ないのです。そうした人間的要素は、いかなる宗教からも、けっして除去し去ることはできません。……あらゆる宗教におけるこうした人間的要素を無視することは、あたかも光を甘受してその色彩を決める目の存在を無視するようなものです。私たちは先祖たちよりも太陽について多くのことを知っていますが、それでも私たちを照らしているのは、先祖を照らしていたのと同じ太陽です。……人間の理性は、神聖なものについてより真実でより純粋な考えを持とうと、努力するものです。そのような理性の視力を強化し得るようなものを、神学は軽蔑してはなりません。視界にかかるヴェールは、いつまでもなくなることはないでしょう。しかしあらゆる人間の探求がそうであるように、私たちは宗教においても、闇がより少なくなり、光がより多くなることを望んでいます。私たちは何かを求めています。それを生命と呼ぼうが、成長、発展、進歩と呼ぼうが、私たちが求めているのはそうしたものです。ただの休息や停滞や死は要らないのです。

＊

啓示を受け入れるよう促すのは、真実が圧倒的な力をもって迫ってくる、という感覚です。しかし、初めはこのように真実が啓示を作ったのですが、やがて時が過ぎるにつれ、逆に啓示が真実を作るのだと考えられるようになりました。世界のいたるところでこのような出来事が起こっているのを、私たちは目にします。またきわめて自然な成り行きで、それが超自然的なインスピレーションの信仰へと、心理的に進歩していく様子を、私たちは観察することができます。このようなわけで、宗教を歴史的に研究することは、骨董愛好者にとって有益であるなどとはとても言えず、むしろそれは、私たちが現在の火急の問題を解決するためにこそ役立つのです。

＊

私はただ一つの啓示のみを信じます。それは私たちの内なるもので、外から来るいかなる啓示より、ずっと良いものです。なぜ私たちは、神の姿と神の声を外にのみ求め、内に求めようとしないのでしょうか？　神の寺院、神の真実の王国は、どこにあるのでしょうか？

＊

キリスト教の神秘家には、内的な啓示や心の内なる神の声を、外的な啓示のはるか下位に置こうとしない人々がいます。心の内に神の現前があることを知っている人々にとって、この内的な啓示は、ほかの何よりもはるかにリアルなものです。彼らは聖パウロとともに、人間こそが言葉の全き意味において神の寺院であり、人間の内にこそ神の霊が住まう、という考えをもっています。それどころか、さらに、彼らはクリスチャンかつ神秘家として、父が子において存在し、子が父において存在するように、あらゆる人間が父と子において一つである、という信仰を固くつかんでいます。彼らの精神の中で、キリスト教の教義と神秘家の

教義との間に、葛藤はありません。それらは本来同じ一つのものであり、一方はキリストを通して地上に伝えられ、もう一方は人間の内に住まう神の霊を通して、つまり人間の内に生まれたキリストを通して、伝えられるのです。聖ヨハネの福音は、キリスト教神秘家が保持する言葉使いに満ちています。それによってヨハネは、神の霊が内在するという信仰、あるいは人間の魂におけるキリストの誕生という信仰を、自ら正当化したのです。

＊

原始の啓示や神に関する根源的な知識に、何らかの意味を結びつけることは、私にはできません。神に関する知識は、いかなる時代においても、まったくの不可能事に属しています。人間はただ信頼することができるだけで、知ることはできません。人間は無限なるものや神聖なものを感じることはできますが、それらを知的に分類したり征服することはけっしてできません。神に対する私たちの無意識的な関係は、つねに存在しているはずのもので、けっして破壊できないものです。私の見るところ、問題は、その神との関係をいかにして徐々にもっと意識的なものにしてゆくか、ということです。このことは、世界のさまざまな宗教の歴史を学ぶことで、最もよく理解できるようになります。宗教史にはおびただしい発見の旅があり、それらはどれも苦しみと英雄的な偉業に満ち、すべては同じ極地を目指し、どれもがそれとして判断されるべきです。そして私の信じるところ、まったく無価値とされるものは、それの中に一つもないのです。　　（草稿）

＊

福音書に出てくるすべての言葉、すべての文字、すべての寓話、すべての姿が、その著者たちの耳に囁かれた、などと考えるのは、たしかに馬鹿げており、それはただ人間の勝手な考えに基づいているだけです。しかし真実の啓示、ほんとうの真実は、馬鹿げたものではありません。それは早くからギリシアの哲学者たちによって予想され、フィロンのようなイエスの同時代のユダヤ人たちによって徐々に受け入れられ、古代ギリシア教会のクレメントやオリゲネスのような人々によって教えられ、そして最も洗練された形ではイエスの生涯において実現され、彼の死によって封印されました。永遠の生命は、すべての思慮深いクリスチャンのためのものであり、イエスが樹立しようと望み、一部は実際に樹立した地上の神の王国も、また然りです。この王国の住民となるのは、人間が達成し得る中で最高のことです。しかし、単に洗礼や堅信礼を受けるだけでは、そこには到達できません。それは、熱烈な霊的葛藤を通して、勝ち取られねばならないのです。

リグ・ヴェーダ

私が知っているかぎり、あらゆる教典の中でただヴェーダだけが、神意識の発生という問題を扱っています。これに比べると、ヘシオドスの『神統譜』は、まるでくたびれた動物のようです。私たちが見るのは、ヴェーダがさまざまな矛盾を抱えながら、ときに突然の恐怖があったり、驚異があったり、ときに勝利があったりしながら、ゆっくりと着実に成長していく様子です。神は、その秩序と不滅性において、闇に対する光の永遠の勝利において、また冬に対する春の永遠の勝利において、太陽と星々が永遠に往来する軌跡において、自然の中に存在を顕現します。ちょうどそのように、人もまた、自然の中から神の存在を徐々に読み取るようになり、神に無数の名前を与えようとしてきましたが、すべて無駄でした。そうした試行錯誤ののち、ふりかえって見ると、すでにヴェーダにおいて次のように述べられているのを、私たちは見いだすのです。「人間たちは彼をインドラ、ミトラ、ヴァルナなどと呼ぶ。そしてまた、天なるもの、美しい羽根をもった鳥と呼ぶ。一なるものを、人間たちはさまざまな名で呼ぶ」と。……不死性の信仰は、神意識のいわば別の側面にすぎません。そしてどちらも、アーリア民族にとってはもともと自然なものなのです。

科学

真に科学というべきものはすべて、頑健なアルプス案内人のようなものです。それは私たちを、狭い場所から連れ出して、より高い場所へ導いていきます。それまで私たちは慣れ親しんだ意見をもって、より平和で愛らしくもある谷間に暮らしていたかもしれません。そして連れて行かれるのは、一見して魅力のない、それどころか、ときとして落胆させるような場所です。しかししばらく我慢して黙々と登っていくと、やがて視界が開け、私たちはまわりに新たな世界が広がっているのを目にするのです。

＊

新たな地平が開けると、私たちの目はより遠く、より広く見るようになります。眼下の世界はますます広大なものとなり、私たち自身の心もますます広大になるように思われます。はるか遠くにあって、かつては奇妙で私たちに無関係と見えたものを、より暖かい認識と、より深い人間的共感で抱擁することを、私たちは学びます。こうして私たちは、より広い概念を形成し、より高い真実を知覚するのです。

＊

自然的なものが神的であり、超自然的なものは人間的です。

＊

人間は万物を測定する存在です。そして、人間の精神という鏡に映る外なる世界が、年ごとにより完全に、より秩序正しく、より定義づけられ、より偉大に成長していく、それこそが科学というものです。人間を研究することなく自然を研究しようと企てるのは、目を研究することなく光を研究しようとするのと同じくらい、不可能なことです。したがって私にまったく疑いないと思われるのは、このカレッジ[バーミンガム大学の母体の一つ、メイソン・サイエンス・カレッジ。ジョサイア・メイソン（一七九五〜一八八一）により創立された、数学、物理学、土木工学などのカレッジ]が創立された方針が、いずれは人間の科学を排除するほど狭くなるであろう、ということです。人間を人間たらしめるものの科学、つまり言語の科学や――結局は同じことになりますが――思想の科学が、排除されることになるのです。しかし、過去の言語や文学を取り上げられたら、私たちは何によって、最も素晴らしい発達の事例である思想の研究をすればよいのでしょうか？　私たちの祖先が、自らの訴えを自らの言葉で語ることを許さないとすれば、私たちはいかにして彼らに正義をなし得るでしょうか？　自然科学は文字文化なしには成り立ちませんが、文字文化のほうは自然科学なしでも、はるかに容易に成り立ち得るでしょう。もちろん、この二つが完全に組み合わされるのが、最も望ましいのです。

自己

インドにおいて、自然のさまざまな神々の背後に、一なる至高の神がついに発見されました。バラモンたちは、感情や思考や意志など、さまざまに異なって顕現するもの背後に、至高の力を知覚したと考えました。知的な能力や機能は、それが外部に顕現したものに過ぎないとされ、それはアートマンすなわち自己（セルフ）と呼ばれました。やがてこの哲学が宗教の位置を占めるに至り、人間の中における真実の存在、つまり生まれることなく、したがって滅びることのない本質的要素が、認められるようになりました。これをもう一歩進めると、人間における主観的なセルフと、自然における客観的なセルフとの、本来の同一性が認められることになり、かくしてインド的な観点からは、この世のあらゆる謎は解決されました。あらゆる哲学の最初の戒めである「汝自身を知れ」という標語は、ウパニシャッド哲学においては、「汝自身がセルフであると知れ」という標語になりました。これを宗教的な言葉で翻訳すると、「われわれは神において生き、動き、存在を保っていると知れ」となるのです。

＊

子供の死は、何か神聖な目の光が、この世の鏡から素早く目線を転じたように見えます。それはあたかも、人間の意識が目覚めて、鏡の中に自らの存在を認めたと思うよりも前に、最後に目を閉じるまさにその時に、自分だと思ったのは自分の永遠のセルフの影あるいは反映だということを、ほんの一瞬だけ知覚するかのようです。

＊

真実のセルフを見いだした人は、もはや洞窟に入って修行する必要はありません。その人はほかの皆と同じように生活し、行動すればよいのです。その人は「生活しながら自由」です。あらゆる事は以前と同じままですが、ただ違うのは、変わることも滅びることもないセルフの感覚が、現象的なセルフを超えて、その人を高めているということです。その人は着物をまとっていることを知っている、それだけのことです。それがわからない人は、わかる時がくるまで、努力しつづけねばなりません。着物が皮膚のように貼りついている人、女性ではなく男性、ドイツ人ではなくイギリス人、大人ではなく子供である、などというアイデンティテが壊れるのを恐れる人は、時を待たねばなりません。よい仕事は精神の静けさをもたらします。そして精神の静けさは、ほんとうのセルフの知識をもたらします。ただひたすらセルフであること、宇宙全体を知覚し、それを自らの対象とするほど、抵抗力をもった主体であること、これはつまらないことでしょうか？　私たちを押しつぶそうとする力を邪悪と呼ぼうが何と呼ぼうが、私たちはそれに耐えて、宇宙の観察者になっています。それ以上のことを、私たちは自らに望み得るでしょうか？

＊

まだ物心つかず、自分自身やまわりの世界の意識をもたない子供を見ると、神のような性質がまだ乱されていないという印象を受けます。喜びや苦しみを通して徐々に自己意識が目覚めはじめ、霊が肉体的な覆いに慣れてきて、また自らを「私」と呼び世界の物事を「あれ」と呼びはじめる時、人間の自己がようやく神的存在から完全に分離します。そしてやがてまた、長い苦闘を経て、真実の自己意識の光が、地上のさまざまな姿形の雲を貫いて輝き、私たちをふたたび「天国にふさわしい」幼子のようにするのです。神の中に私たちは生き、動き、存在しています。これが、人間のあらゆる知恵を総計したものです。この人生でそれがわからない人は、別の人生でわかるようになるでしょう。私たちがこの地上で学ぶそのほかのことは、自然の歴史であれ人間の歴史であれ、すべてはただこの目的のためなのです。私たちはそれによって、神の摂理が偏在することを教えられます。また私たちは、人間の精神・霊の歴史についての知識を通して、私たち自身の知識へと導かれ、さらに自然法則の知識を通して、この人生で従うべき人間的自然（ヒューマン・ネイチャー）の理解へと導かれます。

＊

私の考えでは、子供がこの世に生まれてくることは、連続性の法則の侵害ではありません。むしろまさにその原理に基づいて、ここに子供として生まれているセルフの、現在に先立つ過去の存在というものを、受け入れなければなりません。セルフはこの新しい世界の秩序の中に、ただ自己意識のみを携えて、しかもその潜在力がまだ賦活しない眠った状態で、生まれてきます。のちになって、子供が自己意識に目覚める時、彼は実は以前の存在の記憶に目覚めるのです。人が意識するようになるセルフは、その本質において、この世界のみのものではなく、過去の、また未来の世界のものでもあることを、忘れないでください。実際、あらゆる人類がもつ前世（フォーマー・ライフ）の明瞭な記憶は、これによって成り立っているのです。さらになお、以前の存在の不明瞭な記憶というべきものがあります。すなわち、考え事をする人が自らの中に見いだす多くの性格がそれで、それは単に、この世の印象がいわゆる白紙（タブラ・ラサ）に書き込

まれて出来上がるものではありません。私たちは人生を白紙の状態で始めるのではなく、書き込まれた状態（タブラ・プレパラータ）で、または文字が記された白地（レウコマタ）の板として始めるのです。いかなる色彩、性質、才能、気質であれ、あるいは各人に備わった説明不可能ないかなるものも、それはその人自身の現在と前世が連続している結果として、知覚されることでしょう。あるいはおそらく、そのようなものとして思い出されることでしょう。　　（草稿）

＊

では、私たちが死と呼ぶものは、何なのでしょうか？　それは生きている肉体からセルフが分離することです。だとすれば、肉体はセルフが離れたから死ぬのでしょうか、それともセルフは肉体が死んだからそこを離れるのでしょうか？　生命とセルフはどんな関係があるのでしょうか？　束の間この肉体に宿るセルフは、私たちが肉体の生命と呼ぶものと、何か関係があるのでしょうか？　肉体が生きているから、セルフがそれを占有するのでしょうか、あるいはセルフが占有するから肉体は生きているのでしょうか？　難題が起こってくるのは、生命について私たちがもっている概念が曖昧だからです。生命は存在の一つの様態（モード）にすぎません。私たちが生命と呼ぶものがなくても、存在は可能です。生きているということは、消滅し得ることを意味しています。しかし、消滅し得るのは、誰あるいは何でしょうか？　セルフが存在し、それは感覚し得る（センシェント）もので、肉体に宿ることで知覚し得る（パーセプティヴ）ものになります。それは感覚し得るものであるがゆえに、知覚し得るものであり、知覚し得るものであるがゆえに、思考し得る（コンセプティヴ）ものです。最大の難問は、身体化（エンボディメント）というところにあります。あらゆる哲学がばかげてくるのは、ここからです。　　（草稿）

＊

知識はセルフのみに属しています。セルフを私たちが何と呼ぼうと、このセルフのみがエーテルの振動を感受し、照明し、解釈して、それと知るのです。このセルフの存在がなかったとしたら、たとえ神経繊維が一秒間に何百万回振動しようとも、それだけで「赤」という感覚を生み出すことはできなかったでしょう。しかしそのセルフについて、私たちは多く語ることができません。ただ、それが存在するということ、それが知覚するということ、またインドの哲学者たちが付言したように、それが祝福されているということ、つまりそれはそれ自体で完全であり、静寂で永遠であることは言えますが、これ以上のことは何も言えないのです。

悲しみと苦しみ

人はあらゆる苦しみがあることを知っていますが、ときとしてそれは、高まろうとする力をすべて失わせてしまうほど、人を衰弱させることがあります。そのような時、苦しみはなんと神秘的に見えることでしょうか。ときとしてそれは、あたかも苦しみという大きな負債

を、完済せずにはおかないかのように見えます。そしてまた、ほかの人々を自由にするために、ある人々がとくに選ばれて、大きな、非常に大きな額を払わされるかのように見えることもあります。私たちはそれぞれが背負うべき重荷をもっていますが、その重荷によって、ほかの物事はより耐えやすくなるように思われます。それは私たちを押し潰しそうに見えても、強化しているのです。しかし、生きているより死んだほうがましだと思うほど、あらゆる力がまったく衰弱してしまった時、人はどうすればそれに耐えることができるでしょうか。それでもなお、人生は続いていき、人々は何百という小さな物事に心を悩ませ、それが得られないと言っては、悲嘆に暮れるのです。　　（草稿）

＊

あなたがこれまで経験してきた試練は、目的なく送られてきたものではありません。その試練によって人生観が変わったというのであれば、そのような性格の変化はあなたを前進させる以外のものではありません。それによってあなたは、人間の鈍い能力に啓示された真理を、より固く信仰するようになります。真理の上にみだりに加えられた誤謬に、より強い意志をもって耐えられるようになります。そして、この人生は神によって与えられ支えられていること、神の召命があれば私たちは神のために奮闘すべきことを、より深く確信するようになります。　　（草稿）

＊

私たちが、太陽の光だけでなく、雨と嵐もまた必要としていることを、神は知っています。そして神は、その愛と叡知にとって最善と思われる時に、それら両方を私たちに送ってくれます。あらゆるものが崩れ落ちる時、神は私たちを支えてくれます。しかし私たちがまったく押し潰され、一人見捨てられたかのように感じる時、その時こそ、私たちは真実の「友」のほんとうの現前を感じます。その友は、喜びの時も悲しみの時も、私たちを神のもとへ誘い、神を見いだすほんとうの「家」へと私たちを導いてくれます。神の中に、私たちは愛した者たちを見いだし、神とともに、私たちは信じたものを見いだし、神をとおして、私たちはこの地上で望み求めたことを見いだします。失意の心こそは、永続する生命への最も確かな兆しなのです。

＊

私たちは、無限なる愛に従わなければなりません。しかしまた、そのように従うことができること、それに信頼できることを、大いなる祝福と感じなければなりません。無限なる愛は、私たちを四方八方で抱きかかえ、すべての花や虫をとおして私たちに語りかけ、私たちの目にいつも美と完全を現わします。それはけっして争わず、破壊することも浪費することも、欺くことも嘲ることも、けっしてありません。　　（草稿）

＊

これらの試練の時、助けとなり慰めとなるただ一つのことがあります。それは、これらが誰によって送られたかを知ることです。もし、神の意志なしには何事も私たちの身におこり得ないということを知るならば、この人生で最大の恐怖の中にあってすら、人はまったく見捨てられてしまったと、感じることがありません。　　（草稿）

＊

多くの試練や苦悩がいつの日か自分の身に起こるだろうなどと、人はほとんど考えていないようです。人はあたかも、人生が永遠に続くかのように、最も愛する者たちと永遠に別れることがないかのように、生活しています。もしそうでなかったとしたら、人生は堪え難いものになるでしょう。この人生の真実のあり方に対して、人々がほとんど備えていないようなのは、何と驚くべきことでしょうか。　　（草稿）

＊

この世界にこんなに多くの苦しみがあるのは、なぜでしょうか。それが私たちを高めるとは、私には考えられませんが、それでもそこには目的があるはずです。これらは、私たちにとって難しすぎる問題です。私たちは子供のようなものですが、こうした問題を考える時は、子供以上の存在になります。そのような私たちにわかるのは、自然世界であれ道徳世界であれ、神の手になる仕事が見られる所ではみな、それらは私たち人間の尺度をはるかに超えている、ということです。それらはすばらしく完全なので、私たちはあたかも、いかに海が荒れても大丈夫な船に乗っているかのように、安心感を覚えます。私たちが何を信じ、何を望み、何を願おうと、かくも小さな人間の魂すべてを支えてくれる神の意志と叡知は、それらをはるかに超えているのです。　　（草稿）

＊

人生において悲しみは避けがたいものです。しかもなお、それらは堪え難いものです。そしてもし、私たちが悲しみの目的を理解しないならば、その堪え難さはさらにひどいものになることでしょう。人生に悲しみが存在するのは、私たちの真実の生活はここではないこと、この世の波がたとえ穏やかであろうが荒れていようが、私たちは旅の途上にあることを思い出させるためなのです。そして私たちは、この悲しみをとおして、勇気や辛抱や親切など、あらゆる船乗りが学ぶべきことを学び、ついには大いなる力に完全に信頼することを学ぶのです。　　（草稿）

＊

悲しみは人間にとって必要なものであり、また善いものです。すべての喜びは同量の悲しみによって償われねばならないこと、私たちの心をこの世に新たに結びつける靭帯は、いつかふたたびほどかれねばならないこと、そしてその靭帯が強く固く結ばれるほど、それがほどける時の痛みが鋭いこと、こうしたことを人は学ばねばなりません。しかし、それだからといって、私たちはこの世のなにものにも執心せず、この世とは何の関係もないかのように、黙って無関心にそこを通りすぎるべきなのでしょうか？　私たちはそんなことはできませんし、するべきでもありません。自然そのものが、親と子の間に最初の靭帯を結び、その後の人生を通して新たな靭帯を結んでいきます。私たちがここにいるのは、報酬を得るためではなく、穏やかな平和を楽しむためでもなく、また単なる偶然でもなく、むしろ試練を受けるため、進歩するため、あるいは罰を受けるためです。というのは、人間たちの幸福を保障できる唯一の結びつき、つまり人間たちのセルフと神のセルフの結びつきは、人間がこの世に誕生することによって破壊されるか、あるいはすくなくとも曖昧にされるからです。そして私たちの人生の最高の目的は、この靭帯をふたたび発見し、生きている時も死に臨んだ時も、

この意識に永遠に留まることです。神と人との間のこの永遠の結びつきを再発見することが、あらゆる人々にとって真実の宗教になります。

＊

すべての人は自分の魂の中に、失われた希望を葬った墓を持ち運んでいます。その墓は普段、冷たい大理石か、緑の枝で覆われていますが、人は悲しい時、この魂の中の神の土地にただ一人で行きたくなり、そこで涙を流します。しかしそれは、慰めと希望を得てふたたび元気を取り戻し、私たちに委ねられた者たちのもとに帰ってくるためなのです。

＊

人生の悲しみは、あらゆるほかの物事と同様、過ぎ去るものです。そして彼方で私たちを待つ人々の数が多くなればなるほど、あとに残していく人々との別れの辛さは少なくなります。

＊

悲しみとは、過ぎ去った幸福の甘美な思い出です。　　（草稿）

＊

私の前にはつねに、なぜあれは私から取り去られたのだろうかという、古い謎があります。人間の理解力は、これに答えることができません。それでも私は、現にあるあらゆることは、そのあるがままで良く、それが最良であること、私があれこれ願うよりはるかに良いであろうことを確信します。人の目に正しく自然に見えることが、なぜそうでないのかと考える時、人は己れの無知を感じます。しかもなお、それがそうであり得ないことを、人は知っているのです。人はうなだれて、「より高い力（ハイアー・パワー）」の腕に頭を委ねます。その力は「友」であり、「父」であり、「父」以上の存在です。焦らず待っていれば、やがて分かるでしょう。倦まず働いていれば、それに耐えることができるでしょう。　　（草稿）

＊

人々は、悲嘆は苦痛であると思っています。しかしそうではありません。かつて存在し、もはや過ぎ去ったものの思い出に、静かに沈潜すること、そのような悲嘆は喜びであり、慰めであり、祝福です。　　（草稿）

＊

私たちに悲嘆を忘れるように勧め、また楽しい集いに参加するように勧めて、それで私たちを慰めようとする人々がいます。しかしそのような人々は、慰めの何たるかを知らないのです。　　（草稿）

＊

私たちが祈り求めることができるのは、何でしょうか？　特別な恩恵ではなく、ただ神の慈悲のみです。私たちは、自分たちや他人にとって何がよいことなのか、知りません。もし私たちの祈りがすべて叶えられたら、この世はどうなってしまうことでしょうか？　それでも、祈るのは良いことです。それはつまり、あらゆる喜びと悲しみの中にあって、推量することはできずとも、愛しそして信頼することができる、かの知られざる神とともに、生きることだからです。人間の悲惨は、内なるものも外なるものも、たしかに重大な問題ですが、

それでも人は自分の人生経験から、最も重い重荷でさえ、まさしく祝福であったと知っています。もし魂が実をつけようとするならば、それは鋤で耕されねばなりません。
（草稿）

＊

私たちのあらゆる幸福が、終生続く保証とは、何でしょうか？　私たちはまったく神の慈悲のもとにあるのではないでしょうか？　私たちを取り囲む神の現前と叡知と愛とを、知ることも見ることも感じることもなく、たった一日でも生きるとしたら、それは恐ろしいことではないでしょうか？　しかし私たちが一度それを感じると、死でさえ、私たちの最愛の者の死でさえ、また私たちを最も愛してくれる者の死でさえも、その恐怖はほとんど消えてしまいます。それは大いなる統一体の一部か一片であり、私たちはこの世ではその小片しか見ることができません。私たちにはこの世と彼方をつなぐ橋の最初のアーチしか見えませんが、その統一体は、もしその死というものがなかったら、ただの茶番になったことでしょう。私があなたに、人間の技術が生命を永遠に延長することができないのはいいことだ、というのは、こうした理由からです。そしてこの点では、私たちの感情は一致していると思います。私は言葉にして語るよりも、もっとあなたに共感してきました。私たちは異なった訓練を受けてきましたが、しかし私たちは皆同じ良い目標に向かって育てられてきました。そして私には、あなたが経験してきたような苦しみは、豊かな収穫を確実にするための、土壌の深い掘り起こしのように思われます。

＊

この世界には、大きな秘密の友愛団体のようなものがあり、その成員たちはお互いに、目に見える外見上の印なしに、相手を容易に認識します。それはいわば服喪者（モーナー）たちの団体です。この友愛団体の成員たちは、かならずしも喪服を着る必要はありません。彼らは、喜んでいる人々とともに、喜ぶことさえできます。彼らはまた、他人が見ている時には、ほとんど嘆いたり泣いたりしません。それでも彼らは、一言も発しなくても、お互いを認識し、理解することができます。彼らは、険しい山に登る時、ほかの疲れた放浪者に追い付いたり、休んだり、また黙々と登りはじめたりする、疲れた放浪者のようです。彼らは皆、高い所で一緒に荘厳な入日を見ることを望んでいます。彼らの表情には、やわらかな月光が映っています。彼らが話す時、それは暖かい春の雨ののち、海辺の森の葉を吹くそよ風の囁きのように感じられます。そして、陽光が露の雫を何千という色に輝かせ、緑の草から飲み干してしまう時、それはあたかも、天からの光が服喪者の涙を通してそれらを照らし出し、そこにやさしく口付けして吸い取るかのようです。遅かれ早かれ、ほとんどすべての人がこの友愛団体に入ります。そこに早く入った人ほど、幸運だと見なされることでしょう。なぜなら、人間たちが自分のものと呼んでいるものはすべて、短い間その人に貸しあたえられているにすぎないということを、その人たちは手遅れにならない内に学ぶからです。古い壁に蔦が深くしっかりと付着することがありますが、その人たちの愛着は、地上の幸福にそれほど強くしがみつかずにすむのです。

＊

私たちは神聖なるものを知ることはできず、名付けることもできません。また、それが自然や人間生活にどう顕現するかについても、私たちは理解することはできません。私たちは、なぜ苦しみや罪があるのかと問いますが、その問いに答えることはできません。私たちに言えるのはただ、それはそう意図されている、ということだけです。ただ、もし悪の力が人間に与えられていなかったら、私たちの人生はどうなっていただろうか、と単純に想像してみることによって、人間の理解力は多少とも高まるかもしれません。もしそうなった場合、私たち人類は、善という言葉で何を意味すべきか分からなかっただろうと、私は思います。私たちは空の鳥のようであったでしょう。たしかに、より幸福かもしれませんが、けっしてより良くはありません。あるいは、もしも苦しみがつねに悪人のためだけにあったのならば、私たちは全員が、非常に狡猾な天使になったことでしょう。しばしば解決不可能にみえる困難に会った時、私は次のように言ってみます。これが起こらなかったら、いったいどうなっていただろうか、見てみよう、と。それでも私は、この地上にはあらゆる理解を超えた苦しみが何かしら存在することを、告白せねばなりません。それは、キリスト教の最も真実の愛と慈善によってすら、除去することも軽減することもできないように思われます。それが私たちに教えるのは、ただ一つのことです。つまり人間は盲目であるということ、闇と恐怖と絶望を追い払う夜明けの時にはもっている信仰を、夜の闇の中では失ってしまうということです。今、共産主義と呼ばれるものによってすら、多くのことが為され得るのは、疑いありません。それは古い時代においては、キリスト教と呼ばれていたものによって為されたのです。それでも、この世界がふたたび真にキリスト教的になり得るかどうか、疑わしいかもしれません。私は自分自身がクリスチャンであるとは、あえて言いません。私はこれまでの人生で、クリスチャンという名に値する人に、ほとんど会ったことがありません。それでも私は、最善を尽くしましょうと言いたいのです。その最善すら、神の前にはまったく無であることをつねに承知しつつ、私たちは最善を尽くしましょう。

魂

（人間の中の）不死の要素の名は、無料の贈り物として人間に与えられたものではありません。人間はその名を、神の名と同じように、額に汗して獲得せねばなりませんでした。人間の魂（ソウル）は不死だと信じると言う前に、まず人間は自らの中に魂があることを発見せねばなりませんでした。そのためには、アニマやディヴァといった言葉を作るのと同じほど、大きな努力が必要でした。息を意味するアニマは、それによって人間の中の無限なるものの意味を負わされ、明るいことを意味するディヴァは、それによって自然の中の無限なるものの意味を負わされました。ちょうどそのような努力が必要だったのです。

＊

「体」と「魂」という二つの言葉を、私たちはまったく聞き慣れているので、人間がいかにして体や魂について語り始めたのか、などと問うことは、ほとんど子供じみたことに思われます。しかし魂という言葉で、人は何を意味しているのでしょうか？　私たち自身は、魂という言葉で何を意味しているのでしょうか？　魂という言葉に、私たちが盛り込んでいる多くの意味を、考えてみてください。私たちが魂というとき、生きている魂を意味しているかもしれません。あるいは感覚する魂を、または善なり悪の情熱の座を、ないしは思考の器官を、そして最後に、人間の中の不死の要素を意味しているかもしれません。私たちが問うべき問題は、人類はいかにして魂という言葉に到達したか、ではありません。そうではなくて、人類はいかにして、体とは異なった何かについて語り始めるようになったか、ということです。

＊

魂の発見、それに魂と名付ける最初の試み、これらは地上のどこにおいても、物質的な事実の単純な観察から始まりました。人類の最も抽象的で霊的な言葉の全財産は、ごくわずかの物質的あるいは具体的な用語から作られています。それは、こうしたことを学び教える機会が、そう頻繁にはないからです。

＊

私たちの見るところ、魂の発見へといたる道は、神々の発見へといたる道と同じくらいの明瞭さで、人間に示されたものです。「息」の名を提案したのは、まさに息でしたが、それというのも、人が死ぬ時、息はほとんど目に見える様子で身体を離れるからです。しかるのちに、私たちの中にあって息する何ものか、生きて、知覚して、意志して、記憶して、思考する何ものかがいる、という考えが出てきました。最初に来たのは、物質的な息という言葉でした。この気体状の息という言葉にも、まだ物質的な要素が残っていると感じられました。それをはぎ取った時に、漠然とした気体状の概念が、まず残りました。それが、今私たちが魂と呼んでいるものです。

＊

古代世界では死者の霊の崇拝が、さまざまな形式をとって広まっていました。それでも、そのような崇拝に値する何かが人間の中にあるという考えは、人間の精神にはあまりなじみのないものでした。やがて死者の魂は高みへ高みへと上げられ、ついには人間の精神の中にある最高の段階、すなわち、言葉の古代的な意味での神的存在にまで達しました。

＊

不可視の世界と可視的世界を結びつけるという問題は、三つの主な位相のもと現われました。一つめは創造の問題として、換言すれば、不可視の第一原因がいかにして可視的事物と接触し、そこに形と意味を与えることができたのか、という問題でした。二つめは、神と個々の魂との関係でした。三つめは、可視的世界から不可視の世界への魂の帰還、換言すれば、死すべき体という牢獄から天上の楽園での自由への帰還、という問題でした。物質的な体に住まう個々の魂は、創造された世界の一部を成しています。したがって、魂の神への帰還という問題は、神による魂の創造、あるいは神からの魂の流出の問題と、密接に関連しているのです。

＊

地上と天とが本源的に一つであること、人間的な性質と神的な性質が本源的に一つであることが、これらのことがいったｎ発見されたならば、魂の神への帰還という問題は、一つの新たな性格を帯びます。それはもはや、天への昇天とか、神の玉座への接近とか、恍惚の中に見る神のヴィジョンとか、天の楽園における生活とか、そういう問題ではありません。神のヴィジョンとは、むしろ魂の中に神的な要素があること、神的な性質と人間的な性質が本質的に一致するということの知識です。人間の内にある神的なもの、したがって不死のものにとって、そもそも死はあり得ないことですから、不死性はもはやことさら主張されることはありません。神的な霊が自らの内に住まうと感じる人々には、永遠の生命があり、永遠の平和があります。かくして彼らは、神の子となったのです。

＊

幼児期にあって、魂が人体に適応するのが困難であったろうこと、まったく自由にふるまえるようになるまで長い年月がかかったであろうことは、疑いないことです。それからしばらくは万事うまく運び、魂は奇妙な衣裳の中に閉じこめられていることに、ほとんど気付きません。しかし、体がだんだん弱ってきて、すべてが魂の望む通りに行かなくなり、あちこち無理がかかるようになると、魂は外面的な自由と動きをすべて失うように思われます。人はその時、私たちは去りたがっていること、死が真実の解放であることを、よく理解することができます。ふさわしい時がいつかをいちばんよく知っているのは、いつも神です。

＊

思い出してほしいのですが、今の人生の前とまでは言わずとも、私たちの幼児期の最初の数年ですら、魂とはいったい何だったのか、私たちは知りません。それでも私たちは、まことにしかるべき証拠によって、魂と呼ばれるものが、誕生の瞬間から存在したことを、信じています。であれば、いったいいかなる根拠によって、誕生の前からそうであったということを疑わねばならないのでしょうか？　魂の始まりは誕生日だと仮定することは、魂の終わりは死ぬ時だと主張することと同じことになります。始まりがあるものは、終わりがあるからです。では、もしほかに知る手段がない時、私たちが類推の助けを借りてよいならば、次のように言うことはできないでしょうか？　魂は此処（ここ）であった通りに、彼処（かしこ）でもそのようであるだろう、そして魂は、此処で起き上がった時とまったく同じように、この地上の情況設定を引き継いで、ふたたび起き上がるであろう、と。これは三段論法ではなく、あくまで類推なのですが、私たちが住んでいるような宇宙では、もしそれと逆の証明がない場合、類推は何らかの重要性を主張することができます。

＊

ここに一つの質問があり、それはおそらく、あらゆる人間が自らの心に問うてきたものです。すなわち、「定義上、魂が死ぬことができないとすれば、魂はつねにそのままなのだろうか、魂は自らをそれと知るのだろうか、また魂は、かつて知っていたほかの人々をそれと知るのだろうか？」という質問です。というのは、もし魂が自らを思い出すことなく、また自らばかりか、この地上で知り合い愛した人々を、それと認めることができなとすれば、しばしば言われるとおり、来世（ネクスト・ライフ）は生きるに値しないであろうからです。ここで何らかの答え

を出し得るのは、ただ類推だけです。「かつてあった通りに、彼処でもそのようであるだろう」というのは、それと逆の証拠が何もない場合は、軽々しく扱うことができない議論です。ここにいる私たちの魂は、前世（フォーマー・イグジステンス）のさまざまな情況や、そこでの自らの記憶を、何ももたずに生まれてきた、と言えるかもしれません。しかし、その魂の中には、自らの永遠性の意識があります。そして魂にとって、自らの始まりという概念は、その終わりという概念と同様、考えるのが不可能なことです。しかし魂同士が、この世で出会って愛し合ったように、彼処でもふたたび会うことになっているとしても、もしかつて出会って愛し合ったということを知らないとすれば、来世は、この地上の人生とはまったく別ものになってしまうでしょう。もしそうなら、これはまったく耐えられないこと、生きるに値しないことではないでしょうか？

＊

魂が神との合一（ユニオン）にいったん到達した時、あるいはむしろ、魂が神の永遠の現前の中に生きる時、悪はほとんど不可能事になります。悪へと陥りがちな性格は人間の常ですが、多くの悪事は闇の中でのみ可能だからです。ほかの人間の目の前では、とりわけ愛する者の目の前では、悪事は一瞬にして不可能事となります。まして、まことに愛すべきほんとうの神、真実の神秘家が感じたような、単なる言葉ではなく一つの事実としてのまことの神の現前の中においては、その抑止力はいかばかりでしょう。魂と神の間を隔てるヴェールが何もないならば、神の現実の現前を感じる人にとって、悪い思い、悪い言葉、悪い行為は、ただ単純に不可能なのです。彼はまた、この世はいかにして創造されたのかとか、悪はいかにしてこの世に入ってきたのかといった、そのような質問に煩わされることは、もはやなくなります。彼は、自らの魂を抱きとる神の愛に、充足しているからです。彼は望み得るすべてを所有しています。彼の全人生は、キリストを通して、神にかくまわれています。死は勝利によって飲み込まれます。死すべきものが、不死のものになっています。死も生も、現在あるものもやがて来たるべきものも、彼の魂を神の愛から分かつことはできません。

神智学

神智学（テオソフィ）というこの尊敬すべき名前は、初期のキリスト教思想家の間では、人間の心が到達し得る範囲での、神の最高の概念を表現するものとして、よく知られていました。しかしそれは最近、あまりに誤解されてしまいました。今こそその正しい意味を回復しなければなりません。人が神智学者を自称できるのは、オカルト科学や黒魔術を一切信じていない場合のみであるということを、断固として知らねばならないのです。

＊

仏教の中には、秘教的(エソテリック)なものは何もありません。仏教はむしろ、秘教とは正反対のものです。それは多くの人々のための宗教、貧しい人々、苦しみにあえぐ人々、ひどい扱いを受けた人々のための宗教です。ブッダは、何かを秘密にしておくという考えそのものに、抗議しています。そのたぐいの秘教的教えは、むしろバラモン教の中に多く見られます。カーストという制度がありましたが、それは少なくともシュードラ階級からは、多くの宗教的な権利を奪いました。しかしバラモン教の中にすら、サストラ[ヒンドゥー教の学問的書籍]の秘教的な解釈のようなものは何もなかった、と私はあえて言いたいと思います。サストラはたった一つの意味しかもっていません。そしてそれにふさわしい教育を受けてきた人は、誰でもそれを理解することができました。人工的な詩がいくつかあり、それらは二つの解釈を受け入れるかのように書かれています。それらはたしかに素晴らしいものですが、哲学的な教義とは何の関係もありません。またサンスクリットの中にはエロティックな詩があり、それらは魂と神との間の愛と合一を祝福するもの、と説明されています。しかしこれらは皆、完全に周知のことであり、そこには何の不可解なこともありません。

真理

求められるのは、証拠を選別する力と、真理への単純な愛です。最も大事だと思う信念に対して、私たちは価値を付与します。それらの信念と価値がいかなるものであれ、何かを一見しただけで、これがいちばん大事だと、確信できるものがあります。それは、真理への完全な信頼です。いったんそのように知ったなら、この順位は揺るぎません。

＊

ある主題に対するほんとうの敬意とは、それが私たちにとって大事だからといって、これは自由で正直な研究にふさわしくない、と宣言することではありません。まったく逆です。ほんとうの敬意というものは、いかに神聖であろうが、いかに私たちに親しいものであろうが、それらに完全な信頼をもって、恐れも選り好みもなく、やさしさと愛をもって、そして何よりも、怯むことなく妥協することなき真理への忠誠心をもって、あらゆる主題を扱うときに、現われるものなです。

＊

私たちが最も価値ある真理と確信するものが、何百万という人々によっても共有され、支持されている、ということを見いだしたとしましょう。その時、私たちは何を失うでしょうか？　古代の哲学者たちは、彼らがもっている神への信仰が、人類全体の合意で支持されることを、熱心に願いました。いかなる人種といえど、神的な何かへの信仰をもたないほど堕落した野蛮な人種はいない、ということを証明するため、彼らは最大限の努力を傾けました。これとは逆に、近代の神学者たちの中には、自分たちの宗教以外のあらゆる宗教には、純粋

で真実な、それどころかおよそ神という概念そのものすら、あるとは認めたがらない人々がいます。真理とは普く行き渡るもので、止まることがないということを、彼らは忘れているのです。神の概念は、キリスト教や非キリスト教の国々において、悪用されたり俗化されたりして、恐ろしい働きをしてきたかもしれません。しかし、この神という真実の概念が、人間存在の能力の範囲内にあること、それはまた人類の共有財産であること、これらを否定する思想ほど、真実の宗教にとって危険な異端は、ほかにないのです。

＊

比較神学が私たちに何か教えてくれたものがあるとすれば、それは、あらゆる宗教の中に真実の共通の基盤のようなものがある、ということです。その基盤は、一つの国や普通に言われる奇跡に限定されない、ある啓示に由来しています。またそれぞれの教義の間や、さらにはさまざまな宗教の外面的な装飾の間にすら、詳細にわたる一致が見られますが、それらは必ずしも、ほかから借用して偽装したものと考える必要はなく、別のもっと自然な理由によって、つまり宗教の共通の基盤という考えによって、説明できるのです。

＊

真実より高く、より良いものが、何かあり得るでしょうか？　真実への疑いなき信頼を抜きにして、どんな種類の宗教が可能でしょうか？　真実のために、真実のためだけに、真実を信ずる、ということを学ばなかった人、こういう人は、信じるとはどういうことかが、わかりません。

＊

リアルなものであれ想像上のものであれ、もし可能ならば、危険に対して防衛するのは、きわめて正しいことです。しかしそれが不可能になった時、正しいのは敵に勇敢に立ち向かうことです。敵と見えた者が、変装した友だったとわかる、ということが実にしばしば起こります。ひたすら正直にさえしていれば、私たちがはなはだしく間違うことはあり得ません。しかし、いくつかのことに関してそれほど正直でなかったとしたら、やがて多くのことに関して不正直になっていくでしょう。宗教について教える時、自然宗教について教える時ですら、私たちは右や左を向いてはならず、あらゆる事実を正面からまっすぐに見なければなりません。そしてそれらが事実かどうかを見極め、さらにそれが何を意味するか、見いださねばなりません。

＊

たんに霊的・精神的なだけのものからは、何の助けも慰めも引き出すことはできない、という人々がいます。たんに霊的・精神的なだけという、そのだけが何を意味するのか、もし意味があり得るとしてですが、考えてみてください。私たちは光について、それはただの光である、自分たちが欲しいのは掴むことのできる影である、と言うかもしれません。私たちが影だけを知っていて、影を投げかける光を知らないかぎり、影だけがリアルであり、光はそうではありません。しかしいったん私たちが頭を回して光を見ると、今度は光だけがリアルで本質的であり、影はそうではないのです。

＊

私たちはウパニシャッドの中に、あらゆる時代の人間の思想を占有してきたもの、今も占有しているもの、これからもずっと占有するであろうもの、そのような要素を見いだします。それは真理の追求であり、束の間の現象のむこうに横たわる永遠なるものを発見しようとする願望であり、人間の心に未来の生活の保証を見いだそうとする熱望であり、かつて人間的なものと神的なものを束ねていた靭帯をふたたび結び、神と人の間をほんとうの償いによってふたたび結ぼうとする試みです。

＊

私たちは長い年月にわたって労苦してきましたし、多くの疑問に悩まされてきました。これらすべては、いつになったら終わるのでしょうか？　私たちはふたたびまた、小さな子供たちのごとく単純になることを、学ばねばなりません。それが、私たちがそうなるべき権利をもっている状態のすべてなのです。なぜならこの人生は、私たちの魂の幼児期となるべく定められているからであり、私たちがその定めにしたがおうと努めれば努めるだけ、この人生は私たちにとって、ますます良いものとなるからです。私たちの精神の力を、大いなる自由と真理への愛をもって、活用しましょう。それでも私たちは、ニュートンが言ったように、波打ち際で遊ぶ子供のようなものであることを、けっして忘れないようにしましょう。大いなる真理の海が、その秘密を明かされないまま、私たちの前に広がっているのです。

＊

私は、自分と異なった人と会うことほど、好きなことはありません。その人はつねに、私に何かを与えてくれるからであり、私はそれに感謝を覚えます。お互いに異なった二人が相互理解に達することはない、と想像する人が多いようですが、私はまったくそのように絶望的になることはありません。……すべての人は同じ真理への愛から出発し、同じ情況から影響を受けているのに、なぜ人々は異なっているのでしょうか？　もちろん、一人が知っていてよく勉強している事実を、ほかの人が知らないからという理由で、二人が異なっていることもしばしばです。……しかし最も多くの場合、人々がそれぞれの言葉を杜撰に用いるから、またさまざまな主題を混ぜてしまって、一つ一つ順に扱うことをしないから、人々は異なって見えるのです。

神の意志

全人生を通じて、私は一つのレッスンを学んできました。それは、神の意志によらなければ、何事も私たちにはおこり得ない、ということです。自分の意志を神の意志に従わせることを私たちが学びさえすれば、人生に失望というものはあり得ません。ほんのしばらく待ちましょう。自分たちの目を、神と永遠とに向けている人々にとって、最も長い人生ですらほ

んの一瞬にすぎません。ですから、信仰と希望と慈悲をもって、待つことにしましょう。この三つは永遠に留まりますが、この中で最も偉大なものは、慈悲です。

＊

私たちの身に起こることが何であれ、それは私たちにとって最善のことです。たとえ、すぐにはそのことが理解できず、受け入れることができなくても。　　（草稿）

＊

間違いなくすべては秩序づけられ、しかも私たちのほんとうの利益になるよう秩序づけられています。いかに小さく見える出来事であっても、もし何事かが神の意志なしに私たちの身に起こる、などと考えたならば、恐ろしいことでしょう。偶然とか無意味な出来事がどこかにあるという考えを受け入れると、神の中のおける私たちの人生の全体は、粉々に砕けます。神の中に休らい、あらゆることのために神を讃えることがなければ、私たちは自分がどこにいるのか分かりません。神が私たちに喜びを送ろうが、悲しみを送ろうが、私たちは神に信頼しなければなりません。神が喜びを送ってくれた時、よく注意しましょう。幸福はしばしば、私たちを試みるために送られるからです。その幸福は、私たちがそれに値することを証明するものでは、けっしてありません。同様に、悲しみがつねに神の不機嫌の印というわけではありません。そうではなく、むしろそれはしばしば、神の愛と同情の印であることが多いのです。私たちは皆、自分たちの人生を、できるかぎりよく解釈しなければなりません。しかもなお、その最も深い目的は、キリストを通して私たちを神に連れ戻すことであると、知っていなければなりません。この地上の人生において、死は一つの条件です。それによって、被造物は創造者のもとへ帰されます。被造物は死を目にして嘆きますが、神は最後の時においても私たちを見捨てないでしょう。神はこの地上の私たち人生の最初の一呼吸から、私たちを見捨てずにきました。神がそう望むならば、私たちはこの地上で、来たるべき長い幸せな年月の間、神に仕えるために生きるでしょう。私たちの内の誰かが取り去られるとしても、神のみ名は誉むべきなのです。私たちは死の影のものに生きています。しかしその影が、私たちの明るい人生を暗くするようであってはなりまん。それは父なる神の手の影であり、のちに来るより高いより明るい人生の前兆なのです。天なる我らの父は、いかなる夫が妻を愛するより、いかなる母が子を愛するよりも、私たちをもっと愛します。神の手が私たちを傷つけることなど、あり得ません。ですから、いつも希望を持ち、神に信頼していましょう。

＊

私たちの人生は、何が私たちにとって最善かを知っている、父なる神の手の中にあります。死は被造物にとって苦痛に満ちたものですが、しかし神の中には、何の死もなく、何の死にゆくものもありません。死にゆくことは生に属しています。そしてそれは、より完全な世界への、通り道にすぎないのです。神が私たちを呼ぶ時、私たちは皆そこへ入っていくことになります。ある人の幸せが完璧であるとき、死という考えはその人を恐れさせます。しかしそれさえも、すべてはあるがままで最善の状態であると感じることによって、また神が父や母よりも私たちをもっと愛してくれると信じることによって、克服されます。私たちが生きているのは、すばらしい世界です。しかし、それが美しくほんとうに我が家のようであるの

は、ただ神がいつも近くにいると感じる時、そして神により頼み、神の愛に信頼する時のみです。……別れの時が来た時、愛はけっして滅びないこと、この人生で私たちを固く結びつけた神は、もはや別れがこない所においても、私たちを一緒にさせてくれるであろうことを、私たちは知っています。　　（草稿）

不思議

不思議（ワンダー）さの感情よりも愉快なものは、ほとんどありません。私たちは皆、幼児期や青少年期、また成人期においても、それを経験しています。ですから私たちは、老年期になってもこの心の傾向はまったくなくならないだろうと、期待していいだろうと思います。この不思議という感情を注意深く分析すれば、それが二つの要素から成っているのがわかるでしょう。不思議という言葉で私たちが意味しているのは、ただ困惑（スタートル）しているとか呆然（スタン）としているということだけではありません。これらは単に、不思議さの受動的な要素と呼ぶべきものです。私たちが「不思議に思う」と言う時、私たちは不意を突かれたということを告白しているのですが、しかしそこには、驚きの感情にまざって秘かな満足感があります。それは一種の希望、というよりもほとんど確信です。遅かれ早かれその不思議さは止むだろう、そして私たちの感覚や精神は回復して、これらの新奇な表現や経験を解決しようと取り組むだろう、そしてそれらを把握し、理解し、最後にはそれらに勝利するだろうと、私たちは確信しているのです。実際私たちは、生物についてであれ、無生物についてであれ、自然の謎を不思議に思いますが、それらすべてには答えがあることを固く確信しています。たとえ私たち自身がその答えを発見できなくても、誰かが発見するでしょうから。不思議さの感情が無知から起こるのは、疑いないことです。しかしそれは特別な無知であり、いわば肥沃な無知というべきものです。人類の科学の歴史を大まかにふりかえると、そこには、あらゆる人間知を産む母となった一つの無知が、見出だされることでしょう。

言葉

人が「ただの言葉」と呼んでいるものは、ほんとうは最も苛酷な知的闘争の記念碑、人間の知性による最も偉大な勝利の凱旋門なのです。人間が体や魂、父や母を表わす名前を作った時、その時はじめて、人類史における最初の技術が始まったのです。正義と誤謬、神と人

という名前ができるまで、人間社会には、その名前に値するものは存在し得ませんでした。新しい言葉は、すべて一つの発見です。そしてこれら初期の発見は、もし正当に理解されるならば、エジプトやバビロンの王たちによる偉大な征服劇よりも、私たちにとってはるかに重要なのです。語源学者よりもすばらしい宮殿を発掘した人は、ほかには誰もいません。彼らこそ最も偉大な探険者です。あらゆる言葉は、人間の思考の宮殿です。そして私たちは、科学的な語源研究の中に、これら古代の思考を現代によみがえらせる呪文を持っているのです。

＊

概念は言葉なしに存在できるでしょうか？　絶対に不可能です。考え得るあらゆる反論に答えるためには、言葉であれ他の何であれ、記号なしにはどんな概念も存在し得ない、と言ったほうがいいかもしれません。では、概念がまず存在して、記号はあとから来るのか、と聞かれたら、私は「いいえ」と答えるべきでしょう。それら二つは、同時発生的なのです。しかし厳密な論理から言えば、まず最初に、概念の条件である言葉が来る、と言えるでしょう。時間がたつと言葉は失われることがあるかもしれません。そして、私たちは、概念を産み出した古い言葉を思い出そうとするかもしれません。概念が先でそのあとに言葉が来ると想像するようになるのは、そのような時です。このことを明瞭に理解するのがいかに難しいか、私は承知しています。私たちは、言葉なしで考えることに非常に慣れていますので、概念による思考が、もともと何らかの記号なしには不可能であるという事実を、ほとんど実感することができないのです。

仕事

もしあなたが、自分の全人生を犠牲にする覚悟があるような仕事を見いだしたならば、そしてまた、もし自分に自信をもつことができ、他人もあなたを信頼しているならば、遅かれ早かれ、なされるべき仕事がなされることになるでしょう。

＊

いわゆる人生の楽しみとは、何と薄っぺらなものでしょう。長続きするものが、そこにはいかにわずかしかないことでしょう。自分の仕事に喜びをもつことが生活であり、その喜びこそが私たちを支えつづけます。その道はときとして険しく、人を疲れさせます。下り坂であるよりは、上り坂のように見えるかもしれません。それでもその道は、下り坂なのです。（草稿）

＊

仕事が嫌だというのは、義務が嫌だということを言い換えているにすぎません。それは、社会をまとめあげている取り決めを軽視すること、神の命令を軽視することです。苦い薬が

やがて好きになるように、仕事には、ときとともに嫌いでなくなってくるという報酬が備わっています。それは疑いないことですが、その保証の対象になるのは、ただ正直になされた仕事のみです。　　（草稿）

＊

仕事は悲しみを癒す最善のものです。悲嘆や失意の時は、一所懸命に仕事をしてみることです。けっして裏切られることはありません。

＊

ものごとを気にかける人は、死後の名声やあるいは死後の非難も気にかけますが、そうするには及びません。嫌なことはその日味わうだけで十分です。私たちの同時代人こそが、正しい判定者です。優れた大学や学界で議事に投票すべきは、私たちの同僚です。私たちが行なったささやかな仕事は、世間の人々が気づかないような、もっと重大な困難な条件下で為されたものです。その困難を知っている同僚が、全体としてまんざら不満でもないと評価したのならば、遠い将来の人々の評価を気にかける必要がどこにあるでしょうか？

＊

あなたの心のすべて、愛のすべてを、仕事に注ぎなさい。生半可（なまはんか）な気持ちで為された仕事は、何もしないよりも、実際にはるかに悪いものです。

＊

世界の最善の仕事の多くは、名前が知られていない人々によって為されるものです。彼らは、人生が与え得る最大の至福が、仕事であるような人々です。彼らは、人類の知識を拡大することによって、正直と真理という人類のめざす最終的な勝利に、彼らなりのやり方で貢献した、という意識以上の報酬を求めません。

＊

（名声の）真実の不死性とは、その人によって為された仕事の不死性です。その仕事は何ものもこれを無にすることはできません。それは永遠に生きつづけ、働きつづけ、成長しつづけます。先祖や恩人の名前を記憶し、それを誉め讃えることは、私たち自身にとっては、たしかに良いことです。しかし彼らにとって最高の報酬とは、名声を得るという希望ではなく、自らへの自信、自らの仕事への自信、ほんとうに善なるものは滅びないという信仰、正義と理性が最後には世を覆うという信仰です。

＊

最も深い関心をもつ一つの主題に、全人生の時間と労力を捧げることを許されるのは、ほんの少数の学者のみです。それ以外の私たちは皆、学問と真理のために働く、静かな小部屋を持つことを希望できるのは、人生の戦いを戦ったあとのことです。

＊

自分の言いたい最後の一言を、言うことができた著者が、かつていたでしょうか？　また自分の作品の最後の頁に「終わり（フィニ）」と書く前に、目を閉じないですんだ人がいたでしょうか？

世界

この世界(ワールド)をキリスト教的に説明すれば、次のようなこと以外に何もありません。つまり、神がそれを考え、そう命じたということ、そして人間は、生きるにつけ考えるにつけ、神の考えに従う、ということです。繰り返しになりますが、この世界に関する私たちの知識と認識は、因果律のもとで思考を客観的なリアリティに変換する、それ以外のものではないということを、私たちは忘れてはなりません。考えるにつけ生きるにつけ、神にひたすら依存することで、イエスはあのような存在になり得ました。私たちも同じように努めさえすれば同じように、つまりなるべくして神の子になり得るのです。

＊

私はこの世界に、秩序や法則や理性、あるいはロゴスがあると、認めざるを得ません。しかし、事後に起こった(エクス・ポスト)出来事だけによっては、つまり適者生存だとか、自然淘汰だとか、その他さまざまに言われているような出来事だけでは、そうした先験性を説明することは、私にはできません。

＊

世界に一つの秩序があると信じるとは、どういうことであったか、そのことだけでも考えてみてください。それは初めは、たとえば太陽はその軌道を絶対に踏み外さない、というようなものにすぎなかったかもしれません。しかしそれがまさに、カオスとコスモスの間を分け、盲目な偶発事と、知り得るしたがって知的な摂理の間を分ける、違いだったのです。どれほど多くの人間が、次のような境遇に苦しんでいることでしょう。ほかのすべてが彼らを見捨てています。彼らは幼児期に培われた確信から離れてしまいました。彼らがもっていた人間への信仰は汚され、あらゆる利己的なもの、下劣なもの、忌まわしいものが、勝ち誇っています。そして彼らに、真理とか正義とか無垢とかは、すくなくともこの世ではもはやそれを守る戦いは価値がないのだと説いて、その基盤を放棄させようとしているのです。しかし私は言いたいのです。その一方で、どれほど多くの人間が、世界の秩序に思いを凝らすことで、最後の平和と慰めを見いだしていることでしょう。それは星々の不変の運行に顕現しているかもしれません。また、最も小さな忘れな草の花びらや雄しべや雌しべの数の不変に啓示されているかもしれません。どれほど多くの人々が、ほかのすべてから見捨てられた時、このコスモス、この美しい自然法則に属していることを、信頼すべき何か、信仰すべき何か、少なくとも頼りにすべき何かと、感じてきたことでしょう。世界の法則や秩序のこのような知覚は、現在の私たちにとっては、まことに些細なことだと思われるかもしれません。しかし、古代のこの世界の住人たちにとっては、自分たちの存在を支えるものがほかにほとんどなかったので、それがすべてでした。なぜなら、それがいったん知覚され理解されると、彼らはそれをけっして奪われることがなかったからです。

＊

私たちはあらゆるものに意味を見るよう、学ばねばなりません。私たちがいつも原因と結果を見ることができる、というわけではありません。それは確かにそうですし、それができないのは良いことなのです。私たちがいつも相応の報いを受けるわけではない、というのは

まったくほんとうです。それでも私たちは、相応の報いがある、と信じるべきなのです。私たちがただ気まぐれな事実を知っているだけならば、世界という織物全体が壊されてしまうでしょう。そして全世界には美徳も悪徳もなくなり、ただ打算だけが残るでしょう。私たちは、機関車がやってきて私たちを轢いてしまうとわかっているとき、この世によって布かれたレールを避けて通るはずです。このようにして、世界は形を保っています。それ以外のあり方はできないのです。

＊

花には美しさと神秘と神聖さがあると、私には思われます。それがどこから来てどこへ行くのか、誰も知りませんが、それが来ては去るのを見て、これ以上のどんな奇跡を私たちは望むのかと、私は問いたくなります。四方八方から囲まれ支えられているこの世界のありかた以上に、より良くより美しく、より秩序あるどのような世界に属することを、私たちは願い得るでしょうか？　どこに不備や欠点があるでしょうか？　私たちの中に不備があるのでなければ、私たちは何を恐れる必要があるでしょうか。周囲のあらゆる美と秩序と叡知を描いた「著者」に信頼しさえすれば、私たちはそこから、あらゆる祝福やその他のことを、享受することができたでしょうに、その賜物を見ようとしないのです。この世界で幸福でないというのは、まったく罪なことです。人間たちがお互いの幸せのために共に働きさえすれば、そこにある悲惨の多くは、それを作り出した当の人間の手によって、ふたたび取り除くことができるでしょう。

キリスト教

キリスト教がキリスト教であるのは、次のような一つの根本的な真実によってです。つまり、神が人間の父であるからには、人間はたんに詩的で比喩的な意味においてではなく、本来的に神の子であること、そして今は利己心と罪によって神から分離しているけれども、神のまさに本質に与る存在である、ということです。神聖なるものと人間的なるものとの間に、このような本性の同一性があるというのは、神の概念を人間のレヴェルに近づけ低めているのではありません。まったく逆に、人間の古い概念をあるべき理想に近づけ高めているのです。神と人間の真の関係は、多くの預言者や詩人によってぼんやりと予見されてきました。しかしキリストは、その関係を明快で単純な言葉で宣言した最初の人でした。彼は自らを神の子と呼びました。言葉のまったき意味において、彼こそが神の第一の子でした。しかし彼は、けっして自らを父と等しいものとはしませんでした。父の中で生きて動き、存在を保っているからです。人間という言葉の新たな真の意味において、彼は人間でした。また神という言葉の新たな真の意味において、彼は神でした。私の考えでは、人間は神聖なるものに与ることなしには、何者でもありません。

＊

真のキリスト教は、私たちの信仰の中にではなく、私たちの愛の中に、つまり神への愛と、その神への愛に基盤をおいた人間への愛の中に、生命をもっています。

＊

キリスト教徒は、世界の諸宗教を軽蔑していますが、しかしそれらの中に隠された真理の宝を、私たちがよりよく理解し尊重すればするほど、真のキリスト教、つまりキリストの宗教は、ますますその価値が高まるだろうと思われます。しかしその確信に正しく到達するためには、あらゆる宗教を、同じ尺度で公平に計らねばならなりません。

＊

キリスト教は、そもそもの初めから、ユダヤ教と一定の関係にありました。この位置関係は、神学の比較研究において最初の課題となったばかりでなく、教養のない人々の関心すら引いて、二つの宗教の比較に向かわせる契機となりました。神的存在の概念、人間的なるものの評価、道徳の動機、不死への希望などにおいて、両者は異なっていますが、それでも多くのものを共有しています。旧約聖書の聖歌や祈りで、現在のキリスト教徒が一緒に参加できないものは、ほとんどありませんし、旧約の道徳律で、今はもう従わなくてよいというものも、ほとんどないのです。

＊

キリストの教えが、世界の最良の部分を征服したのは、それがほかの宗教のどの教祖にも勝れて、最初から至高の真理を表現していたからでした。そこで表現された真理には、ユダヤの大工であれ、ローマの取税人であれ、ギリシアの哲学者であれ、一片の後ろめたさもなく参加できました。しかし、キリスト教会はごく初期の頃から、信仰の外的な表現を狭く固いものにし、信頼と愛があるべきところに狭隘なドグマを置こうとしました。そのために、教会はしばしば、最良の庇護者となりえたであろう人々を失いました。キリストの宗教は、何をおいてもそうあるべき状態、つまり世界大の愛と慈善の宗教であることを、ほとんど辞めてしまいました。

＊

キリスト教の創始者は、何度も繰り返し、自分は破壊するためではなく、成就するために来たのだと主張しました。世界史の中でキリスト教がいかなる位置を占めるのか、また「時が満ちる」とはどういう意味なのか、こうしたことを真に理解するためには、この創始者はイスラエル人として生まれ、生き、死んだということを、いつも思い出さなければなりません。新約聖書に出てくる寓話や教訓の多くは、その由来が遠く調べられ、現在では旧約聖書を超えて、タルムードまで達するものがあります。新しいキリスト教の教義の意味を真に理解するのが、ユダヤ人以外の人にとって最初はいかに困難なことか、私たちは知っています。

＊

世界中のあらゆる宗教をみても、単純さにおいて、目標の純粋さや慈善において、また真の人間性において、キリストが弟子たちに教えた宗教に匹敵するほどのものは、どこにもありません。しかもなお、まさにその宗教が、いたる所で攻撃されていると言われています。このような不信が蔓延するおもな原因は、私に言わせれば、人間が自分たちの基盤を無視し、

本(ブック)に書(ク)かれない(レス)宗教を見ようとせず、「自然宗教(ナチュラル・レリジョン)」を軽視しているところにあります。私たちの歴史的な宗教が出現する以前から、自然で普遍的な宗教が存在すること、そして言語なしに詩文がありえないように、自然宗教なしには歴史宗教はありえないこと、などと語ろうものなら、高位の宗教者たちですら口を歪めるでしょう。自然宗教は、啓示宗教がなくても存在し得ますし、実際に存在しています。しかし自然宗教がなければ、啓示宗教は絶対に存在し得ないのです。

＊

自由な探求はあらゆるものを一掃してきましたし、これからも一掃していくことでしょう。その中には、正直で敬虔な精神の持ち主たちによって高く評価され、それどころか宗教の本質的な価値だとされたものすらあります。だからといって、その果実によって判断すれば、真のキリスト教が、現在は昔ほどの活力を失っているなどと、言えるでしょうか？　使徒の時代から現在にいたるまで、キリスト教会には、いつも同じような論争がありました。私たちはかつてそこを通過してきましたし、今もまたそこを通過しているところです。

＊

キリストの教えが誉めそやされているわけを考える時、私たちはもう一度次のように自問せざるを得ないと感じます。もしキリストが、自らの誕生や少年時代にまつわる寓話を聞いたら、何と言うだろうか。あるいは、自らの神聖な性格が「幼児の福音(エヴァンジェリア・インファンティエ)」の史実に当てはまるべく作られたものだと聞いたら、キリストはいったどう思うだろうか、と。

＊

キリスト教を覆う単なる外壁は、それが立っている地盤を守ることは、ほとんどできません。それは、いずれ取り除かれるべきものであるなら、最後には力づくで取り除かれます。そしていったん取り除かれると、しばしば信仰の力の一部もいっしょに取り除かれてしまいます。かつてそれらは教会を支える壁であり、生きた枠組みの一部ですらあったのですが。

＊

私たちがキリスト教と呼んでいるものは、いくつかの根本的な教義をもっています。それらすべての中でも最も重要なのは、人間の内なる神聖さ、あるいは別の言い方の方がよければ、「子」の神聖さを認めることです。神への信仰、「父なる神」への信仰、「世の創造主にして支配者である神」への信仰は、ユダヤ人によって作り上げられ、文明化したあるいはいまだ文明化していない世界中の多くの民族が、その信仰に到達しました。しかしキリスト教の創始者が、神を自分だけの父ではなく人類全体の父として「私の父」と呼んだ時、彼が語ったのは、もはやユダヤ人の言葉でもギリシア人の言葉でもありませんでした。ユダヤ人にとって、人間が神的存在の子であると主張するなど、神への冒瀆でした。一方ギリシア人にとって、それは一つの奇跡か、一つの神話的な出来事を意味するに過ぎませんでした。キリストは新たな言葉を語りました。それはたしかに、あらゆる言葉がそうであるように、誤解を招きやすいものでした。しかしその言葉は、それを理解する者には、全世界の相貌に新たな栄光を分け与えて、見せてくれるものでした。人間の内なる神聖さの発見というこの出来事は、人間の霊的(スピリチュアル)・精神的な情況を完全に変えてしまい、世界史を画する偉大な転換点となっています。しかしそれは、伝説の光暈に取り巻かれて、曖昧模糊となり、単なる神話的

な出来事にされてしまったために、ほんとうの意味がまったく忘却されることがしばしばです。したがって、正直で恐れを知らない探求によって、何度も発見される必要があります。キリストは、彼の生きた時代の言葉で、語らねばなりませんでした。しかもその言葉は、初期の弟子たちや、あるいは後期の弟子たちの心にすら、すでに廃止された古い意味の残響を、しばしば響かせています。キリストが「人間は神の子である」と語ったのは、ユダヤ人が考えたような冒瀆の意味ではなく、また彼を信じる多くの人々が想像していたような、あるいは今なお想像しているような、神話的な意味ではありません。「父と子」「神的なものと人間的なもの」、こうした表現は、新しいぶどう酒を容れることができない古い壜のようなものです。それなのに、なんとしばしば、世界に新たな生命をもたらす新しいぶどう酒よりも、壊れた古い壜のほうが大事にされてきたことでしょうか。

＊

キリスト教を、現実離れのした非歴史的なものとしてではなく、歴史とそこにおける人類の成長を組み立てる一つの部分として、正当に尊敬することを学んだならば、人間の中の神聖なるもの、あるいは無限なるものの探求のすべてが、キリストの単純な発言において、いかに完全に成就しているかがわかります。彼の説教は、生命と不滅とを、白日のもとに導きました。魂（ソウル）の生命、魂の不滅は、その時そこにありました。いやずっとそこにあったのですが、キリストがそう語ったことにより、生命と不滅は、はっきり目に見えるものとなり、人間はそれに完全に気がつき、自分たちの気高い生まれを思い出したのです。

＊

キリストの教えの第一の目的は、彼だけが神聖で、不滅で、神の子であると、他人に信じさせることではありませんでした。このことは、けっして忘れてはなりません。彼が人々に信じるよう望んだのは、彼ら自身のために、彼ら自身の再生のためにでした。「彼を受け入れた者たちに、彼は神の子となる力を与えた」とある通りです。人間のなかに神聖な要素を認めることは、一見、神聖なるものの概念を低くせざるを得ないと、思われるかもしれません。ある意味で、それは実際そうなのです。それは、神を私たちに近づけます。ユダヤ人や多くの異教徒の宗教においては、神聖なるものと人間とを完全に分離する深淵がありますが、キリストの教えはそこに橋をかけます。それは、寺院にかけられたヴェールを引き裂きます。ですからこれは、低くするとは言っても、神聖なるものを低くしているとは言えません。それは神聖なるものの概念の拡張であると同時に、人間的という概念の引き上げ、あるいはむしろ、人間と呼ばれているものの真の本性の回復、再生、第二の誕生なのです。キリスト自身が、「人はふたたび生まれなければ、神の国を見ることはできない」と言っています。

＊

宗教的な考え方の発達のプロセスには、たえず作用と反作用があります。はじめに、神聖なるものは、人間の心の及ぶ範囲をはるかに超えたところに、人間から分離して置かれれました。それにつづいて、分離した両者を結びつけようとする反作用が起こりました。このようなプロセスは、多くの宗教において観察できますが、とりわけユダヤ教からキリスト教への移行において、最もはっきり見ることができます。古代ユダヤ教ほど、目に見えるこの世界から、見えない神を遠くへ連れ去った宗教は、ほかにありません。そして「人間は神の子

である」というキリスト教の根本的な教義ほど、この両者を緊密に引き合わせて、ふたたび一つにしたものは、ほかにありません。

＊

キリストは、神学者たちに向かってではなく、ただの男たちや女たち、そして子供たちに向かって、語ったのです。ですから、彼の話を分類するには、神学者の専門的なやり方ではなくて、私たちの心臓を高鳴らせるのは何か、という基準にしたがうべきです。

＊

神との合一あるいは一致へのあこがれが、ほかの宗教において至高の目標になっているのを、私たちは知っていますが、しかしもしキリスト教を正しく理解するならば、つまり歴史的に扱うならば、そのことがキリスト教において最もよく承認されていることが、わかります。それは、人間はキリストと兄弟であるという私たちの信仰と、不可分のものです。さまざまな宗教において、人間の神へのあこがれは、不完全な表現形態をとっているかもしれません。しかしそれは、いつの時代においても、いかに未熟であれ、すべての宗教が湧き出してくる深い泉であり、また「自然宗教」が到達する至高の頂上でした。地上と天国、人間と神を隔てるかのような見える溝に、さまざまな橋が架け渡されてきました。それらは粗野で不完全なものだったかもしれません。ともかく、私たちは、多くの信仰深い魂の持ち主たちが、それらを渡ってよりより世界へ運ばれていったことを、信じてよいでしょう。人間と神の間の橋について語ること、たとえその橋を「自己（セルフ）」言い換えても、それらが比喩にすぎないのは、まったくその通りです。しかし比喩を使わずに、こうした事柄をどう語ればよいでしょうか？　「神のもとに帰る」というのも、「神の玉座の前に立つ」というのも、「キリストとともに天国にいる」というのも、みんな比喩です。

＊

キリスト教は一つの宗教として、比較研究に反対するよりは、その挑戦を受けて立つべきです。私たちがある教義について、これはキリスト教にしかない固有のものだ、と思っていたとします。もしそれが、ほかの宗教にもあるとわかった時、それによってキリスト教は何かを失うでしょうか？　ほかの宗教によっても同様に認識されたことによって、その教義の真理は害なわれるでしょうか？

＊

愛こそが、キリスト教全体の基調音であり、すべてに優る信仰であるように思われます。しかしこの世はいまだ、真のキリスト教からはるかに隔たっています。また自らに正直な人なら、自分がそうなりたいと願っている理想から、いまだはるか遠いことを知っています。もし私たちが、自称している通り真にキリストの弟子であるならば、はたしてこの世はいかなるものになっていただろうか、ほとんど想像できないほどです。まず私たちが学ぶべきは、自分たちはそうであると自称しているものではない、ということです。それができれば、私たちはともかくも他人に対して、もっと忍耐強く、寛容で、愛深くなるでしょう。相手が善意をもっていることを、信頼するようになることでしょう。天国には、そのような善意が満ちているのだと、私は思います。

＊

私たちの宗教は、たしかにほかの宗教よりも、よりよく純粋なものですが、しかし本質的には、すべての宗教は何か共通するものをもっています。すべては、何か彼方なるもの(サムシング・ビヨンド)があるという信仰からはじまり、そこに到達しようと目指しているのです。

＊

キリストが教えたことは、実にわずかのことでしたが、それでも十分でした。あとからそこに付け加えられたものは、どれも悪から出たものです。神を愛し、人を愛しなさい――これが律法のすべてであり、預言者が伝えたすべてです。これは信条や教理問答ではなく、論説や果てしない神学談義ではありません。私たちにそれ以上のものは要りません。このまことに単純な律法を守ろうと努力する人ならば、それがどれほど難しいか、一人の人生と全力を尽くしてもなお足りないか、よく知っています。　　（草稿）

＊

キリストの教えは、簡単に言えば「私は神の子であり、あなたがたは私の兄弟である」ということです。彼の人間観は新しいものでした。であるからには、彼の神観も新しいものでなければなりません。彼は人間性(ヒューマニティ)を高く引き上げ、神的存在(デイティ)を人間に近しいものにします。そしてこの不可分の性質と分離した存在のあり方を、この世が提供できる「父と子」という最も分かりやすい比喩によって、表現しました。彼がそう主張したのは、彼自身のためではなく、私たちのためです。彼が卓越しているのは、彼自身のあり方によってです。彼は、最初に「父なる神」を見いだし、ふたたびその「子」となりました。そして生と死を通じて父と一つのままでしたが、その度合いは、彼を信じると告白し、彼の模範に倣おうとする誰よりも、立派なものでした。　　（草稿）

＊

「イエスが神でなかったのなら、彼はただの人間だったのか？」と問う人々がいます。「ただの」人間？　神の創造の中で、人間ほど神の近くにあり、すばらしく、おそるべく、神聖なるものが、ほかに何かあるでしょうか？　私たちはむしろ、「イエスはただの神だったのか？」と問うべきかもしれません。人間たちが、一なる神をさしおいて、神々について語っているのを聞いてみなさい。止むを得ないこととは言え、それは何と惨めな神々でしょうか。神は一つです。そのほかに神々がいると思っている人は、一なる神を貶め、否定し、破壊するものです。一つ二つと数えられる神は、人間以下のものです。真のキリスト教は、言い表わすことも思い描くこともできない真の神の荘厳へと、人間の考えがかぎりなく近づけるよう、人間を神へと引き戻すことによって、神性(ゴッドヘッド)を貶めるのではなく、人間を高めるのです。　　（草稿）

＊

神の目的について、私の考えるところをあえて語ってみるならば、次のようになります。霊的に才能を与えられた者、謙遜な者、心の優しい者、自己の至らなさを痛感する者、自己犠牲に喜びを見いだす者、こうした者たちの魂を勝ち取ることは、神の目的ではありません。彼らはすでに神のものだからです。そうではなくて、知的な才能のある者、賢明で洗練された利口な者、こうした者たちの魂を勝ち取ることが、神の目的なのです。そのどちらをも勝ち取るのは、さらに良いことです。知的で賢明で、洗練されて利口な者たちの心を、もはや

捉えられない時が来たら、それはキリスト教にとって最悪の時代になるでしょう。すぐれて謙遜な知識人だけでなく、すぐれて高慢な知識人の魂までも、真の意味でのキリスト教は、勝ち取ることができなければなりません。キリストをほんとうに信じる者は、それが可能であることを、身をもって示す義務があると、私は思います。

訳者あとがき

本書は、比較宗教学の創始者とされるマックス・ミュラー（一八二三－一九〇〇）の死後、妻ジョージーナが読書界の熱心な要望に応えて、宗教と信仰に関するミュラーの文章を、著作や書簡や草稿から抜粋して、「手元における」ような形で編集したものの全訳である（Max Muller, *Life and Religion*, Doubleday, Page & Co., 1905. 何度かリプリント版が出ているが、最近では一九九五年にアリフォルニアの The Book Tree より刊行されている）。妻の緒言で述べられているように、膨大な著作や講演の端々、また書簡や草稿の随所から聞こえてくるのは、単なる学者にとどまらない、詩人であり求道者であり、人生の夜明けと夕暮れを見届けた人の肉声ともいうべき、達観した知恵と親密な信仰の言葉である。

＊

ミュラーは一般読書界にはほとんど馴染みのない名前であろうから、エピソードを交えて紹介をしておきたい。マックス・ミュラーは一八二三年、ドイツのデッサウに、詩人ヴィルヘルム・ミュラーを父として生まれた。ドイツやフランスの大学で哲学やサンスクリット語を学んだあとイギリスに渡り、オックスフォード大学で言語学を教授、世界的な名声を得た。退任後も惜しまれてオックスフォードに留まり、『東方聖典集』などの翻訳刊行に献身した。比較言語学、比較神話学、比較宗教学という、三つの大きな学問の祖に位置づけられており、とくに一八七〇年に行なった『宗教学入門／概論』という記念碑的な講演は、比較宗教学の旗揚げとされる。一九〇〇年、妻に看取られつつ「私は疲れた」という言葉を残して死去した。

日本との接点はいくつかあり、思いつくままにあげれば次のとおりである。まず、ミュラーは日本の近代的な仏教学インド学と、直接のかかわりがある。第一世代の南条文雄や高楠順次郎は、オックスフォードにおけるマックス・ミュラーの直弟子であった。次に、日本の読書界で一九世紀インドの聖者ラーマクリシュナは根強い人気があり、その高弟ヴィヴェーカーナンダも知られているが、友人のヴィヴェーカーナンダ経由でラーマクリシュナの価値を認め、いち早く西洋に紹介したのは、ミュラーの『ラーマクリシュナ』であった。有名なロマン・ロランの『ラーマクリシュナの生涯』はその四半世紀以上のちのことであり、しかもミュラーの同書をおおいに参照した作業であった。また、シューベルト歌曲集『美しい水車屋の娘』その他は日本でも人気が高く、その原詞の作者ヴィルヘルム・ミュラーの名も知られている。実はこの夭逝した詩人こそが、ミュラーの父親なのである。そして、言うまでもなく、比較宗教学の祖としては、高弟たちを経由して日本の宗教学に直接の影響を与えている。

一九世紀のキリスト教世界にあって、インドの宗教を研究・紹介し、それに最大級の評価を与え、さらに世界の諸宗教を比較し、その起源的あるいは目的的な一致を見通した人、「無限なるものの知覚」の試行錯誤たる諸宗教を素材に、近代的な比較宗教学を創設した人、あらゆる宗教がなにがしかの真理を分有すること、諸宗教は進化成長して大文字の宗教に至るであろうと確信していた人、そのような一代の大家が、どのような人生観・宗教観をもっていたかは、宗教学を学ぶ現代のわれわれにとって、無関心事ではありえない。まして、比

較宗教学の祖ミュラーは、自分の一生を「信仰を求める闘争だった」と述懐する求道の人であり、宗教が前世紀の遺物とされかねない近代世界にあって、全宗教に通底する宗教の「明るい面」を救い出そうとする信仰復興の人であった。

二〇世紀のとくに後半を通じて、日本の宗教学界でほぼ忘却（とはいわないまでも棚上げ）されていたミュラーの比較宗教学と、その底流にある信仰は、今読んでみると、ある意味で古代的あるいは現代的な知恵の言葉のようにも聞こえるし、別の意味では陳腐な説教の言葉のように聞こえるところもある。それは、一つにはミュラーによって立ち上げられた比較宗教学が、さまざまな成果を生み、自明の前提のようになっているからであろう。あるいは、ミュラーが諸宗教の聖者・賢者や神秘家の知恵の言葉に通じていたことから、われわれが現在たやすく見聞きすることのできる古今東西の知恵の言葉の残響を、そこかしこに聞き取るからでもあろう。これは一〇〇年前の書である。一九世紀キリスト教世界にあって、インド研究をテコにして、比較宗教を立ち上げた先駆者の、戦って勝ち取った信仰の記録として、まさに「歴史的に」読まねばならない。

＊

夫の著作の中から、心に響く部分を、花園から花を摘むように、妻が小さく編み上げた原著は、二人の睦まじい共同作業であり、はたから手を加えるべきものではない。訳しながら、同じような表現が再三出てくるのをみて、繰り返しがすぎるような印象をもったが、これは夫のそのような「胸を高鳴らせる」（訳書初版、二二九頁）表現に、妻が繰り返し共感していることを示すものであり、そのままの形で訳さねばならないと考えた。繰り返しそのものが、有意味なのである。また、感動する件りは、いわゆるさわりの部分なので、表現には趣向をこらしていることが多く、平均的な翻訳作業にあるような息抜きの部分が、ほとんどない。「地」や「語り」の文ではなく、「歌」の部分として、詩的な言い回しは、そのように訳そうと心がけた。ただ、あまりに訳文がくどくなりそうな場合には、やや軽めに流すように工夫した。

このように忠実に訳す方針で一貫しているが、編集者と相談の上、一般読者の読みやすさに配慮して、二つだけ手を入れている。一つは章の配置の入れ替えである。「キリスト教」の部分は、原著では初めの位置にあって（目次でいえば六番目）、当時のキリスト教世界に対しての発言として、力点がおかれた構成になっている。しかし現在という時代と、とくに日本という地域を考慮すると、この強調の意味はほとんどないか、むしろ逆効果ですらあるので、いちばん最後に移動した。宗教（学）史、キリスト教に関心のある方は、もちろん最後まで読まれるであろうから、この組み替えについて右の通りご了承いただきたい。もう一つは、原著では各節に出典が明記してあるのを、一般書としては煩瑣なため、「草稿」以外はすべて省略した。出典に「草稿」を残したのは、そこにミュラーの私的な信仰、とくに「前世（フォーマー・ライフ）」「来世（ネクスト・ライフ）」といった意外な言葉が頻出するからである。とくに「死」「未来の生活／生命／人生」「生活／生命／人生」「自己」「魂」などの章には、ミュラーのあまり知られていない特徴が濃厚に出ていて、注意を促すべきと思われた。

＊

本書にも多く採られているように、大部の伝記『生涯と書簡』（全二巻）には、心の琴線に触れる書簡が多い。なかでも、夭逝した夫の分まで生きたかのような、八十余歳まで長生した故郷ドイツの母への多くの書簡には、年を重ねるにつれ、感動的なものがふえてくる。このような知恵の言葉は、生きることに忙しい若者の心には響かないかもしれないが、人生が終わりに近づいた年配の人、あるいはさまざまな理由で死を身近に感じる人には、ミュラーの本意の通りに聞こえることだろう。最後に、その内から最も美しいものの一つと思われる一節を紹介しておきたい。

「誕生日はいつも、幸福の絶頂にあってさえ、悲しい側面をもっています。それは死に近づいていく駅舎です。人生の喜びでいっぱいの若い時は、このような考えは恐ろしいものですが、年をとるにつれ恐怖はだんだん薄れてきます。死後に残して行く数人の人々との別れよりも、先に旅立った多くの人々との再会の喜びが、大きくなってくるからです。今度の誕生日はお母さんにはとても悲しいかもしれませんが、この世は仮の宿りであり、すべては貸し与えられたものだという考えに、ますます親しむようになさらねばなりません。そして、先立った人々に対する悲しみに変わりはなくても、神があの人たちを親や子や友として私たちに送ってくださり、こんなにも長い間ともに楽しい時をすごさせてくださったことを、感謝なさらねばなりません。自分たちに最も親しい人々とともに過ごした幸せな年月を、人はたやすく忘れてしまいます。ただ与えられるばかりのこうした幸せな年月は、たとえ短かかったとしても、私たちはそれを受けるに値しないほどのものです。別れの辛さには何の慰めもないことを、私はよく承知しています。痛みはいつまでも残ります。しかし、人はその痛みに耐えることを学び、神が与えて下さったさまざまなものに感謝し、美しい過去の思い出やいっそう美しい未来への希望を与えて下さったことに感謝することを、学びます。……神が私たちにさまざまな試練を課すとき、神の御心にすべてを委ねる精神こそが、ただ一つの慰めであり、ただ一つの安らぎです。そうした精神でいれば、人生のいかなる軽い試練も重い試練も、耐えられるばかりでなく、有益なものになります。そして神への感謝と、生と死の喜びは、かき乱されないものになります。神にすべてを委ねることで得られる静けさと、溢れるばかりの平和が、あなたの人生の夕暮れを美しくし、明るく照らしますように、これがあなたの六八歳の誕生日にあたっての、私のただ一つの願いです。」（『生涯と書簡』第一巻、三七六頁）

＊

いくつか不明の箇所については、筑波大学の山中弘先生（比較宗教学、英国宗教史）和光大学の松村一男先生（比較宗教学、神話学）、静岡県立大学の金井寿男先生（哲学）、栗田和典先生（英国史）、マティアス・ファイファー先生（ドイツ文学）の各先生にお尋ねして、それぞれ丁寧なご教示をいただいた。記してお礼を申し上げる。また春秋社の鷲尾徹太さん

は、本書の部分訳を読んだ段階でミュラーの魅力と価値を理解され、出版企画を立ち上げて下さった。良書を翻訳紹介する機会を与えていただいたことに、改めてお礼を申し上げたい。

二〇〇三年一〇月五日

津城　寛文

書誌データ
2003 年 11 月 30 日　第一刷発行
著者　マックス・ミュラー
訳者　津城寛文
発行　春秋社
ISBN 4-393-29153-0
本文 240 頁

筑波大学附属図書館リポジトリ版へのあとがき

本書の初版が出た 2003 年は、ミュラー没後ほぼ百年に当たる。本書を翻訳する意義、さらに広げて、今日マックス・ミュラーを取り上げる意義について、宗教学との関連で、若干補足しておきたい。というのも、一般読書界ばかりでなく、ミュラーを学祖とする比較宗教学の世界においても、ミュラーの「人と思想」があまりに忘れられているからである。神話やインド宗教の専門家が比較的よく知っているほかは、またせいぜい名言（「一つの宗教しか知らない者は宗教を知らない」）が知られているほかは、ミュラーの名前だけ知っていて敬遠する、という宗教学研究者が、訳者を含めて多かった。

これは、学祖というあまりに高い地位と、第一、第二世代の紹介が「無限なるものの知覚」といった宗教の定義や、『宗教学入門／概論』の紹介に偏っていたため、堅苦しい印象をもたれていたからかもしれない。少なくとも私はそうであったが、たとえばミュラーに『ラーマクリシュナ――その生涯と教え』（1898）という小著があること、しかもそれがラーマクリシュナが 1886 年に没して間もなく、ラーマクリシュナの高弟ヴィヴェーカーナンダから送られた資料をもとに、ミュラーが最晩年にまとめた先駆的な仕事であること、などを知っただけでも、この印象はずいぶん変わったにちがいない。

宗教学説史からみて、ミュラーのピークは、1870 年のウェストミンスターにおける講演、『宗教学入門／概論』*Introduction to the science of religion* である（1873 年刊）。この賛否両論を巻きおこした講演でミュラーが比較宗教学という新たな学を立ち上げた、というエピソードだけでなく、1894 年の世界宗教会議（シカゴ）に際して、あたかも自ら立ち上げた比較宗教学の希望の預言が成就したかのような感慨深い祝辞を送っていること、そして友人のヴィヴェーカーナンダがそこでも大活躍をしたこと、こうしたエピソードを考えあわせていくと、高齢の先生が「ミュラーにそんな一面があったとは知らなかった」と感想を述べられたように、ミュラーの印象はさらに変わってくるだろう。

一世紀前の本書が現在どのような価値をもつのか、再刊の事情が一つの指標となることがある。調べてみると、近年ではブック・ツリー社版が出た（Max Muller, *Life and Religion*, The Book Tree, 2nd edition, 1995）。オリジナルとのテキストの違いは、ポール・タイス（Paul Tice）によるイントロダクションがついていることと、裏表紙に宣伝文がついただけであるが、一世紀前の歴史的書籍の現代的意義を考えるために、このイントロダクションや宣伝文は示唆的である。

この出版社が扱うジャンルをみると、ニューエイジ（日本でいう精神世界）に属する書が多い。そのリストの中に、比較宗教学の祖ミュラーという、このジャンルの中において見れば、かなり地味な人物の書が入っているわけである。ニュー・エイジャーが本書を「スピリチュアルな著作のダークホース」（裏表紙の宣伝文）と呼ぶのは、一方ではこの地味さを語っている。他方また、裏表紙の宣伝文で「信じられないほど」の知恵、「かつて印刷された中でも最も重要な霊的文書の一つ」と述べているのは、誇張を差し引いても、学者の著作に対するニュー・エイジャーのコメントとしては、最大級の敬意といわねばならない。なぜなら、多くのニュー・エイジャーたちにとって、哲学・思想や宗教を扱うほとんどの学者は、スピリチュアルな意味では取るに足りないものとされているからである。

ミュラーが述べているのと同じことを言うだけなら、宗教的な文書に通じた少なからぬ現代人や、「スピリチュアルな文書」に生半可にでも通じたニュー・エイジャーにも、できるかもしれない。私のような者ですら、どこかで見聞きしたような意味の文章が多い。そうでなければ、多少の余裕をもって翻訳することはできないだろうが、これはむしろ、比較宗教＝比較神学を実践したミュラーのスタイルが、ニュー・エイジャーのレヴェルまで広く一般化した結果というべきかもしれない。「私の一生は信仰を求める闘争だった」というミュラーの述懐の意味するところは、宗教というものを文化財・文化遺産のように取り扱う人々には実感できないところがあるだろうが、ニュー・エイジャーにとっては無視できない発言であろう。

＊

2000 年は、ミュラーが 1900 年に没して百年目という、記念すべき年であった。ちょうどそのころ、私は思いもかけないところから、ミュラーと接点をもつようになった。

一つは、近代スピリチュアリズムの重要な古典（W・S・モーゼス『霊訓』 Moses, *The Spirit Teachings*, 1883）を扱うプロセスで、ミュラーとのニアミスの可能性に思い至り、ほとんど無知であった学祖について、調べ始めたことである。

もう一つは、その頃、ミュラー宗教学に共感する若い友人と出会ったことである。若さに似合わぬ知識をもった彼は、珍しくミュラー派を自称し、ミュラーを調べ始めたばかりの私に、魅力的な肖像を紹介してくれた。

いよいよ「比較宗教学」と「近代スピリチュアリズム」の関係についてのエッセイを書き始めると、非常勤を担当していた駒沢大学図書館に（仏教学の拠点校としては当然のことながら）ミュラーの著作が網羅されているのを見つけ、本を探しまわるという手間はまったく省かれた。中でも面白く読んだのは、宗教学プロパーの主著群とは別の、『ラーマクリシュナ』『生涯と書簡』（二巻）『人生と宗教』の三冊である。一冊目については、私自身ラーマクリシュナの古いファンだったため、ミュラーがラーマクリシュナを最初に評価したことを知って、急速に親しみを覚えた。二冊目は、伝記のつねとして人間ミュラーを身近に感じさせるものであった。三冊目はご覧のような親密な信仰の書であり、比較宗教学はこのような信仰をもとにすることを保証してくれた。

このような良書を翻訳する機会を得たのは、思いもかけなかったことで、学祖ミュラーとの出会いは、予期せぬ成り行きが重なった結果であった。不十分な翻訳紹介ながら、多くの方がミュラーの魅力に気づかれる一つのきっかけになれば幸いである。

なお、近代スピリチュアリズムとミュラーとの接点に関しては、『＜霊＞の探究――近代スピリチュアリズムと宗教学』（春秋社、2005）の１章としてまとめてみた。あわせてお読みいただければ幸いである。

2017 年（丁酉）8 月（戊申）15 日（甲戌）

津城寛文

筑波大学附属図書館リポジトリ版　2017 年 8 月 15 日公開